

寛政重修譜

牧野古白

田三 マタ田藏 左衛門尉成時 號古白

某

傳左衛門 田三 後傳
藏左衛門尉成三
ハ成方ニツクル

某

田三 傳藏 今ノ呈譜信成ニ作ル

某

田次 傳次

某

牧野十兵衛正意祖

これによれば、新次、新藏の兄弟なし、また傳藏、傳次は傳左衛門の弟なりと云ふ説もあるが、年代の上からはその方が當つて居る、然し諸書に傳左衛門と云ふ名は見えて居らぬ。

寶飯郡八幡村の八幡宮の文書に

於八幡之内貳拾貫文永代

奉致寄進所也仍如件

大永五年六月廿一日

牧野田三

平信成花押

(牧野信成寄進狀)

於八幡之内貳拾貫文永代
奉致寄進所也仍如件
大永五年六月廿一日
牧野田三
平信成

(藏宮幡八 村幡八郡飯寶)

八幡大菩薩院

八幡大菩薩

といふがある、これを見ると、當時主として田三信成が事を執つてゐた事が知らるゝ。

宇理城主

○宇理城主は備中守直盛、或は兵庫頭忠重ともあり、宇理城址の碑には直長と刻してある、朝野舊聞哀稿に引く貞享天野彦右衛門書上には、備中守直利と記し、御年譜附尾、徳川記等には、備中守とのみあり、(熊谷氏の菩提寺中宇利の慈真嶽宗俊大居士、享祿四年辛卯十月二十日、宇利城主熊谷備中守ミ云ふ位牌がある)、貞享菅沼主水書上には、兵庫頭忠重とある、寛政重修譜高力氏の系圖に、直長、兵庫入道法名蓮貴、宇利熊谷と稱すとして、高力備中守重長の祖父に當てゝある。宗長手記、大永二年と思はるゝ條に「本坂といふを越て西郷宿所、あないして熊谷越後守館勝山一日ありて連歌あり云々」といひ、大永六年三月三日、今橋牧野田三の所に「此所一日熊谷越後守來り物語夜更侍りし」とあるは、一族の者であらう。(高力氏の條参照)

○宇理城に討死したる親盛を、その子親次となす書もある、また宇理城址に在る墳墓は、寛保三年に建てたるものなるが、これにも松平左京進親次戦死としてある、然るに松平福略譜の親盛の條に「享祿三年秋、清康君三州宇利之

宇理城に討死せる親盛の事

城主熊谷備中守直利ト御合戦之節、一手之大將トナリ、誓約シテ今日之戦不可一步引之、誓言鎧之綿嚙ニ付、敵陣ニ亂入シ、敵餘多討取主従共々十余人討死云々、時ニ親盛二十八歳とあり、親次の條に「幼年ヨリ清康君ニ奉仕、天文二年三月廿日清康君、廣瀬之城主三宅右衛門、寺部城主鈴木日向守ト岩津ニテ御合戦之時、十三歳ニテ戦功有之ニ付、父ニ劣ラザルノ旨上意ニテ、鍵三郎次郎ト御呼アツバサル」とあるを初とし、多くの書皆親盛の討死と載す、唯不審なるは、福釜の寶泉守御先祖書の親盛の條に「大永四年申年爪生野熊谷が城へ御働キアリ主従十三人討死」と、年號は相違して居るが、親盛討死とあるに、其の墓と稱ふる五輪の表面に、天文九年庚子十月六日とし、裏面に福釜城主祖先松平右京亮親盛墓とあり、親次の墓には、天正三乙亥七月十一日とある事である、天正三年に親次の歿したる事は略譜の記する所と合へど、天文九年に親盛が歿したる由は甚だ訝しき次第である。(福釜松平氏の條参照)

○清康の墳墓に就いて異論あり、そは清康變死の際、從臣大河内喜平といふ者、その遺骸を奉じ、敵地上野、大給等の地を避け、遠く迂して松平氏と縁故ある大河内氏の領たる幡豆郡長繩觀音院に密葬したりと稱するものなるが、

清康の墳墓

今は普通の説に従ふ。

参河國幡豆郡長繩村觀音寺本堂裏に古墳あり、初め何人の墳なる事を知らず、寛政年間、寺僧共心無く木根など堀るとて地を堀たり。中に五輪



(寺念隨)墓院念隨に並康清平松

の石碑の如き石あり、堀出して見けるに清康君墓と誌したり。驚きて元の如く埋め置き、領主西尾侯の役所へ証へける故、西尾より公邊へ御達し有之、公邊より御役人御越し、西尾御役人も立會、彼墳を堀り、彼五輪を見れば、清康君墓と云ふ文字に相違なし。其より土を堀見れば、木槨の形あり、己に朽ちて手に觸れば、盡く碎けたり、其中に又木棺あり、棺の上に錢六文刀一腰あり、是の棺は木の性ありて碎けず、蓋を開き拜するに、麻の帷子を着たる如き御體あり。早々元の如く蓋し、五輪共に地へ埋め、其ほとり垣を結びて、寺僧は勿論西尾

役人彌大切に守護せよと仰付られて、公邊御役人は江戸へ御歸り被成、其後如何とも御沙汰無之(参河志)

清康の身邊

○宗長手記、大永六年三月廿七日の條に、尾張國守山、松平與一千句、清須より織田の筑前守、伊賀守、同名衆に、守護代坂井攝津守皆初めて、人數興有しなり」とあり、また大永七年四月に、安城一夜、松平與一尾州より爰もとにて一夜とある、松平與一は信定の事である。先きに擧げたる如く、信定の妻は織田彈正忠信定の女であり、その女が守山の城主織田孫三郎信光の妻なりといへば、品野をも領し、守山にも往來し、然も清康が岡崎に移りし後は、安祥をも守つて居つたものと思はる。されば守山の信光が、清康に款を通じたるのも、實は偽つて内應したのであつて、清康の尾張に入るを待ち、當時病と稱して上野に籠りし信定が、急に起つて旗揚をし、織田氏と相應じて清康を撃たんと企てたものとも推測せらるゝ、次の廣忠の條に引く松平記の文を見ても、恐くこの推測は當つて居るであらう。兎に角清康の一身は、老臣の諫に言へる如く、當時甚だ危かつたのである。

第七節 八代廣忠

廣忠

廣忠、幼名千松丸(仙千代ともある)、のち次郎三郎と云ふ、天文四年十二月五日、清康の守山に變死したる時、年僅に十歳。

井田野の戦

織田彈正忠信秀は、清康死せりと聞き、この月の十二日に、岡崎城を屠らんと、軍を進めて井田野に出で、大樹寺表に陣した。

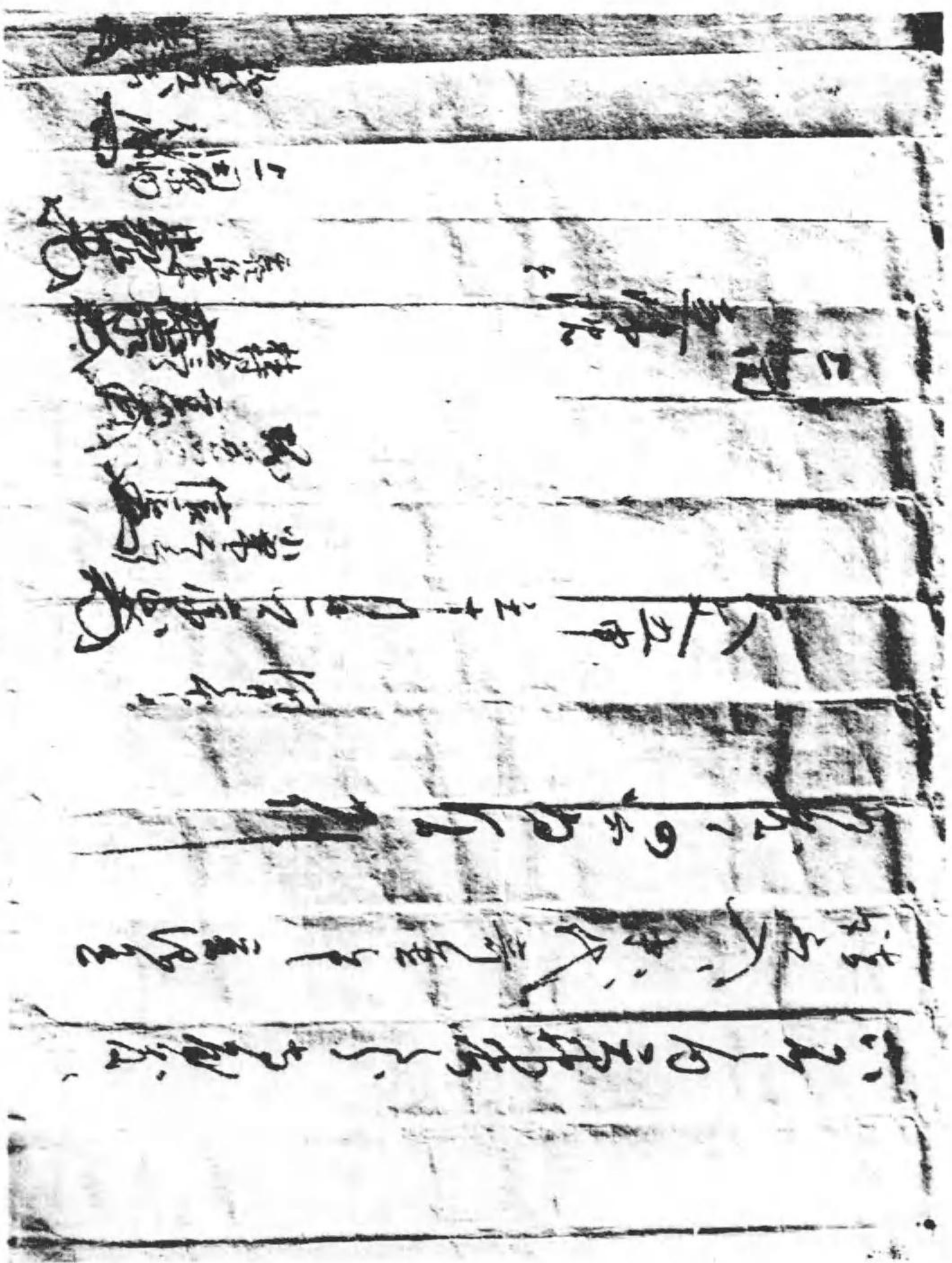
松平記に曰ふ、内膳殿(信定の事)も、一身にて岡崎を取らんも、御譜代衆の心知りがたく、又清康の御父、御隠居の御座候間不叶、只念比なりに被成御家中衆を相付候半とて、人之御譜代衆にけいはく被成候、去程に尾張織田殿は、内膳と縁者なれば、岡崎を攻おとし、内膳殿にまいらせて三河を手に入るべしとて、三河に出張し大樹寺邊に陣取ると云へる如くに、當時松平家中の士の心々必しも一致せず、岡崎の危き事、風前の燈火にも似たれば、そが中に義を辨ふる將士は、死を決して敵に當り、まづ差迫りたる難をのがれんと、廣忠の叔父藏人信孝、十郎三郎康孝を大將とし、伊賀八幡宮に祈願を籠めて井田野に向つた。

参河物語にいへる、森山くづれて十日も過ぎざるに、織田之彈正忠参河へ打出大樹寺に旗を立つる、その時森山にて追腹切んと申衆、我人追腹はこゝなり、若君様は城にて御腹を被成て城に火をかけさせ給へ、然れどもれうじに御腹を切らせ給ふな、各々打死を仕るものならば、敵方城へ押寄せて、二三の丸へ責入らば、其時御腹被成候へ、其より内は御腹を切らせ給ふべからず、我等どもはとて追腹を切り申上は、御城を罷出で廣き處へ罷出、浮世の思出に花々と戮死可仕、取こめられて此方彼方にて死するものならば、人も追腹とは申間敷云々と、敵は田方野方二手に別れて攻め來れば、決死の士八百の味方も、二手に別れて突いて懸り、血戦數合大に敵を破る、味方高力備中守重長、同新三郎安長、細井喜八郎勝重を始め二百五人討死した。

かくして漸く前門の虎は防ぎ得たれど、後門の狼たる内膳正信定は、自立せんとして頻りに岡崎の將士を誘ふ。是に於て廣忠の身邊危きを知り、命を君に捧げて我が子の大逆の罪を贖はんと、阿部大藏は、廿八日に廣忠を奉じて伊勢の神戸に走つた。神戸は東條持廣の領であつた。

翌天文五年三月、船にて伊勢を出で、十七日に遠州懸塚に至り、暫くこゝに潛

廣忠岡崎城を
出づ



(岡崎諸奉行寄進狀)

む、定吉弟の四郎兵衛定次と力を戮せて仕へた。

さて、吉良の東條持廣は、清康の妹婿なれば、先きに今川氏に廣忠助力の事を依頼した。そは松平記に、持廣は清康の妹婿にて御座候間、仙千代殿をいとしみ奉り、いろく御きも入被成、駿河今川殿へ御申、何とぞ御力を添へて廣忠を岡崎へ御移被成候やうに、くれく御申候と云へる如くであるが、なほ大藏も、駿府に至つて切に今川氏の援助を乞うた。かくて八月廿六日形ノ原へ移り、天文五年九月十日廣忠を幡豆郡茂呂の城へ入れた。松平傳十郎信勝は、泰親四代の孫なる太郎左衛門信吉が子ども、或は弟なりとも云ふ密に岡崎の家人の志あるものに結んで、廣忠に屬せしめんことを謀つた。櫻井信定之を聞いて大いに驚き、早く滅ぼさざれば後難あらんと、兵を催して茂呂城を攻めた。大久保新八郎忠俊、城中に矢文を放ち、岡崎の家人多く君に心を寄すれば、近くに岡崎に入れまゐらせん、暫く時機を待ちたまへとの由を告げた。信定も岡崎の將士の動搖を見て、一旦兵を引き岡崎城に入り、厳しく將士を制歴して誓書を書かした。特に大久保忠俊を疑つて伊賀八幡宮の祠前に於て七枚の起請文を書かした。かゝれば廣忠未だ入城の機至

らず、閏十月七日茂呂を出で、吉田に入り、更に駿府に到つて今川義元に面した。



廣忠岡崎城に入る

當時岡崎には、藏人信孝ありて事を執りしが、大久保新八郎、其弟甚四郎忠員、彌三郎忠久と謀つて、信孝及び十郎三郎康孝を懲慝し、いよく廣忠の岡崎入城を謀り、翌六年五月廣忠の歸國を促す、廣忠再び茂呂城に入る。是に於て謀熟したれば、信孝は知らざるまねして有馬の温泉に赴く。廿九日の夜、大久保甚四郎忠員、八國甚六詮實、林藤助忠滿、成瀬又太郎正頼、大原左近右衛門惟宗、迎として茂呂城に至り、六月一日、大久保新八郎忠俊は、本丸に在りし石川長右衛門兄弟を討ち、門を開いて廣忠を入城せしめた。廣忠十歳にして城を出で、十二歳にして再び



(藏所院海龍 崎岡)

歸るを得た。内膳正信定は、事の成らざるを知り、和を請ひ、八日に岡崎に來りて廣忠に面した。信定はこの翌天文七年十一月廿七日歿した。天文六年の十二月九日に廣忠元服し、松平次郎三郎と云ひ、今の名に改む。東條吉良持廣加冠した。此の頃、尾張の織田彈正忠信秀の勢盛んにして、西参河地方その壓迫を蒙る。安祥城は松平左馬介長家親忠の子、城主たりしが、兵寡きを以て、松平原次郎信康、廣忠の弟、松平彦四郎利長、松平外記忠次、松平甚六郎康忠等をして援けし

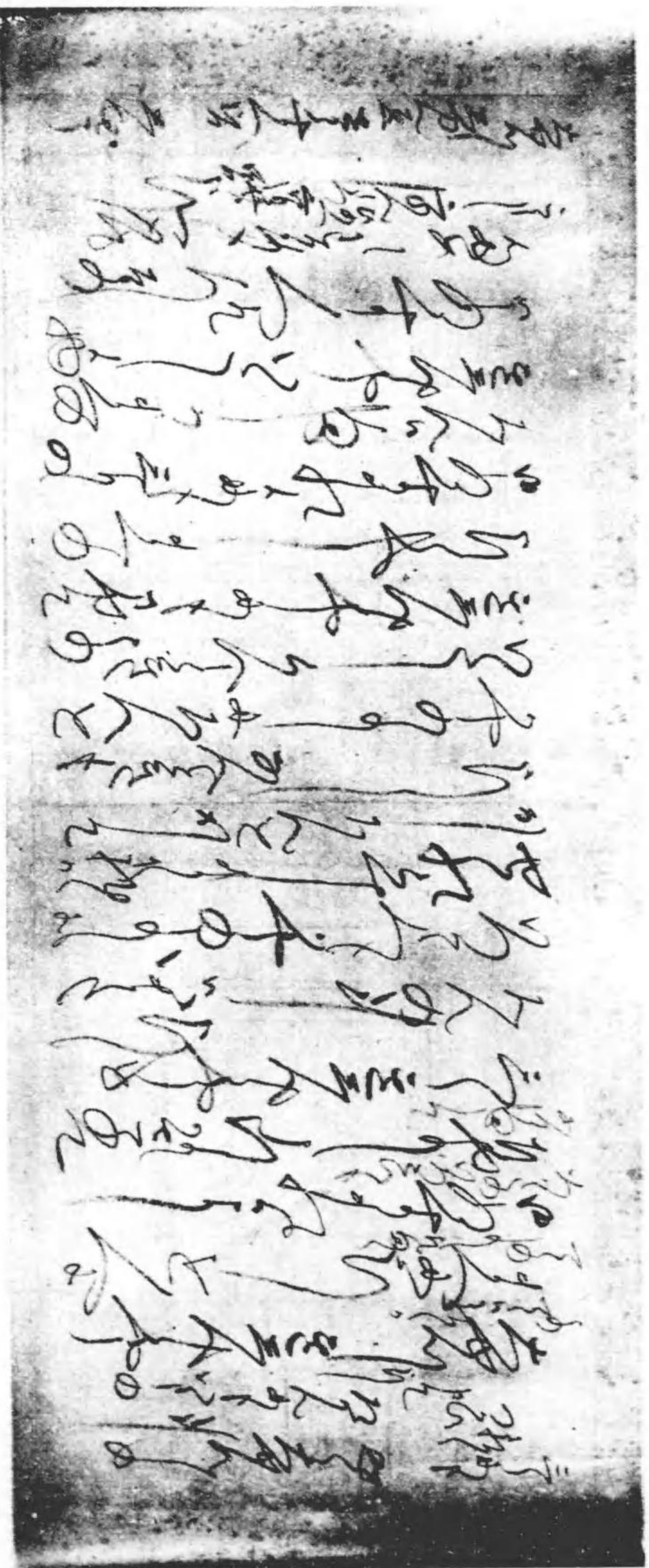
安祥城陷る



天文九年六月六日、信秀大舉して安祥城を圍む。長家等門を開いて突撃し、奮戦すれども利あらず、城遂に陥り、長家、信康、信忠をはじめ、譜代の士林、藤助忠満、渡邊助右衛門照綱、本多彌八郎正定、その弟彌七郎正行、内藤善左衛門、近藤與一郎、足立彌市郎等五十餘人討死した。

佐崎(佐々木)の松平三左衛門忠倫は、信秀に降り、渡理筒針に塞を構へて岡崎の敵となつた。

天文十年、廣忠刈谷城主水野右

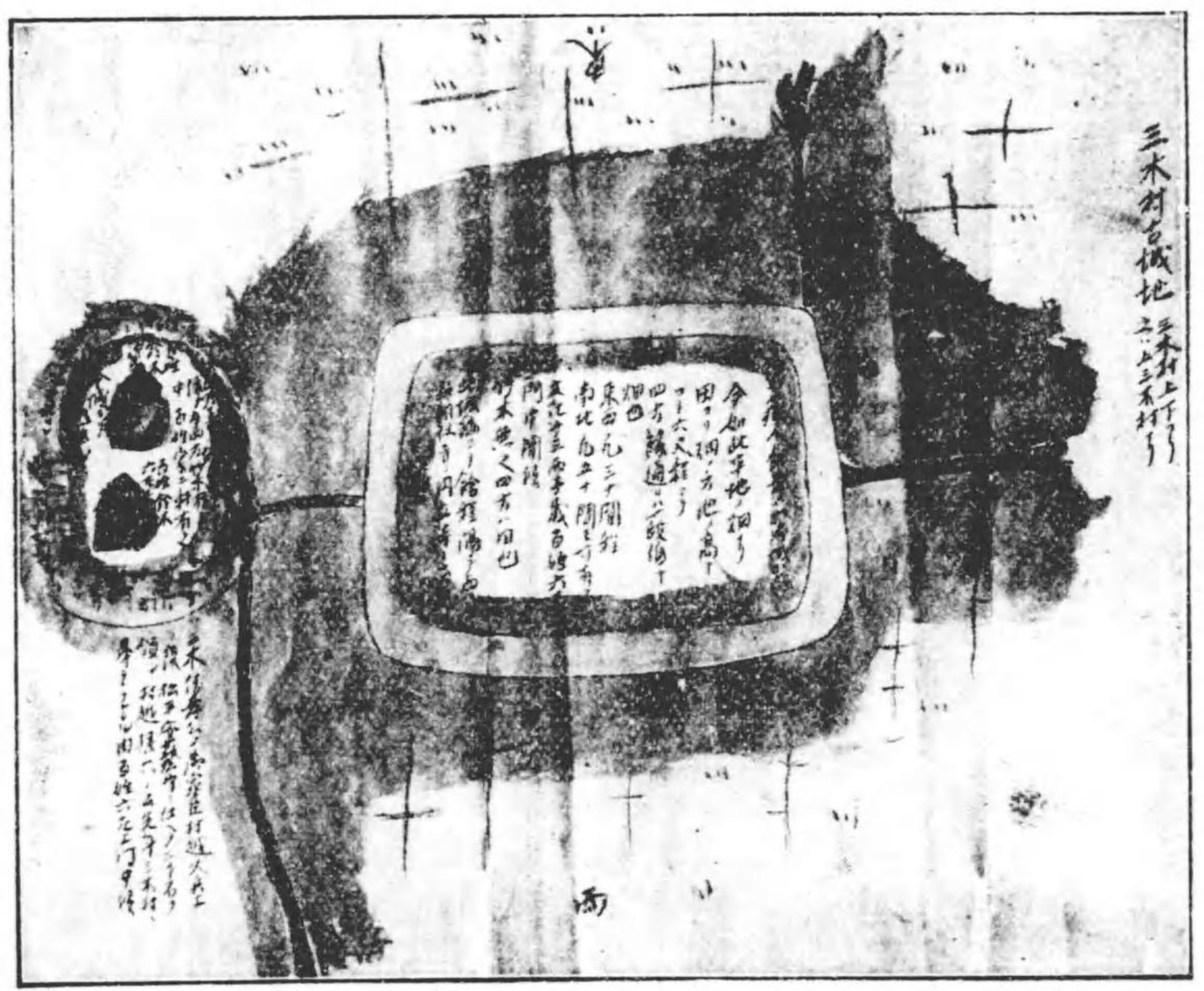


(傳通院書狀)

廣忠婚を結ぶ

小豆坂第一回
戦

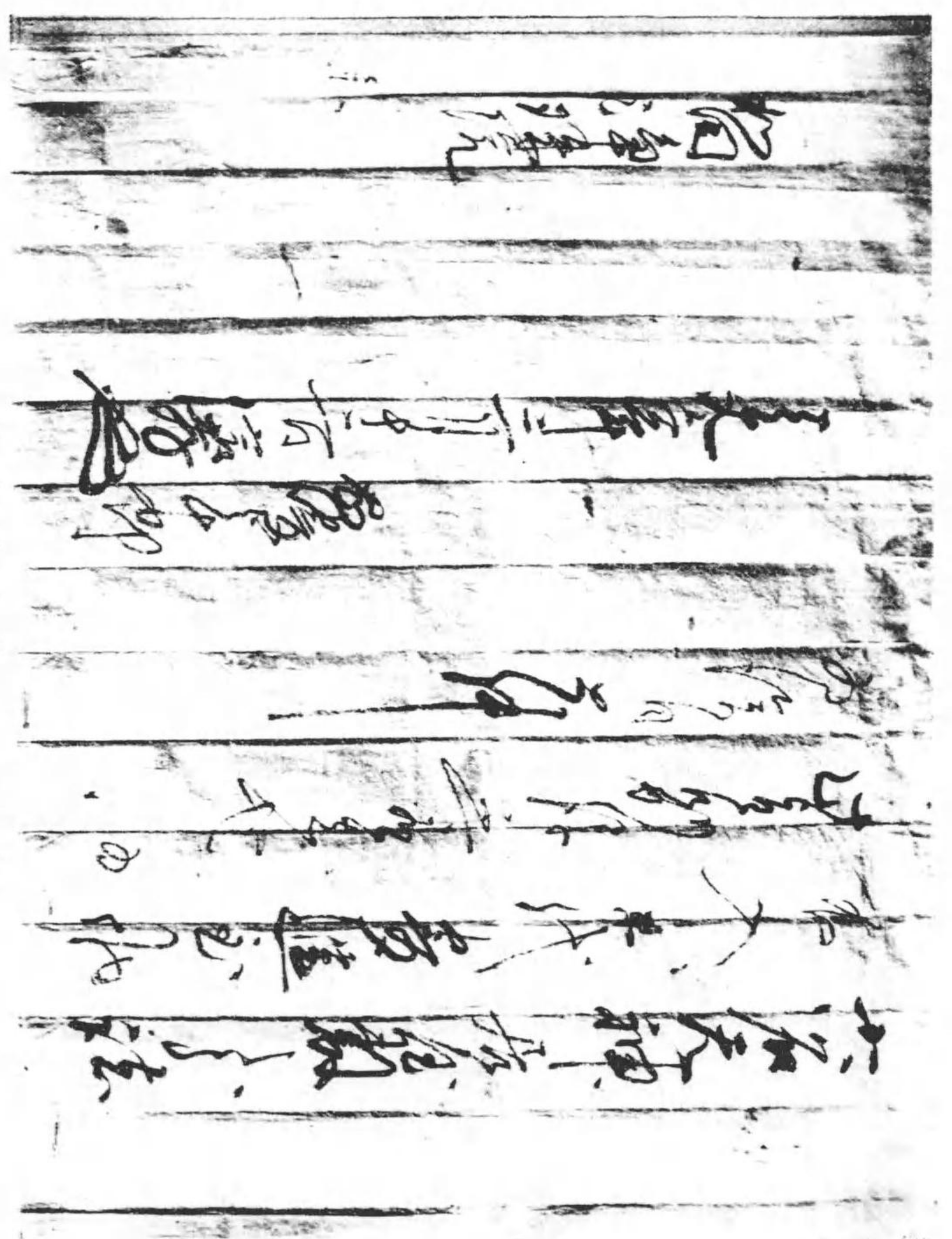
衛門大夫忠政の女を娶る、お大の方と云ふ。傳通院夫人がこれである。廣忠はじめ大給の松平左近丞乗正の女(お久の方、法名妙琳)を寵して男子を儲く、幼名勘六、長じて松平右京大夫忠政と稱へた、のち家康の誕生と同日に、男子生る、僧となるはじめ頼新のち惠最と云ふ、桑谷村廣忠寺の開山である。天文十一年八月十日、今川義元大勢を率して尾張に入らんとし、西參河に打つて出で、生田原に陣を取る、織田信秀之を聞き、弟津田與二郎信康、同孫三郎信光、同四郎次郎信實等と矢矧川を渡つて上和田に陣し、將に馬頭原に出んとして兩軍小豆坂に合戦す、今川勢、松平軍と共にまづ突撃し、織田氏の軍破れて盗木に退き、名護屋孫四郎秀宗、永田四郎右衛門重宗等討死す、之を見たる孫三郎信光、織田造酒丞信房、槍を提げてまづ進み、つづいて岡田助右衛門直教、佐々木隼人佐勝通、其弟孫助勝重、中野又兵衛忠利、下方孫三郎匡範、長槍を揮つて奮戦し、織田氏の總兵また反撃、今川氏の軍披靡す、松平氏の兵之を救はんとして、松平隼人佐信吉、その子傳十郎信勝(或は勝吉ともある)戦死す。義元志を得ずして一旦岡崎に入り、程なく駿河に歸り、信秀は上和田に退き、更に安祥に入った。此役信光以下を稱し小豆坂七本槍といふ。



竹千代生る

十一年十二月廿四日、織田氏の兵夜に乗じて碧海郡上野の城を襲ふ、城主内藤彌次右衛門清長の姪甚一郎（のち四郎左衛門正成）敵數十人を射殺す。正成この功により幡豆郡羽角村を賜はつた。

此の年の十二月廿六日に、竹千代誕生あり、酒井雅樂助正親（當時正家）胞刀の役、石川安藝守清兼（當時忠成）墓目の役を勤む。天野清右衛門貞有の妻乳母となる。東榮鑑には渡村の清



（藏所院珠浄田和上）

（松平信孝寄進狀）

水孫左衛門の妻乳母となるとある。

風呂谷御所、神君様御誕生所、二の曲輪、舉母櫓の下なり。往古女中等も差

置候御部屋也。御産湯之水、谷下之井、今坂谷透門之下此水御用也、井守社あり。

翌十二年二月、お大の方岩津妙心寺に薬師の銅像を寄進して、幼児の長生を祈つた。

藏人信孝叛く

初め合歡木、三ッ木の松平藏人信孝は、廣忠を岡崎に入るゝに功ありしを恃んで驕慢、第二の信定を出さん有様であつた。天文十一年三月十八日に、淺井の十郎三郎康孝が歿したる後、その領地を押領し、ますます強盛を致した。是に於て廣忠は信孝の駿府に赴ける留守に乘じ、天文十二年八月廿七日に三ッ木城を攻め落し、其の領地を奪つた。(三ッ木の落城は八月廿七日なる事は、大久保家譜並に別集に、彌三郎忠久が八月廿七日に三ッ木城を攻むる時、城を乗越て戦死とあつて、この時に落ちたのである)信孝歸來し、この有様を見て大に怒り、岡崎領を初め大久保氏の領地を掠め、遂に三左衛門忠倫に依つて信秀に通じた。信秀喜び、兵を出して上和田に三左衛門を置き、大岡の砦に信孝を置いた。

因に、此文書中の人々は、もと三ッ木に仕へたるものなれど、廣忠に歸したる賞として充て行はれたものである。

此の年廣忠、供御料の田租を獻進した。

刈谷の水野忠政は、天文十二年七月十三日に歿し、其子下野守信元家を嗣ぎたるが、十三年九月に至つて、信元は今川氏に叛いて織田氏に屬した。是に於て廣忠は、今川氏に對する義により、その夫人を大歸せしめた。形原の紀伊守家廣の妻も、忠政の女であつたが、これも亦離別する。止むなきに至つた。廣忠は天文十四年に、田原の戸田彈正少弼康光(宗光と云ふを正しとす)の女眞喜姫を妻とした。眞喜姫は龍海院年譜に、元龜貳年三月晦日に歿したとある。

天文十四年九月二十日、廣忠如何にもして安祥城を復せんと、清繩手に兵を出す。織田信秀、後詰の兵を率ゐ、城中の兵と廣忠を挾撃つ。廣忠甚だ危し、本多平八郎忠豐、廣忠が扇の馬標を乞受けて討死し、阿倍四郎五郎忠政(初め大久保氏)、大久保新八郎忠俊、松平彌九郎忠次また奮戦し、廣忠漸く免るゝを得た。これより先、酒井將監忠賀、忠尚ともあるは、廣忠岡崎入城の後、大久保新八郎、

廣忠水野氏を離別す

上野城攻

(三ッ木城ノ諸士ニ金銀分與ノ狀)

阿倍大藏等の勢力あるを惡み、また石川安藝守、酒井雅樂助に恨む所ありて、上野の城に籠つて廣忠に叛き、岡崎城を襲はんとする由を聞き、天文十五年九月六日、廣忠の兵押寄せ、廣久手に於て烈しき合戦あり、金田惣八郎(正祐)、阿倍四郎五郎(次重)、小林六郎左衛門(貞正)戦死し、中根甚太郎(正恭)、渡邊源太左衛門(高綱)功あり、城遂に陥り、忠賀降る。廣忠其の罪を許して上野に置く。

此の年十月、吉田城に在りし戸田金七郎を攻めん爲め、石川式部、酒井將監、阿部大藏等出陣し、今川の將天野安藝守と共に城を攻落す、義元、大原肥前守資良をして城代たらしめた。吉田城は、先に清康陥れて、牧野傳兵衛を置きたるが、天文六年、戸田金七郎再奪うて在城し、今に及んだのである。戸田氏と姻戚上の關係ある廣忠の軍が、この城攻に参加せるは、今川氏に對する義理の上からと見るべきであらう。

天文十六年に入り、織田信秀は、安祥より軍を進めて岡崎を屠らんとし、まづ藏人信孝をして兵を出さしむる由の風聞もあり、松平三左衛門、忠倫も、上和田より岡崎に迫らんとする由聞えたれば、廣忠、石川安藝守、清兼(當時忠成)天野甚右衛門、景恒を使として、今川義元に援を乞うた、義元は元來西上の大志

を抱き、これが援助を承諾したれど、質子を容れんことを求めた。廣忠苦慮萬般、遂に年六歳なる竹千代を駿府に送る事に決した。

是に於て、竹千代は、八月二日に、松平與一郎忠正、平岩七之助(親吉)、同助右衛門(親長)、天野又五郎康景、阿倍徳千代(正勝)、上田慶宗、金田與三左衛門(正房)等、二十八人を随へ、西の郡より舟にて田原に渡り、それより、陸路駿府に入らんとした。然るに戸田彈正少弼康光は、その子の五郎政直と謀り、従者を欺き、偽つて舟に乗せ、尾張の織田氏に送る。只阿倍徳千代のみ従ふ、信秀大に喜び、賞として政直に五百貫文を與へた。参河物語に、竹千様御歳六才の御時、しち物として駿河に御下向被成けり、然間、西之郡にて御舟に召されて、田原に上らせ給ひて、田原より駿河に御下向可被成との儀なり、田原の戸田少弼殿は、廣忠の御ためには、御舅なり、竹千代様の御ためには、まゝ祖父なり、然れども少弼殿、小田の彈正の忠江永樂千貫文にて竹千代様を賣られさせられ給ひて、御舟に召してあつ田の宮にあがらせ給ひ、大宮司あづかり給ひて、明之年迄おはしますと、これには千貫文とあり、また百貫文とあるのもある。かくて、信秀は、竹千代を熱田の加藤圖書順盛の家に預け置いた、金田與三左衛門

龍海院
松平三郎
御舟に召してあつ田の宮にあがらせ給ひ、大宮司あづかり給ひて、明之年迄おはしますと、これには千貫文とあり、また百貫文とあるのもある。かくて、信秀は、竹千代を熱田の加藤圖書順盛の家に預け置いた、金田與三左衛門

は、如何にも無念に思ひ、竊かに竹千代を奪はんとし、顯はれて害せられ、死骸は熱田三田ヶ橋に磔にかけられた。

此時河野藤藏(氏吉)と云ふ者があつて、竹千代をさまざまにいたはり、小鳥など献じて慰めた。又當時尾張知多郡阿古居の久松佐渡守俊勝に嫁してゐたる竹千代の生母は、屢々使を來して慰問し衣服菓肴の類を送つた。

次の記事は後の事ながら、附加へこゝにしるしておく。

大高御出陣の道すがら、久松佐渡守俊勝が阿古居の館に通らせ給ひ、年を経て御母堂(傳通院殿)に御對面あり、俊勝もはじめて謁見す、君(家康)もいはれなき御程にて、御母公に別れさせ給ひ、こゝらの年月をかさねてふたゝび御親會ありしかば、おぼえず悲喜の御泪にむせび給ふ、御母公、俊勝が許にて設けられし異父同母の御弟三人をも進見せしめらる、君、我兄弟少ければ、此人々ゆくゝ頼母しくもおぼし召とて、松平の御稱號を許され、三州一統せば、この弟共を招きよせて、ともに軍功を建むと仰せらる、御母公この三人の中にも、長福は今年生れて襁褓の中より見え奉る事の嬉しさよと宣ふ、俊勝も種々おもてなしして物獻る、又俊勝が家臣平野久藏、竹内

久六の兩人も召出して御詞をたまふ、これはいまだ熱田におはしませし程、阿古居よりわづか一日の路程なれば、御母堂つねに君の御起居を問はせられ、御衣よりはじめ菓子類に至るまで進らせられしに、いつも此の兩人御使奉はり、後駿府にうつらせ給ひしにも、同じ様に御使つごめければ、今はた舊故をおぼし出て、かく御懇問ありしなり。(貞享書上)

信秀はやがて山口惣十郎弘孝を使者として、岡崎に來り、竹千代君は信秀の手中に在り、速に今川を離れて信秀と好を結び給へと云ふ、廣忠は、今に至つて今川との舊交を變ふる能はず、愚息の生死は意の如くせらるべしと答へた。信秀一時は憤りたれど、いつかは恩愛に曳かれて味方となる時あるべしと思ひ、ますく厳しく護らしめた。

田原城を攻む

今川義元は、いたく戸田氏の處置を怒り、九月五日、天野安藝守景貫(武徳編年集成には小四郎とし、後宮内右衛門と改むとある)を遣はし、田原城を攻めしむ、廣忠また此軍に與る、城陥る、伊東左近將監(祐時)を城代とした。朝野舊聞哀稿に引く所の岡崎領主古記には、天文十六年九月六日、今川より天野安藝守に被申付、廣忠卿と田原城主戸田氏を攻陥し、伊東左近を城代とす。又朝比奈備中

守なりと云ふ」とある。六日は、五日の誤であらう。

去五日於三州田原丹藏口一番ニ合鍵拔群之働甚以神妙之至也彌可抽忠功之狀如件

天文十六

九月十五日

義元

御宿藤七郎殿

去五日田原於本宿門際最前入鍵無比類走廻ニて甚以神妙之至也彌可抽軍忠之狀如件

天文十六

九月十五日

駿州義元判

天野小四郎殿

(以上古今消息集)

大岡郷山崎に新城を築きたる藏人信孝は、九月廿八日に渡理河原に打つて出でたれば、岡崎の兵河を渡つて防ぎ戦ふ、三河榮秀記に、松平藏人信孝、岡の城にて家人を集め、我不義なくして罪に入る條、以の外の事なり、其の上伯父を捨て二度廣忠を岡崎に歸せし事、我智謀の致す所なからずや、阿部大藏は

渡理の戦

一度敵に組し、彌七郎といふ小悴を以て清康を討せしなり、彼等をこそ成敗あるべきに、左はなくして加増せしめ給ふ事、廣忠義に背く愚人、其の上我は叔父也、父に同じ、父に同じき叔父の恩を請けたる我に弓引く條、天命如何にのがるべき、此度渡理に出張せば、定めし廣忠出陣せん、然らば押寄、有無の合戦し、彼を討て三州を乗取らば、東参河を給はるべし、諸勢勇めと下知す」とあるが、信孝の胸中はかくあるべしとも思はれた。

かくて岡崎勢、阿倍四郎五郎忠政、大久保七郎右衛門忠世等奮戦したれど、松平外記忠次、鳥居源七郎忠宗等討死し、岡崎勢利あらずして退いた。

岡崎古記に「三ッ木藏人織田に屬し、大岡郷山崎に新城を築き五百人籠る、是を大岡山崎の兩城とす、然るに天文十六年九月廿八日に岡崎へ押入らんと渡村へ押寄、渡の城には鳥井久兵衛、同源七郎居城、此時源七ゆつけ食をくひながら、あはてて甲を着ながら打出る眞甲、鐵炮にて打れ死す、是より渡河原に出、岡崎兵川向に出向ふ、此時味方の山本彌左衛門、近藤佐野右衛門、川中の柳をたてにして働ける、終に川をこへず山崎へ引、此とき松平外記討死、其時渡村の九郎左衛門と云百姓も出働討死す云々」とあり、諸書皆、鳥井久兵衛(ま

松平忠倫刺さる

た又次郎)を敵方となし、松平外記はこの久兵衛の爲に討たれたるものとなす、然るにこの岡崎古記の文には、久兵衛を岡崎方となせるものゝやうである。

此時また上和田に在る三左衛門忠倫、岡崎を攻めんとする由を聞き、廣忠は寛平三郎(後圖書とも云ふ)重忠を遣つて三左衛門を刺さしめた、松平記に、織田殿は、松平三左衛門に、岡崎を何とぞ攻落し支配有るべしと被仰付、御加勢あり、近日攻めらるべしと談合ある處に、此事岡崎に聞えしかば、廣忠ひそかに寛平三郎をよびて、上和田へたばかり行きて、三左衛門を切つて参候へ、是非とも頼と被仰、寛承り御請申上げ、上和田へ参り降参申度と申す、三左衛門殿、岡崎衆をあまた引付、最早何とぞ寛兄弟の中を引付候はんと、常に被仰候時分、平三郎参候間、大いに悦なされ、近くは近日岡崎を攻められんま、寛案内を頼由被仰付、御懇情ありて、御近所へ寄せ給ふ、誠に運の極也、其夜寛御近邊の座敷にふせり候へば、案内は悉く見置ければ、廣忠より被下候脇指にて、三左衛門殿わきつばを二脇差つきて逃れ出る、弟寛平十郎参りつれて、早々岡崎へにげ来る、上和田衆追かけられども不叶、寛は大高名いたし、無難罷歸

小豆坂第二回
戦



申候間、廣忠御感の餘りに、寛平三郎に御感狀被下、知行羽粟にて百貫給はると載せてある。年は暮れて天文十七年となつた。織田信秀は三左衛門倒れたる由を聞いて、大いに怒り、安祥城に來り、いよ／＼岡崎を攻落さんと準備を爲す、今川義元は、質は尾張に奪はれたりとも、廣忠の志は棄つるべからず、然かも此の際躊躇せば、松平氏は遂に信秀に屈すべしと、臨濟寺の雪齋長

老、並に朝比奈備中守泰能、同藤三郎泰秀、岡部五郎兵衛長教、眞幸ともある等を遣はし、安祥を攻めしむ。駿河の軍、御油、山中、藤川を過ぎて小豆坂に出づ、織田信秀は、其子三郎五郎信廣と上和田に陣し、又小豆坂を上らんとして、兩軍測らず相遭ふ、時は三月十九日であつた、今川氏の先陣朝比奈藤三郎、織田氏の先鋒信廣の軍を突破れば、信秀麾下を以て突いて出で、逐ひつ逐はれつ暫らく勝敗をわけかねたるが、機を見て、岡部五郎兵衛敵の側面に衝き入り、岡崎の將酒井雅樂助正親（當時正家）、また織田勢を突崩し、榊原彦内政成、今村彦兵衛勝長等奮戦す。信秀の軍遂に支へかねて上和田に退き、信廣をして安祥を守らしめて尾張に歸り、雪齋等も藤川に軍を引く。参河物語に、廣忠よりしち物はきたれども、そばより盗み取りて敵方へ賣申すことは是非もなし、其の故も織田と一身無き侍の義理は見えたり、此の上は廣忠を見つぎて加勢可有とて、臨濟寺の雪齋長老に各々を仰付て、駿河遠江東参河三ヶ國之人數を催して加勢あり、雪齋駿府を立つて藤枝に着、明れば藤枝を立出、大井河さよの山を打越、懸河に陣を取り、明ければ懸河を打立て、福路居、見付、天龍河を打越、其日は引馬に陣を取、明ければ引馬を立出で、兩手にわけて今切

と本阪を越て、吉田に陣を取り、吉田を立出で、下地の五井、小阪井、御油、赤坂を打過て、早や山中、藤川に陣を取りけり云々。彈正忠は、駿河衆の出るを聞て、清須の城を立て、其の日は笠寺、鳴海に陣取給ひて、明ければ、笠寺を打立給ひて、安祥に着せ給ひて、其より八萩河(矢刈)の下之瀬を越て、上和田の取出(砦)にうつらせ給ひて、明ければ、馬頭之原に押出して、合陣の取らんとて、上和田を未明に押出す、駿河衆も上和田の取出(砦)江の働きとて、是も藤河を未明に押出す、藤河と上和田の間一里あり、然る處に山道の事なれば、互に見出さずして押しけるが、小豆阪に駿河衆あがりければ、織田の三郎五郎殿は、先手にて小豆阪にあがらんとする處にて、鼻合をして互にござうてんしけり、然とは申せども、互に旗を立て即ち合戦こそ初まりて、暫くは戦ひけるが、三郎五郎殿打負させ給ひて、盗人木迄打たれ給ふ、盗人木には彈正忠の旗の立ちければ、其よりもり返して、又小豆阪の下迄うつ、又其より押返されて打たれけり、其時の合戦は、對々とは申せども、彈正忠の方は二度追歸され申、人も多く打たれたれば、駿河衆の勝と云ふ、其より駿河衆は藤河に引入り、彈正忠は上和田に引入り、其より安祥に引て、安祥には舍弟の織田の三郎五郎殿(按ずるに信秀)

の子であるを置き給ひて、彈正忠は清須へ引入給ふ、三河にて小豆阪の合戦と申し傳へしは此事にてありと述べてあり、岡崎古記に、三月十九日、今川勢と織田勢と小豆阪にて出合合戦有、甲谷にて軍勢數多打死す、今川殿方はちくさ野へ引き、織田勢は安祥へ退くとある。

山中城落つ

此頃(天文十六年とも云ふ)松平權兵衛重弘は、(西郷)彈正左衛門信貞の子に系けるもあれど、また三左衛門忠倫の弟とも云ふ)山中城に在つて織田氏に通じたれば、酒井雅樂助、石川安藝守、大久保七郎右衛門(忠世)等押寄せ、烈しく攻む、重弘守りかねて没落した。

耳取繩手の戦

大岡の山崎の砦に在りし藏人信孝は、小豆阪の戦織田氏に利あらざりしを見て、口惜しきことに思ひ、いでや我單身岡崎城を攻落さんと、五百餘騎を率ゐて、四月十五日に矢作の渡を渡り、羽根山より繪女房山を下つて妙大寺表に打つて出た、廣忠は信孝の押寄する由を聞き、酒井雅樂助正親、當時正家、石川安藝守清兼(當時忠成)に、二百餘の兵を與へて之を拒がしめ、更に大久保新八郎忠俊、五郎右衛門忠勝、石川新九郎正綱に命じて、究竟の射手七十餘人を豫め繪女房山の山陰に伏せしめ、信孝の山を下らんとする所を散々に射す

くめ、時を見て妙大寺に走り入つた。信孝怒つて之を追かくる所を待構へたる酒井、石川の兵は、先きに引きたる大久保等の軍と東西に挟み撃つ、信孝、大橋源五右衛門(或は大場彌五右衛門とも、鳥居又四郎忠次とも云ふ)が半弓に射られて討死した。之を耳取繩手の戦と呼んだ。

鳴野西野梅坪
八草の戦

朝野舊聞哀稿に、此年鳴原今は重原に作るに於て尾張の兵と戦あり、阿部四郎五郎忠政、敵將荒川新八郎が從卒を多く射殺す。

織田信秀西野に出張す、廣忠の士杉浦八郎五郎、渡邊左衛門五郎、阿部四郎五郎等能く戦ひ、尾州の軍利を失ひて退く。

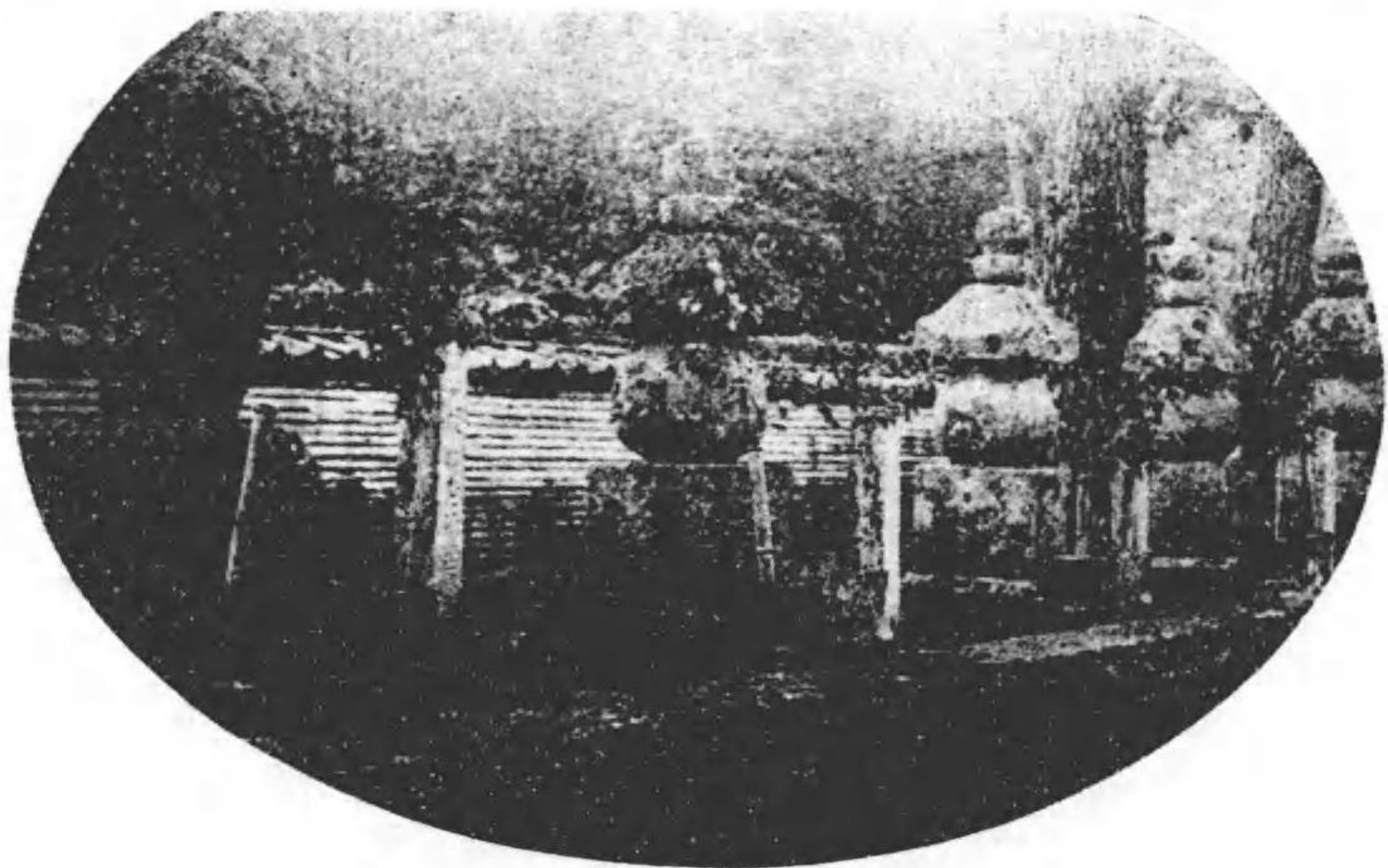
また梅坪の城を攻む、城主三宅右近正貞城外に出で、戦ひ敗走す。

八草の城主中條某と戦あり。

此の頃船手の要害として、大濱の郷に砦を築き、長田平右衛門重元をして警衛せしむとある。

廣忠死歿

天文十八年三月六日、かねて廣忠の側近くに仕へたる岩松八彌、一眼盲したれば呼んで片目八彌と云ふ者、不意に廣忠を刺して走り出づ、植村新六郎氏明、榮安外堀にて追ひ詰め、組んで堀に落ちたれど、遂に首を搔く、植村は清康



松平八代墳墓(大樹寺)

を弑せし阿部彌七郎を誅し、今また八彌を討つて二代の仇を報じた。八彌實は加茂郡、西加茂郡、廣瀬城主佐久間九郎左衛門全孝が遣はす所の刺客であつたことよつて此の年八月、天野孫七郎、廣瀬に赴き、偽り仕へて九郎左衛門を刺し、君の仇を報じた。

今度佐久間切候事無比類候、然者兼約之事候間、藤井隼人名田之内を以爲給五拾貫文出置候、於末代不可相違候、仍如件

天文十八より十月廿七日

阿部大藏判

石川右近將監判

(譜牒餘録)

廣忠年僅かに二十四、喪を秘して遺骸を大林寺阿彌陀堂におくり、更に能見原隣譽月光庵の前に密葬した。

安祥一回の城

今川義元は廣忠の死を聞き、岡崎危し、猶豫すべきにあらずと、雪齋長老並に朝比奈備中守泰能をして岡崎城に入らしめ、此の年の三月十九日、まづ大岡の城を攻落し、安祥城に迫る。守將織田信廣能く拒ぐ、岡崎衆大久保新八郎忠俊、阿倍大藏定吉、本多平八郎忠高等、先鋒となりて奮闘し、三の丸二の丸を攻め破り、將に本丸に入らんとす。真先に進んだる忠高は、前島傳次郎(定行)の矢に中りて討死す、年二十二。榊原藤兵衛また戦死した。

安祥二回の城

かゝる奮闘も効を奏せず、雪齋一先づ軍を岡崎に引く。九月に入り、雪齋等軍を出して、吉良荒河山(八面山の事)に陣し、安祥櫻井地方に出動して、織田氏を脅し、更に吉良氏を攻撃した。十月に入り、雪齋並に朝比奈備中守泰能再び参河に入り、安祥城に迫る。織田信秀之を聞き、平手政秀をして信廣を援けしむ、十一月九日、駿河の兵三方より挟み撃つ、岡崎の精兵五十三人、鎧を執つて奮戦し、遂に牙城に薄る、政秀術盡きて和を請ふ、竹千代と信廣との交換を約して許した。仍つて大久保

忠俊、忠勝、忠世等、信廣を衛りて西野に赴き、こゝに竹千代を迎へて岡崎に歸る。

雪齋乃ち井伊次郎直盛、天野安藝守をして安祥城を守らしめ、更に軍を轉じて上野端城(上野の端城の意か、或は上野とは別の地か不明)を陥る。

竹千代岡崎に歸る

竹千代尾張に在ること三年、漸く岡崎に歸るを得て、能見の原の父の墓前に額づき、小松一株を植ゑた。生別やがて死別となりたる胸中、察するに餘がある。

竹千代駿府に赴く

然るに、岡崎に在る事僅に十餘日、十一月廿七日(或は二十一日にも作る)、駿河に赴く、従ふ士には、酒井雅樂助はじめ、與四郎、或は與助、政家のち正親、内藤與三兵衛(正次)、天野三郎兵衛(康景)、石川與七郎(數正)、阿倍善九郎(正次)、同新四郎(重吉)、平岩七之助(親吉)、野々山藤兵衛(光政)扈從す、世に七人衆といへど、實は八人である。なほ榊原孫三(忠政)も従ふと云ふ、また鳥居彦右衛門(元忠)も、十三歳の時より近侍した。

岡崎の城代並に奉行

岡崎城には、城代として駿河の士山田新右衛門、田中次郎右衛門が居り、後に三浦上野介、飯屋豊前守と交代した。阿倍大藏(定吉)、鳥居伊賀守(忠吉)、松平次郎

左衛門重吉が奉行として事を執つた。岡崎古記に「岡崎城代阿倍大藏定吉、石川右近康正、奉行、鳥居伊賀守、松平次郎左衛門也」とあれど、共に奉行たりしものと思はるゝ。

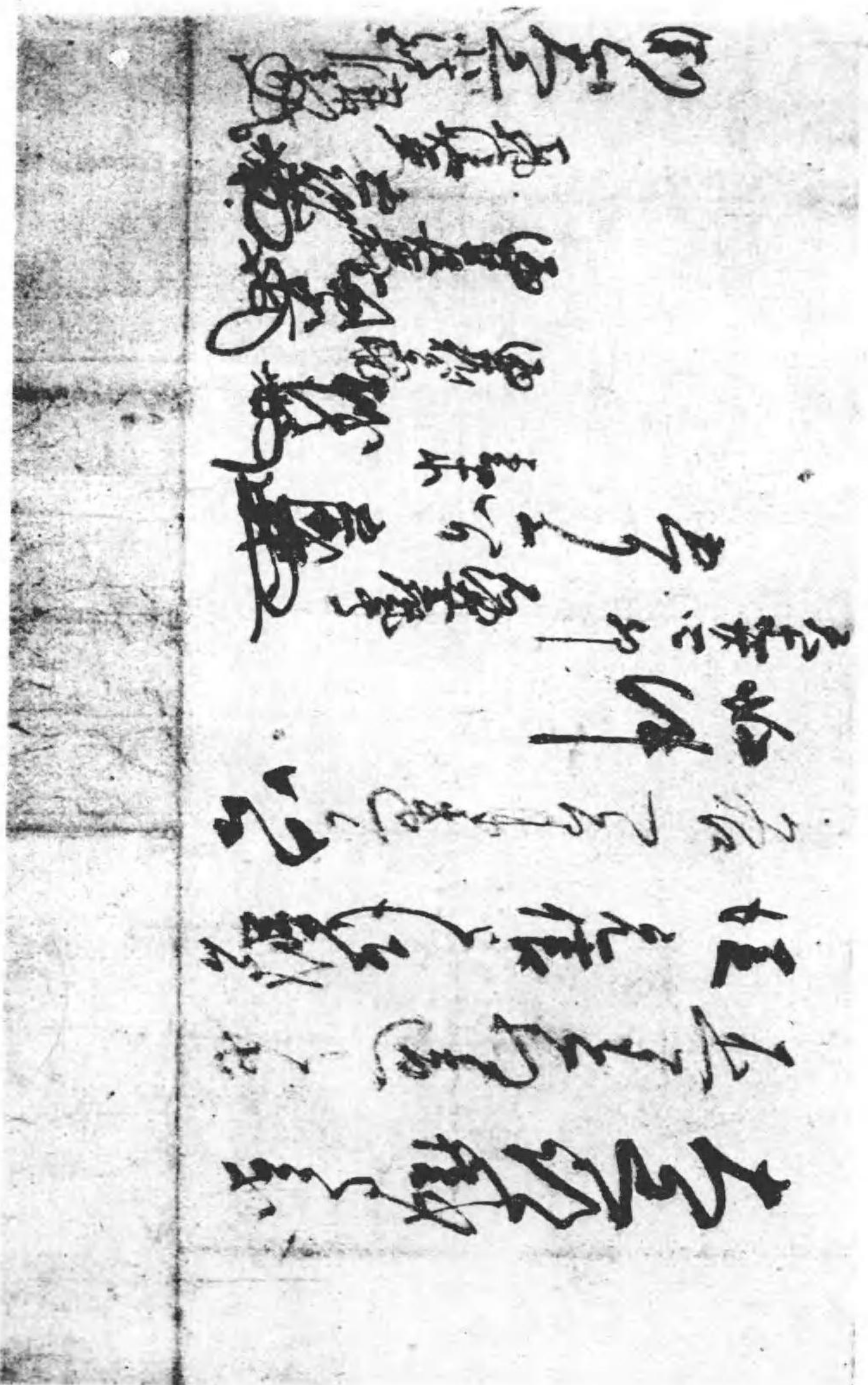
後には、石川安藝守清兼、當時忠成、青木越後守重道、酒井雅樂助正親(當時政家)、酒井左衛門尉忠次、天野清右衛門尉康親、酒井將監忠賀、榊原孫七(長政)が事を執つて居つた。

淨妙寺文書に

上和田之内てんはく之事廣忠元信末代諸不入に御寄進のうへはいつかたよりも申事有間敷候若申かた候はおのゝ可申立候仍如件

弘治三年巳十一月十一日

- 石川安藝守 花押
- 青木越後 花押
- 酒井將監 花押
- 同 雅樂助 花押
- 同 左衛門尉 花押
- 天野清右衛門 花押
- 榊原孫七 花押



(藏所氏藤安 生省崎岡)

淨妙寺參

廣忠死後、岡崎の諸士の中には、織田氏に屬して幼君を岡崎に歸らしめんとするものと、これまでの廣忠の志でもあり、勢力も盛大の家なれば、今川氏に屬し居らんと云ふ者とありて、衆議いまだ一決せざる中に、今川義元は軍を出して岡崎に入らしめ、岡崎將士のおも立ちたる人々を駿府に招き寄せたのであつた。松平記に「御家督の竹千代殿、駿府に御座候間、三河衆半分は皆今川殿へ出仕被申、殊に一門の中にも一分を被立し大給和泉守殿、酒井將監殿、同左衛門尉殿、櫻井内膳殿などは皆在府被成候、竹千代殿の御成人の間は、今川殿へ御知行預り分と被仰、駿府より代官を御申付候間、御普代衆迷惑仕候事無是非次第也」とある。

岡崎將士の辛

此間岡崎の將士の辛酸は言語に絶した事ある毎に今川氏に驅使せられ、常に難戦の地に向けられ、軍役の負擔すらも自給しなければならなかつた、自ら來耜を執つて少許の田園を耕し、漸くに其の日を送つた、隱忍持久斯くして外におはす幼君の生長を待つたのである。參河物語に「何れも御普代衆、手作をしてねんぐ石米をなして、百姓同然に鎌くわを取り、妻子をはぐくみ、

身を扶け、あらぬなりをして、誠に駿河衆と云へば、氣を取りはいつくばひ、折れかゞみて肩骨をすくめて、おそれをなして歩く事も、若しいかなる事も爲出で、か君の御大事にもなりもやせんと思ひて、そのみ斗りに、各々御普代衆有るにあらぬ氣遣をし走り廻る、拾、年に餘る云々と、しるせる如くであつた。

○廣忠の入つた茂呂を、渥美郡の牟呂となすものもある、甚しきは今の形埜村の毛呂に充てたるをも見たるが、幡豆郡を正しとすべきである。

○廣忠が御料を献じたる事は、宗牧紀行、天文十三年の十二月の條に、十三日(中略)岡崎に着きたり、安部大藏など知人尾張界まで出陣の事ありて未だ不歸(按ずるにこの出陣の事不明である、或は水野氏との葛藤などではなからうか)大濱よりは申遣たれど不届や有りけん、留守にもいひ置かず、途中のさまよひも迷惑の程にて、孝順このわたりにあるらん尋ねよと云ふ程に、ふとあひたり云々、翌日大藏も歸陣したれど、猶旅宿は元の儘なり、石河右近茶湯用意とて随分の振舞ごもなり、松平三郎かたへ、去年三條西殿(右大臣公條)御下向、當國御料所の事など仰られて、聊納進の事ありけん、其御禮として女房奉書相

供御獻進に就いて

達し侍り云々とあるにて知らるゝ。

夢想の連歌

○廣忠夢想の連歌と稱へ、稱名寺書上に云ふ。

廣忠様參州岡崎に被爲成御座候刻、御夢想、神々のなかきうき世をまもるか
な如此御夢想御覽被爲遊、則其刻は於稱名寺月次之連歌執行申候、故右之御
夢想於當寺御開被爲遊、則稱名寺現住、めくりはひろきそのゝ千代竹と御詠
仕候由、從古來申傳候御事、廣忠様より御硯箱並御文臺有之、二色稱名寺へ被
爲下置、いまに住物ニ仕置候事とある。なほ同寺の由緒書の方には、廣忠公
於參州岡崎之御城、天文十二年二月廿六日之夜、御連歌發句御感夢之儀有之、
拙寺へ御勸請之於天滿宮神影前御夢想披之御連歌御興行有之、其時之住持
其阿へ御第三被仰付候、御一巡左之通、

天文十二年二月廿六日

於稱名寺披

夢想之連歌

神々のなかきうき世を守るかな

めくりはひろき園の千代竹

玉をしく砌の月は長閑にて

かすみのひまにはふく友鶴

雪はまた残るうら輪の明離れ

作る田中の道あらはなり

五月雨に晴間しらるる里つたひ

右御連歌之御懷紙頂戴于今所持仕候云々とあり書上と少しく異なる所がある。

○天文十六年に竹千代君が人質として出發したる月日については異説紛々にして三月八月十月十一月十二月の諸説があるが多くは十月に寛重忠が三左衛門忠倫を刺殺したる後に係けて居る。然し岡崎古記に「天文十六年丁未三月竹千代君駿河江御下之節戸田彈正奪取尾州江送り遣す。同九月頃今川より天野安藝守田原之戸田攻落し城に代り入朝比奈備中伊東左近城代也」とあり三月はやゝ早きに失するやうであるが古記の異本かと思はるゝ岡崎雜記と稱ふる書には「天文十六年八月竹千代君田原より尾州へ御越被成同十八年霜月尾州より駿河江御下向之儀と傳ふ不分明此時天文十六年九月六日今川より咎め廣忠公田原を責ると云」として八月とある。

人質として出發の月日

参州岡崎歴代記にも「天文十六年丁未八月竹千代主ヲ爲質駿府ニ送ル」とある、これは岡崎雜記に據つたものであらう。

また参河記にも「天文十六年八月二日竹千代君六歳ノ御時岡崎ヲ立テ駿府へ赴キ給フ」とある、今是等に據つて八月二日と定めたのである。

なほ家系校正餘録小豆阪合戦の事を論ずる所に「神祖質として駿河に渡らせ玉ふべしとて、岡崎を出玉ひしが、故あつて信秀の方に奪はれ給ひて、尾張へ移りおはしけり、是天文十六丁未八月の事也、二日に岡崎を御立ありて、その明の日尾張に移り玉ひしよし當代記、藩翰譜に見えたれば、三日の事なり云々」ともある。

○竹千代を奪ひて尾張に送りし人を彈正少弼康光並に其子五郎と爲せど、康光とする古文書は一も存せず、孫四郎宗光或は彈正少弼宗光とかいふものゝみにして、曾祖父宗光の名を襲用したものであると、而して政直とあるのは堯光の弟であらうか。

宗光 — 憲光 — 政光 — 宗光 — 堯光

宣成(金七郎)

(渥美郡誌所載)

○松平記家忠日記等をはじめ、竹千代がしほみ坂に於て奪はれたる由に
しるす、遠江の汐見坂にしては地勢あはず、或は田原邊の地名かとも思ふ、次
に引く武徳大成記によれば、この考も棄て難きやうである。

竹千代君ヲ駿府ニ赴カシメ人質トナシ給フ、御齡六歳ナリ、岡崎ヨリ駿河
ニ至ルマデ道路敵多シ、田原ノ城主戸田彈正少弼娘ハ、廣忠君再嫁ノ夫人
ナリ、其内縁アルニ依テ西郡ヨリ、穢シテ田原ニ至リ玉フ、然ルニ彈正心ヲ
尾張へ通ジ、男子戸田五郎兵衛ヲシテ青銅千貫ヲ以テ竹千代君ヲ織田彈
正ニ鬻グ、コレニヨツテ竹千代君尾州熱田ノ浦ニ至リ、加藤圖書ガ宅ニ入
リ玉フ、金田與三右衛門供奉シテ大ニ驚キ、參河へ歸リ給フノ計ヲ運ス、其
事顯ル、ニヨリ織田彈正金田ヲ殺シテ其首ヲ三田橋ニ梟ス。

或説ニ曰ク、此時金田與三左衛門、平岩七之助、平岩助右衛門、阿部善九郎、
阿部新次郎、榊原平七郎、天野又五郎、村越平三郎、江原孫三郎等、竹千代君
ヲ送り奉ル、戸田彈正少弼假館ヲ鹽見坂ニ建テ饗應丁寧ナリ、森平太ト
云ヘル者アリ、戸田彈正ガ叛心アルコトヲ知リテ供奉ノ人ニ告グ、何レ
モ信トセズ、明日戸田舟ヲ熱田ニ向ハシム、コレニ依テ供奉ノ人ニハカ

ニ驚キ氣ヲ失フ。然レドモ爲方ナシ。此時天野又五郎年十一歳、其家
僕ヲ呼ンデ曰ク、早ク岡崎ニ歸テ此事ノ始末ヲ告ゲヨト、廣忠君聞玉ヒ
テ、其夫人市場殿ト號スニ告グ、夫人啼泣シテ其父ノ不義ナルコトヲ嘆キ給フ
云々。

熱田の寓居

○竹千代の熱田の寓居に就いて、朝野舊聞哀稿に云ふ、官本參河記、御年譜附
尾、徳川記、大永慶長年間略譜等には、はじめ織田信秀奪ひ奉りし時は、加藤順
盛が許に置き、信秀、廣忠君の御許に使をまゐらせし後、改めて名古屋万松寺
天主坊に籠め置き奉ると記す。されども、今、貞享井上三十郎書上、及び加藤
圖書助覺書を考るに、三年の間順盛が家に御座ありしといひて、名古屋に移
り給ひし事を記さず、且後年順盛がむかしの忠志を感じ給ひて、采地を賜り
し事見ゆれば、再び名古屋に移り給ふといふは疑ふべし、且万松寺は今名古
屋南寺町にあり、天王坊は城内にあり、尾陽神社誌、尾陽雜記、張州府志等を閲
するに、万松寺の條には東照宮の御事蹟を載せず。尾陽雜記、天王坊の條に、
大權現寓居尾州之間、時々詣當寺僧謁見とあり。是によつて考ふるに、順盛
が許に御座ありし時、天王坊又は万松寺に詣給ひし事ありしを誤傳へて、再

び移り給ひし地と記せしにや」とある。貞享加藤圖書助覺書には「權現様御幼君之御時、今川駿河守義元え爲御人質被爲成御越之刻、參州田原之城主戸田彈正忠憲光子同五郎、參州於鹽見坂神君様ヲ奉奪取、尾州古渡之城主織田彈正忠信秀え奉送、然處信秀六代之先祖加藤圖書順盛招、其方居宅之屋敷爲要害之地可奉御養育之由ニ而於順盛宅從御六歲御八歲迄三ヶ年之間被爲成御座、其節御忠節仕候ニ付後被爲思食出於伏見御在城之刻云々」とありて、尾州知多郡之内荒尾掛村を賜はつた由が記してある。

明大寺合戰覺書

○明大寺合戰覺書と云ふ古き書あり、所々不明の所あれど、次に掲げ置く。一、岡崎之御城主松平次郎三郎廣忠公御代、天文十七年四月十五日、松平藏人忠厚と申三木之城主、山崎之城より五百餘ニ而小豆坂より明大寺村打出、岡崎をせめんと義す、其比明大寺村は侍共違恨之義ありて村中放火しけり、此時、大竹氏、宮地氏、竹尾氏、鳥居又四郎中にも弓を以岡崎(破損不明)向上下に控てありし、藏人耳取の坂に馬を(破損不明)えてありし所を、上下より矢射懸、終に藏人を馬より射をと(破損不明)此時人數敗北す、味方よりむらくと切(破損不明)藏人首を取、廣忠公に献す、廣忠公御感有し、此時又四郎爲御褒美と、御刀(破損不明)難有頂戴仕

子孫讓渡者也爲後代仍而如件。

天文廿年八月三日

鳥居又四郎忠次之記

小豆坂合戰二回説に就いて

○小豆坂合戰は、天文十一年、同十七年の二回説と、天文十七年の一回説とある。朝野舊聞哀稿に「此事諸記異同あり、信長記、増補信長記、寛永松平傳十郎譜等には、十一年八月とし、關野濟安聞書、官本參河記、參河記大全、大永慶長年間略譜等は十六年八月とし、松平記、岡崎古記、參州龍海院年譜、家忠日記増補等には十七年の事とし、武徳大成記、成功記は、十一年、十七年の兩年に係く、たゞに年月の異なるのみにあらず、記事の旨亦同じからず、今古證文に收る義元が文書に、此戰を今年三月十九日となし、松平記等の説と符合するをもて、今之に従ふ」とありて、十七年説に従つて居る。また澹泊史論の混齋に復する書には、十六年説を正しとして居る。家系校正餘録には小豆坂兩度の役を認め、更に當代記の天文十六年九月二日に出勢したりと云ふ説も根據あるものとして、こは神祖の御事あるを聞いて駿河より兵を出して襲ひしものと思はれ、小豆坂の役とおのづから別なりと定むべきにやと云うて居る。今暫く二回説に従つた。

廣忠の死に就いて

○廣忠の變死を忌んで病死となすもの多けれど、こは明に八彌に刺されて歿したのである。

岡崎古記に、三月六日廣忠公岡崎にて奉害、御尊骸岡崎大林寺に納、此御生害の傳は廣瀨の佐久間九郎左衛門と云ふ、又大濱の佐久間某が、家來を方便^{たばか}りて廣忠公へ奉公に出し、廣忠公にて片目八彌と云ふ、或時廣忠公縁に出られ、御灸を御近習に御見せ候處を、御後により奉討て飛出逃去處を、大手先の堀の中にて討留る由、此儀知れ、天野孫七と云者佐久間方へたばかり出、佐久間を討取る、此時天文十八年十月廿七日、五拾貫文被下、即阿部大藏定吉、石川右近將監康政兩人判寫一見申候とある。

龍海院年譜に、天文十八年己酉年三月六日、源廣忠公御年廿六歳ニテ、片目彌八郎ト云ヘル者岡崎御城中ヘシノビ入り奉害、上村新六又近邊ニ在合セ、彌八郎ヲ討留メタリ云々。(廿六歳は誤である)

参河八代記古傳集に、廣忠公御病死ノ由本書ニ記スト雖モ、其實ハ廣瀨ノ領主佐久間九郎左衛門所爲トシテ、一人ノ宰人ヲ誘ヒテ御家ヲ望マセ、新参ニ出シ置キ、能々立廻リ、後ニハ御前近ク被召使タル所ニ、風眼ヲ煩ヒ、一眼損ジ

ケレバ、人々は是ヲ片目八彌ト申ケル、彼者ニ佐久間兼テ申合ケルニヤ、或時御晝寢被成ケル所ヲ、不意ニ討奉リ走出ル折カラ、植村新六郎外堀ニテ追詰メ討留メケル、此新六郎二代トモニ主君ノ御敵ヲ討チシモ不思議ナル宿縁ナリト、其上阿部彌七郎狂亂シテ清康ヲ打奉ルモ、村正ノ刀、其後三郎殿(按ずるに信康の事)御切腹モ、村正ノ御脇差ナレバ、御不吉ノ例ナリトテ、上作ナレドモ、村正ノ打物ハ御道具類ニハ用ヒラレズ、依テ御當代ハ村正ノ打物ハ捨リタリトカヤ

とあるを以て明である。廣忠が灸をすゑてゐたる時とも、晝寢せる時ともありて、何れが正しきか詳でないが、兎に角油斷を見すまして打取つたものである。

○雪齋等の安祥城攻の、三月と十一月とを混同したるものが多い。されど落城したるは十月九日の事であつて、三月の戦には本多忠高等の奮戦はあつたが、遂に落城しなかつたのである。

創業記考異に、一説、天文十八年三月十九日、義元兵ヲ遣シテ、信長庶兄三郎五郎信廣ガ守ル所ノ安城ヲ攻シム。御譜代ノ輩モ加之、城中堅ク守ル故、義元

雪齋等の安祥城攻の月日

ノ兵岡崎城へ引入、後十一月八日、又攻之、信廣ヲ本丸へ押詰ルニ依テ、翌日信長、公ヲ以テ信廣ニ奉替

於今度安城度々高名無比類働也、殊ニ十月廿三日夜抽諸軍忍堀着大手劔先蒙鎗手堀二三間引破粉骨感悅也、同十一月八日自辰刻至于酉刻終日於土居際互被中候奪取走等門燒崩因茲捨敵小口翌日城中計策相調遂本意候條甚以神妙之至也、彌可勵忠勤之狀如件

天文十八 十二月廿三日

義元

御宿藤七郎殿

(古今消息集)

今度於參州安城及度々能矢仕殊十一月八日追手一木戸燒崩無比類働感悅之至也、並廿三日上野兩端城於大手能矢仕最前城中へ乘入於本城門際悉粉骨之條神妙也、彌可抽忠功狀如件

天文十八年十二月廿三日

義元

弓氣多七郎殿

(古今消息集)

この文書によれば、十月の頃より安祥攻撃を開始した事が知らるゝ。

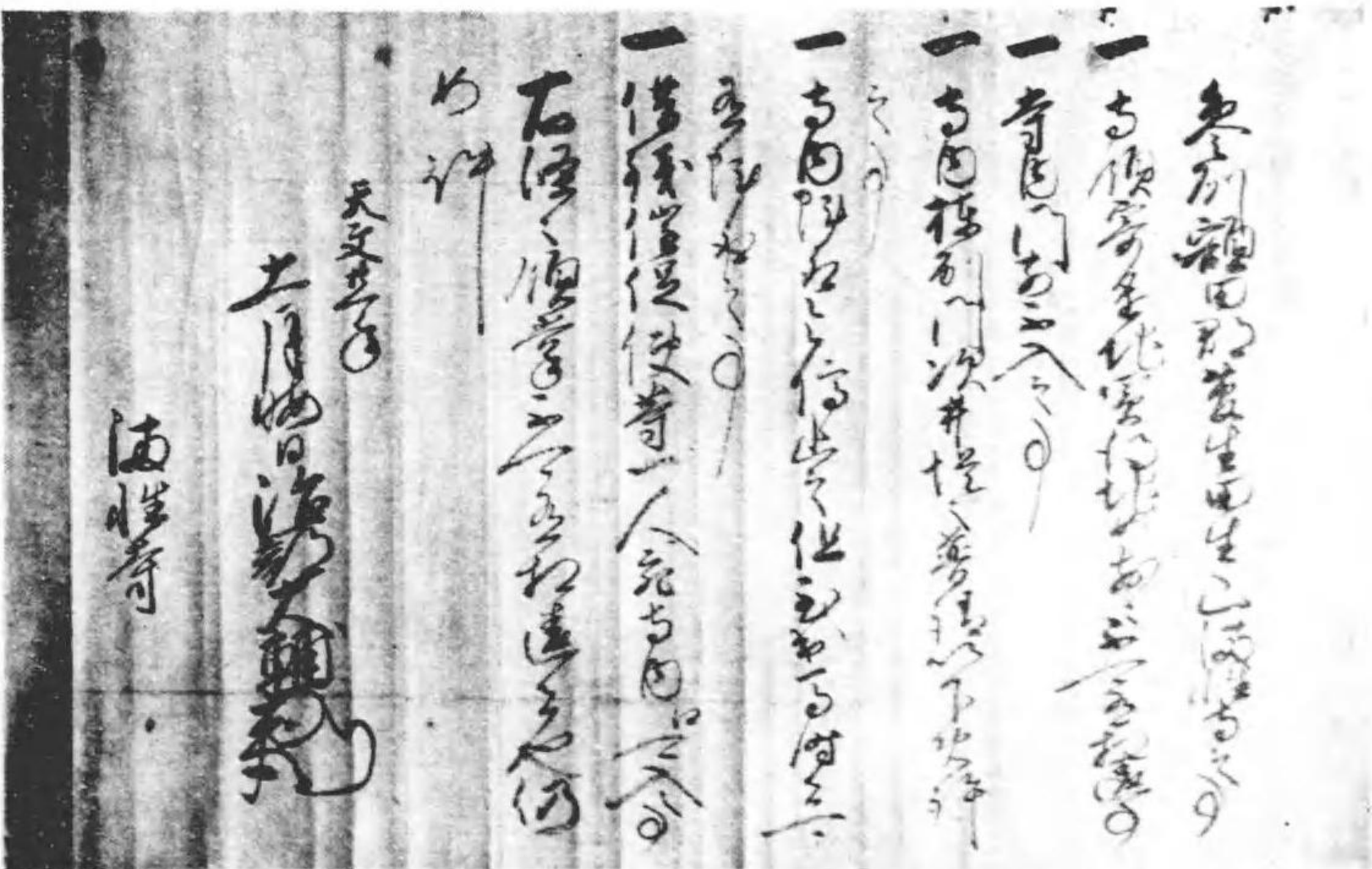
吉原攻撃についで

制札 無量壽寺



(雪齋並朝比奈泰能書狀)

(藏所寺樹大田鴨)



(今川義元禁制)

(藏所寺性滿崎岡)

軍勢甲乙人等濫妨事堅令停止之訖
若於違犯之輩者可處嚴科者也
仍如件

天文十八

九月十日

前伊豆守 花押

前豊前守 花押

前紀伊守 花押

雪 齋花押

制札 ほか無量寺

軍勢甲乙人等濫妨狼籍之事堅令停止之訖
若於違犯之輩者可處嚴科者也
仍如件

天文十八

九月十二日

前豊前守 荒川在陣

前紀伊守 花押

雪 齋花押

○これによれば、安祥第二回の城攻の前に、雪齋等は吉良を攻め、其本陣を荒

川山に置いたものと思はるゝ。當時荒川城には甲斐守義廣が居り、東條には持廣の養子義安(西條の義堯の次子)が居り、西條にはその嗣絶えたるを以て義安の弟の義諦(或は義昭)が繼いだ。是に於て東西兩條とも西條の血統に歸した。然るに荒川義廣は、持廣の弟にして東條の正統なれど、東條を嗣ぐ事を得ず、甚しく不満を抱いて雪齋の軍を入れ、義諦義安を討つたものと思はるゝ。

去九月十八日吉良荒河山在陣之刻爲打廻安城櫻井え相動之折節敵出合相支之處入馬粉骨無比類之旨畔田伴十郎申候條感悅軍功之至也彌可勵忠節者也仍如件

天文十八年十月十五日

義元在判

幡鎌平四郎殿

更に安祥、櫻井方面に軍を出したる事も知らるゝ。

○廣忠の繼室眞喜姫即ち田原御前は、家康が濱松城に移つたる後も岡崎に在つたと見え、歿後龍海院に葬つたのであるが、其後幕府に於ても寺に於ても等閑に附し、法養等も行はざりしものか、殆んど忘れられたる有様であつ

眞喜姫墳墓の事

たのが、文政三年に及んで古き位牌を見出し、急遽幕府へ届出を爲し、郷方松平丹波守家(戸田氏信州松本城主)へも通報し、墳墓の修理や供養等を行つたのであるが、後に龍海院方丈はその怠慢の廉を幕府から叱責せらるゝに至つたのである。次に引く龍海院年譜を見ると、如何にも其當時の様が思はるゝ。

文政三庚辰大樹寺殿廣忠君之御繼室御廟所顯然之上、傳記明白、花慶理春大禪定尼之御位牌古物出、今年三月晦日相當二百五十回忌也、此節公儀へ奏達不致候時は、永々被爲捨候事、實以恐入殘恨之至也、御郷家松平丹波守様へ對シ候而モ、等閑致置兼、依之幸、大宗和尚御府内近邊慈眼寺住職、是ニ特ト相談之上、取斗候様、大哲長老へ談遣也、則可睡齋之添書ヲ申請、三月八日吉辰故御寺社奉行御月番松平伯耆守様へ願書差出ス。

九月二十三日當寺社奉行ヨリ使來リ、口上書云、從公儀被仰付候之間、明廿四日花慶様御墓御見分役人共罷越候條、爲御案内得御意候也、承知之旨請書致遣、寺中内外掃除茶菓饗應之支度ス、廿四日五ツ半時、寺社役兩人來、尤上下着用ニテ副寺大哲長老案内、御墓五輪特ト見分、寸尺書記シ、夫ヨリ御位牌面裏書迄寫シ取り、見分相濟、奥書院ニテ饗應、九ツ時歸宅、相次副寺ヲ

以謝禮ニ遣ス云々。

文政六癸未十二月二日、江戸出役寮ヨリ早使書狀到來、去ル十一月十八日太田攝津守様於御役宅、大久保加賀守様御直ニ被御渡御書付之寫左之通、三州額田郡妙大寺村龍海院代大宗、右境内花慶理春大禪定尼様御廟所御瑞垣補理仕、御魚略ニ不相成様可仕爲、御手當白銀三拾枚被下置、御位牌之儀者本堂ニ安置可仕候、尤御修葺所ニハ相心得申問敷旨被仰出候、文政八^乙正月花慶様御廟所瑞垣御普請取掛ル、築塀御門之事、山僧衣資ヲ以テ辨之、

三月廿九日晡時ヨリ、花慶様獻茶菓湯大施餓鬼會ヲ修ム、晦日午時供養方丈投齋、兼テ松平丹波守様ヨリ御代香役人中來勤ノ積リ也、未見、

四月廿三日松平丹波守様御家中、中西紋之丞丈來山、御廟所瑞垣築塀御門等篤見分有、結構出來之旨挨拶、御位牌再興莊嚴道具並御膳部、香臺、燭臺、盛物三寶、御幕面帳皆出來、不殘見分ニ入ルル事、助成金請取、石工源助京都海老屋長左衛門へ遣ス云々。

なごゝある、因に眞喜姫慶應二年七月二日に贈從一位となつて居る。

竹千代駿府の
寓居

○駿府に於ける竹千代寓居の地に就いて、駿國雜誌に次の如く載す。

御寓館。安倍郡府中少將井の宮が前町に在り。武徳編年集成に云、天文十八年神祖御幼稚、質として當府に來り給ふ、守護今川治部大輔義元迎奉り、宮が崎を假の御座所となし、久島土佐を守護とす。其右隣は孕石主水元泰が第宅、左隣は相州小田原の質子北條助五郎氏規^{後、美濃守}の居宅也。御元服御婚姻の賀儀等皆此に於て行はる云々、參河記云、府中少將の宮の町に竹千代君御年七歳より十九の御年まで御座あり云々、玉桂山府中寺華陽院記云、華陽院殿は俗名をお萬と稱す、源三位頼政の末、參州寺津城主大河内左衛門佐元綱の女、同國刈屋城主水野右衛門大夫忠政室にして、傳通院殿の御母堂也、後剃髮して源應尼と稱す。天文□年今川義元の時、御甥大河内源三郎政局と共に駿府に下り少將町に居住し給ふ。同十八年神君御年八歳、天野三郎兵衛康景等廿九人御供にて駿府に御下向、源應尼公の御庵室に入らせられ、御年十六歳まで御養育遊ばさる云々。按ずるに、御寓館の宮かさきは少將井社の宮の前町といへる事にて、淺間社前の宮が崎にはあらざる也云々、御寓館の地は華陽院の境内とし、宮がさき町は華陽院門前町の舊名也と決定し

て可ならむと。以上は駿國雜誌の大要である。

然るに竹千代寓館。(歴史地 理所載)此地今分明ナラズ、或ハ淺間前ト云ヒ、或ハ華陽院境内トイフ。共ニ據ルナキノ説ニシテ、獨リ駿府新風土記ノ鷹匠町ノアタリト云フ説當レルニ似タリ。竹千代寓館ハ少將井ノ宮ノ前町ニシテ、孕石主水邸ノアタリナル事ハ參河物語、松平記ニヨリテ明ナリ。而シテ當時少將井ノ社アリシ場所ハ、舊城外郭ノ内ナル城代屋敷ノ邊ニシテ、(今城代橋アリテ此所ヲ記念ス)主水邸ハ之ト堀ヲ隔テ相對スル今鷹匠町二丁目ノ西角(舊時板倉屋敷トナリ後ニ町奉行控屋敷トナル)ナリシ事モ、新風土地ノ考證シタル古地圖ニヨリテ明ナリ。竹千代在時此邊町外レノ閑地ナリシニ、ソノ後家康此ニ築城シ、此ニ石垣ヲ築キ、此ニ堀ヲ穿テ、井ノ宮モ外ニ移サレテ舊蹟摸索スベカラズ云々。とありて前説を否認して居る。また大日本史料に云、按、竹千代駿河ノ寓所ヲ參河物語ハ少將宮町トシ、松平記ハ宮ノ前トシ、家忠日記増補、武徳大成記、編年集成等ノ書ハ宮ヶ崎トス、駿河志料ヲ檢スルニ、少將町、宮ヶ崎町共ニアレドモ、其地懸隔ス、蓋松平記ノ前ハ、即チ少將宮ヶ前ノ畧言ナルヲ、家忠日記増補等、前ノ字ヲ讀ミ誤リテ崎トナシ、遂ニ宮

駿府に赴く竹千代の從者

ヶ崎ト書キシナラン、或ハ松平記ノ別本ニ宮ヶ崎ト書シタルモノアルヲ疑ヘドモ、局本二部ノ松平記ヲ初トシテ、真稿引ノ所ノ松平記、皆宮ノ前ニ作り、松平記ヲ襲ヒタル官本參河記モ、亦宮ノ前ニ作りタレバ、別ニ宮ヶ崎ニ作レル本ノアリトモ思ハレズ、宮ノ前ハ即チ少將ノ宮ノ前ト云ヘル意ニテ、物語ト同説ナルコト明ケシ云々とあるが、現在の地については述べて居らぬ。

○竹千代の天文十八年十一月廿七日駿府に赴く時、從ひし人々について、日本史料に云ふ、按、竹千代從者ノ人數諸書異同アレドモ、三州本間氏覺書ニ七人トシ、榊原家譜ニモ七人小姓トアレバ、七人ト定メテ然ルベシ、サレドモ寛永譜ニ就イテ其人ヲ檢スルニ、凡テ八人ナリ、曰ク天野康景、曰ク酒井正親、曰ク平岩親吉、曰ク内藤正次、曰ク阿部重吉、曰ク阿部正次、曰ク石川數正、曰ク野々山元政ナリ、而シテ榊原家譜ニ據リテ榊原忠政ヲ加フレハ九人トナル。思フニ七人ハ専ラ小姓ニ係リ、他二人ハ護衛ノ者ナルベシ、今試ニ之ヲ區別セント欲シ、九人ノ年齢ヲ考フルニ、酒井ハ二十七、内藤ハ二十、阿部重吉ハ十九、天野ハ十三、野々山ハ十二、阿部正次ハ九歳、榊原ハ八歳ナリ。而シテ石川ノ年ヲ詳ニセズ、此ニヨリテ之ヲ推セバ、酒井、内藤ノ二人最モ年長ナレバ、他

ノ七人ヲ監督シ、併セテ竹千代ヲ護スルナランカ、阿部以下幼少ナレバ、所謂七人小姓ナルベシと、此説の如くであらう。

自耕自給

○廣忠當時、東西の勢力に領地を狭められ、麾下の諸士多くは自耕自給したる事は、参河物語に「ある時御鷹野へ出させ給え、折節五月之事なるに、随分の御前衆、田をうゑ申とて、我も人も自身(破)やぶれ(帷)かたびら(子)をたかはしをりに(首)はしおりにて、たまだすきをあげて、我も人も早苗をせおいて、目つらまで土に成て行處え、折節廣忠行合させ給ひて、あれは近藤にてはなきかとて、御馬をひかへさせ給ふ。まぎれざる事なれば、各々傍輩衆も赤面してある所へ、見て参れと仰ければ、畏而参而申様、扱貴方のなりは何としたる事ぞ、上に御覽じ付て、近藤か見て参れとの御使なり、扱何と可申上きやと云、何と御返事を申上ぐべき、近藤にて御座候と申上給へと云、されば左様にも被申上間敷と申せば、扱貴方はいはれざる儀を仰候物かな、上に御じきに御覽じて、御馬をひかへ給ひて御意の處を、何とまげられ申さんや、御身のまげ給はゞ、又別之人参て見て、左様に申上候はゞ、其時は御身も我故に御迷惑有べし、然時には我等人をそこなひ申事迷惑いかばかり有べし、其上我とどかざる故を以て、

人までそこなひ申といはれん事めいわく、然は浮世へ此沙汰ひろまるべし、殊に御身一類に悪敷いはれ申事も、かばねの上まではちのはちなり、其うへ上の御ぢきに御覽せられて、御馬をひかへさせ給ひて御意なれば、御身のさゝえてあらばこそ、御身にうらみも有べけれ、爰にてまげる事成間敷に、近藤にて御座候と申上給へと申せば、何とも迷惑の御使とて赤面して歸りけり。御前へ参りければ、近藤かと御意有りければ、謹でありけり、重て御尋有ければ、畏候と申上げる時、急ぎつれて参れとの御意なれば、立歸つて、参れと御意成と申せば、畏と申て御前に参る、早苗をせおひていとどごろになる者が、上様を見付申て、しられ申間敷と思ひて、早苗をせおひて、あせにつまづきたる風情にて、田の中えうつぶしにふしたれば、目もつらもまつくろにごろになりて御前に畏れば、誠にけうがるいき者にて候、上様は是を御覽じて、御目に涙を持せられけり、各々も我人あれ體の事をばせぬ人一人もなければ、各々はふも能か、終に御目にあたらず、今日近藤は見被出申事こそふうんなれ、只今是にて御せい、ばいあらん事のふびんさよ、今日者近藤が身の上、いかにしてもか様之事をして、妻子をはごくまでかなはざる事なれば、明日は我々

の身の上とて汗をにぐる處につくぐくと御覽じて、やゝありて近藤かみちがへたり、扱もく、汝ども左様にあらぬ事をして、妻子けんぞくをはごくみ、事の有時は一疋に乗て懸出、先懸をして一命を捨て、度々の高名莫大なり、然ども我少身なれば身をたやすくすぐるあてがひもせずして、左様の事をさせ申定てなんぢ一人にもかざるまじ、面々もさぞ有らん、ふびんなれば我も何たるあてがひをもしたくは思へども、汝ども如存知、可出申知行のなければ、取るべくとも思はで、あらぬなりをして奉公をしてくる、事返々もうれしけれ、是と云ふも普代久敷者なれば、主をかなしみて左様にはすれ、新參はしりつきの者ならば、思ひもよらず、只人間之寶は、普代之者なり、かまへてく、汝が恥にはあらず、我等がはぢなるには、はぢと思はで、汝も面々も左様にして妻子をはごくみ、我に、能一命を捨て奉公をしてくれよ、我汝等がかせぎをもつて切ひらく物ならば、過分のあてがひをもすべし、只今は我もならざる間、いかにもして妻子をはごくみて、其上一命をすて、かせぎてくれよ、早々歸て田をうゑよと仰ければ、御前なる人々、又聞かけに涙をながす云々である。主従の胸中誠に察するに餘がある。

家康

第貳章 徳川家康

筆は次第に進んで、遂に我が徳川家康を叙する迄に及んだ。

第一節 人質生活

駿府の生活

家康幼名竹千代、六歳の時奪はれて尾張に賣られ、八歳の天文十八年十一月九日、一度岡崎に歸りたれど、更に駿府に赴き、少將宮の町に人質の身となつた、この寓居の近くに、孕石主水と云ふ者居り、竹千代が放ちし鷹の下りたるを捕りに入りたる時、参河の小悴にはあき果てたりと罵りきと云ふ、兎角良き待遇は享けられざりし事と思はる、外祖母源應尼が、義元に請うて参河より來りて鞠育せしは大なる力と爲つた、(水野氏の質となつて來れるなりとも云ふ)さればその恩を忘れず、後に駿府に華陽院を建て、懇に其後を弔うた、生母の水野氏(傳通院)も時々使を來して慰問したりと云へど、既に後の夫の生みの子もある事なり、且つ遠隔の地なれば、思ふに任せぬ事であつたらう。

元服して元信
と云ふ

此人質生活の間に、今川氏賀正の日、縁先より放溺して今川諸將の膽を奪つたり、安部川原の石合戦に凡兒ならざるを證したり、鳥居元忠の百舌鳥の馴らせ方よろしからずとありて縁より蹴おしたりと云ふ如き挿話もあれど、概して冷酷なる周圍の中に年月は過ぎて、十四歳の弘治元年(天文廿四年)三月に元服し、松平次郎三郎元信と稱へた。

幼時の手習は、外祖母源應尼懇に導き、長じて兵書軍學の研究は、臨濟寺雪齋(諱宗孚、諡護國)に依りたりと云ふ。

竹千代元服の年月に就いて、松平記には、弘治元年(月日)をしるさずとあり、三岡記には弘治元年三月(日)をしるさずと載せ、參河記には、弘治二年正月二日とし、武徳大成記には、弘治二年丙辰春とし、徳川實記、烈祖成績には、弘治二年正月十五日とし、徳川府家譜、大泉寺年譜また同じく、武徳編年集成にも、弘治二丙辰年正月の十五日の條に係けてある。諸書また年十五歳の時とあるは、弘治二年に元服せりとなすによつてである。然るに實は松平記に云へる如く、弘治元年であり、三岡記に載する同じ年の三月(日)は詳で無いと云ふが正しきものゝやうに思はるゝ。そは先きの廣忠の條下に引きたる菅生

の安藤鑄物師の文書に「大工跡職之義不可有相違之由從元信被仰越候間各一筆遣候仍如件。天文廿四年五月六日」とあるによりて、既に天文廿四年(七月廿三日)即ち弘治元年の五月には、元服して元信と稱せる事が明に知らるゝを以てである。

今川館址(後藤稻荷)。今ノ靜岡ハ、今川氏滅亡ノ時ヨリ幾度カ焼ケテ舊態ヲ存セズ、大御所トシテ家康ガ再度築城ノ時、市街ニ大改革ヲ加ヘテ全ク舊形ヲ變ゼシヨリ、今川氏ノ館址ナルモノ茫トシテ今尋ヌルニ由ナシ、幸ニ屋形町ノ名ノ存スルアリ、地勢上ヨリ云フモ、之ヲ今川館址トスルヲ當レリト思フ。コレヨリ東ノ方ニ四足町アリ、四足ノ地名ハ今川文書ニモ見ユ、コレ今川氏ノ時コ、ニ四足門アリシ所ニシテ館ノ東端ナルベシ云々。而シテソノ中央ニ當ル所、今ノ上魚町ニ後藤屋敷ト云ヒシ所アリ、後藤庄三郎ニ賜フ所(金座役人ナレドモ文學アリ、駿府政治録ノ著書、家康ノ寵ヲ受ケ大橋局ヲ賜フ)後年ニハ町家建チ、ソノ後ニ空地アリ、此ニ泉水ト大松トアリ、共ニ今川氏ノ遺物ト思ハル。此ニ稻荷社アリ、後藤稻荷ト云フ、維新後泉水モ大松モ無クナリタレド、今猶僅少ノ空地アリテ、稻荷社アリ、社ハ燒後ノ新築ニシテ古色ヲ存セザレド、今川館址ヲ徵スベキ最好記念物ナリ云々(地理史所載ニ)

淺間社著初ノ鏡。駿河志料ニ、御腹巻。祭器ニ用ユベキ上意ニヨリテ賜フ。コレ天文二十三年神祖御年十三歳(元服の年月に就いては前)今川治部大輔義元、府中ノ館ニ於テ鏡初メノ儀ヲ行ハセ給フ、義元調進スル所ノ御料也、其製緋威、御胴黒塗、御丈九寸、廻リ二尺五寸餘、御

草摺長八寸八分、但共黒塗總金具、滅金菊唐草透シナリ、今神寶トシテ社人村岡内匠代々御預リト、而シテ此神社ニ納メラレシ所以ハ、駿河國志補遺ニ、神祖御在城ノ時、慶長年中、淺間流鏑馬祭禮ノ御馬ヲ出サル、上覽ノ時、此御馬殊ニ秀テ走リタリ、祭終ルノ後、村岡兵部少輔ヲ御城ニ召シ、褒美トシテ御召初ノ御腹巻ヲ下サル云々あり。

五月五日、兒童の戯さて、隊を分ち石を打あふを、但語にいんぢうちさいふは、石打と云ふ詞のよこなまりにして、ふるくより兒戯させしは、全く戰國争鬪の風、童部にもおしうつりしなるべし、君はいまだいさけなくて、駿河の今川がもこにおはしける時、石打見そなはさんさて、近侍の者の肩に負れ、阿部河原に生まれしに、一隊は三百人あまり、一隊は百四五十ばかりなり、人みな多勢の方により来て見んさす、君われは小勢の方にゆかむ、小勢の方の人は、自ら志を一決して、恐怖の念なく、隊伍もいさよく整ふものぞ、仰せければ、かの侍、この君何をしろしめしてさば、仰せらるゝぞ、いぶかしく思ひしが、程なく打合はじまりしに、多勢の方一さゝへもせず敗走し、見物の者もそが方にゆきしは、人なだれにおしすくめられ、からうじて逃ちりぬ。この事傳へ聞きし者ども、御年の程にも似つはしからぬ御聰明の事かなと感じ奉らぬはなかりしとぞ(故老諸談)

天文廿年正月元日、今川が館におはしませし時、かの家臣等、義元が前に列座して拜賀す、君いさけなくて、そが中におはしますを、いづれもあやしみ、如何なる人の子ならんか云ふに、松平清康が孫なりと云ふ者あれど、信する者なし、其時君御座を立ちて、縁先に立せられ、何氣なく便溺し給ふに、自若として羞作のさまおはしませず、これにより衆人驚嘆せしとぞ(紀年録)

駿府におはしませし頃、一日大祥寺と云ふ禪刹へ成らせられしに、雞廿羽ばかりかひ置きしを御覽じ、住僧にこの鳥一羽われに與へぬかと宣へば、住僧皆なりとも獻らん、菜圃を啄みあらせども、おのれさ生育いたし候へば、先そのまゝに飼置きぬと申せば、笑はせられながら、この法師は雞卵くふ事はしらぬかと仰られ、後に駿河御領國となりし時、かの住僧殊勝の者なりとて、召して寺領御寄附ありしとたり(君臣言行録)

鳥居伊賀守忠吉は、清康廣忠の二君に仕へ奉り、君の駿河にわたらせ給ひし時、今川がはからひにて松平次郎左衛門重吉と共に御本國にこゝまり、賦税の事を奉行せしめられしかば、忠吉が子彦右衛門元忠をば、君の御側にまゐらせ置て、御遊仇させしが、君は十歳、彦右衛門は十三歳なり、斯る折から殊に悦ばせ給ひ、朝夕したしみかたらひ給ふ、そのころ百舌鳥をかひ立て、鷹の如く据よと彦右衛門に教へ諭し給ひけるが、据方よからずとて、いからせ給ひ、縁より下に突落し給ひければ、御側にありあふ者ども、忠吉が忠誠を盡すあまり、己が愛子までをまゐらするに、いかでかく情なくはもてなさせ給ふぞと諫あ奉りしを、忠吉は後にこの事傳へ聞きて、なみくの君ならんには、御幼稚にても、それがしに御心を置かせ給ふべきに、いさゝかその懸念おはしませで、御心の儘に愚息をいましめ給ふ、御資性の淵大なるいさ尊し、この儘に生立せ給はゞ、行末いかなる名將賢主にならせ給ひなん、それがし犬馬の齡すでに傾き、餘命いくばくもなし、御行末を見つがん事かたし、彦右衛門汝は末永くつかへ奉り、萬につけておろそかにな思ひそとて、かへりて己が子のもこへは厳しく申し送りしとぞ(鳥居家譜、以上徳川實記所載)

大岩の臨濟寺は、天文五年今川氏輝(義元の兄)の菩提所として大原雪齋の開基せる寺。こ

、に竹千代手習の間と稱ふるありて、机、硯、文房具、調度などを存する。

蟹江の七本槍

此年八月三日駿河の軍、尾張の蟹江城を攻む、參河の兵には松平和泉守親乗先鋒たり、大久保新八郎忠勝、同甚四郎忠員、同七郎右衛門忠世、同治右衛門忠佐、阿部四郎五郎忠政(初め大久保氏)杉浦八郎五郎吉貞、同勝吉父子、鎧を執つて奮戦す、世に之を蟹江の七本鎧と稱へた。

鳴海城主織田氏に叛く

これより先き、天文二十一年四月に、鳴海城主山口左馬助教繼、同九郎次郎教吉父子、織田信長に叛き、笠寺、中村に據つて今川氏の兵を納る、信長之と赤塚に戦ひたれど、勝敗わからず交綏した。かくして義元の西方侵略の策は、次第に發展し行くのである。

今度山口左馬助別可馳走之由祝着候雖然織備懇望子細有之候間

苧屋令赦免候此上味方筋之無事無異儀山左申調候様兩人可令異

見候 謹言

十二月五日

義元 花押

明眼寺

阿部與左衛門殿

(妙源寺文書)

天文廿二年癸丑四月十七日織田上總介信長公十九之御年之事候、鳴海之城主は山口左馬助(教繼)子息九郎二郎(教吉)父子織田備後守殿被懸御目候處、御遷化候へば(備後守は信秀、信秀は天文二十年癸亥三月三日卒、万松寺殿桃岩道見大禪定門、墓は名古屋万松寺に在る)無程企謀叛駿河衆を引入、尾州之内へ亂入、沙汰之限乃次第也、鳴海之城には子息山口九郎二郎を入置、笠寺へ取出要害を構かつら山(嵩山備中守)岡部五郎兵衛、三浦左馬助、飯尾豊前守、淺井小四郎、五人在城なり、中村之在所(愛知)を拵、父山口左馬助楯籠云々(信長記)

日近の戦

弘治二年二月二十日、松平右京亮甚太義春は、元信に代つて額田郡日近の城を攻む、奥平久兵衛貞友邀へて城外に鬪ふ。義春疵を蒙る。平岩權大夫元重等助けて卻く、敵追躡す。松平八右衛門忠勝、松井善兵衛重正後殿して兵を收む。義春陣營に歸りて死す。其子甚太郎家忠幼なるを以て、家臣松井左近忠次(義春の妻は忠次の妹)をして家事を掌らしむ。忠次のちに松平周防守康親とと呼ばれた。

雨山の戦

此頃山家三方、今川氏に叛き、奥平監物貞勝は、額田郡雨山に砦を構へ、その子九八郎貞能を置く。この年八月四日、義元東參河の勢を催うし之を攻めしむ。野田の菅沼織部定村先鋒となり、矢に中りて討死したれど、後陣頻りに進んで攻め立たれば、貞能遂に降参した。

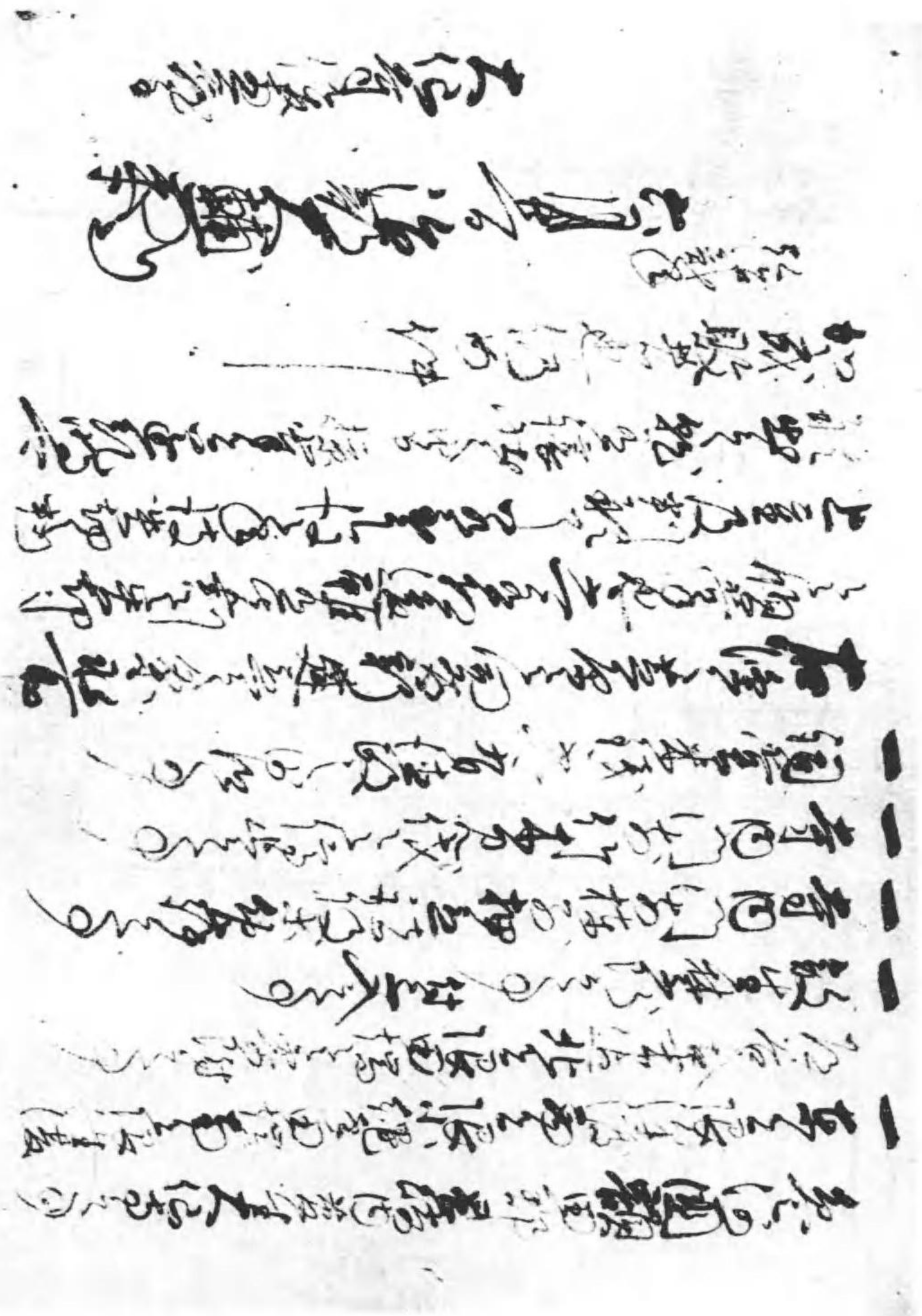
此年織田信長、その將柴田權六勝家、荒川新八郎頼季をして、酒井左衛門尉忠次が守れる加茂郡(西加茂郡)福谷の砦(浮貝、宇幾賀井、或は福貝ともある)を攻めしめた。大久保新八郎忠勝、同治右衛門忠佐、渡邊八右衛門義綱、杉浦八郎五郎吉貞、寛助大夫正重、大原左近右衛門惟宗等來り援け、殆んど勝家を獲んとした。

元信の展墓

元信は義元に請うて、我幼にして國を出で、亡父の喪にも會はず、爾來また駿河に來り、久しく追孝を缺く、願くば一度國に歸りて展墓せんと、義元之を許した。さればこの弘治二年十五歳にして一時岡崎城に入る、土民涙を湛へて喜び迎へた。鳥居伊賀守忠吉は、幼君の手を執り、密に我が倉庫を見せ、この米錢は君がやがて良士を扶持し、近國を従へさせ給はん料にと、年比密に蓄へ置きたるものに候、われ今老年に及べども、如何にしても生き存へ、君が一度此城の主とならせ給はんを見參らせてこそと、神かけて祈り候と云ひつゝ、涙をこぼせば、元信もまた袂をぬらした。

かくて能見の原の父の墓に詣で、留る事二旬にして後駿河に歸つた。

武徳編年集成に云ふ、神君駿府に於て義元に謂て曰、吾幼にして舊郷を離れ、



(今川義元寄進狀)

尾州に往て先考を喪ひ葬送の事に臨まず、爾來當國に寓居し、祭奠も亦闕く事常に是を憂る所也、願くば舊邦に歸り墳墓に詣し、追慕の情を遂んと仰ければ、義元理に服して、是を許し、岡崎城に歸らせ給ふ、義元先達て、君成長あらば諸臣食色を復せんと約しながら、今に月俸のみを與へ、其采地を押領せしめ、且毎年餽兵として數回敵地を侵させ、或は敵參陽に攻入時は必岡崎勢を先鋒となす、故に年々其親子兄弟姻族驍戦し命を殞すをも厭はず、御成長の期を待ける御當家の忠臣等、良賤となく來會し、衛護の志を厲まし、農商感慨悦喜する事譬ふべきなし、然れども、義元より山田新右衛門を以て岡崎本城を守らしめ、神君は二の曲輪に御在住有べき由を告て、諸士の傳領還附の沙汰夢にだもなかりしかば、士民悉く憤を含んで今川家と共に亡ん事を願はざる者なし、然るに元老烏居伊賀守忠吉は、神君の御手を挽て自己の倉廩を見せ奉り、臣齡既に八旬に及べる所、如何にもして暫の露命を存し、君の當城へ還入し玉ふを見て、生前の歡を遂んと欲し、義元へ知せずかくのごとく多く倉廩を建置、米錢を儲け、君善士を得て能寡を以衆を挫き玉ひ、敵國偃然として従ん事を庶幾すと云々、神君を始め諸士其忠誠を感嘆し、襟を濡し畢ぬ、

忠吉又積置る錢を指して曰く、予が貯へ様世になすと異なり、拾貫文宛繩を以て搦み、堅になし、段々重ねる事かくの如くある時は割るゝ事なし、努々横に積べからざる者なりと教へ奉る。神君此事御胸臆に存せられ、後年御老衰の刻迄、かくの如くに錢をば倉庫に積べし、是鳥居が教へける旨御誼有しと云々、而して大樹寺に詣せられ、祖考へ蘋蘩を薦め、且群臣の艱苦を謝し給ふと云々。

或は先考火葬の場へ至らせ給ひ、松林となすべき旨命せられ、後梵刹を建立し、能見山松應寺と云は此地也。

元康と改む

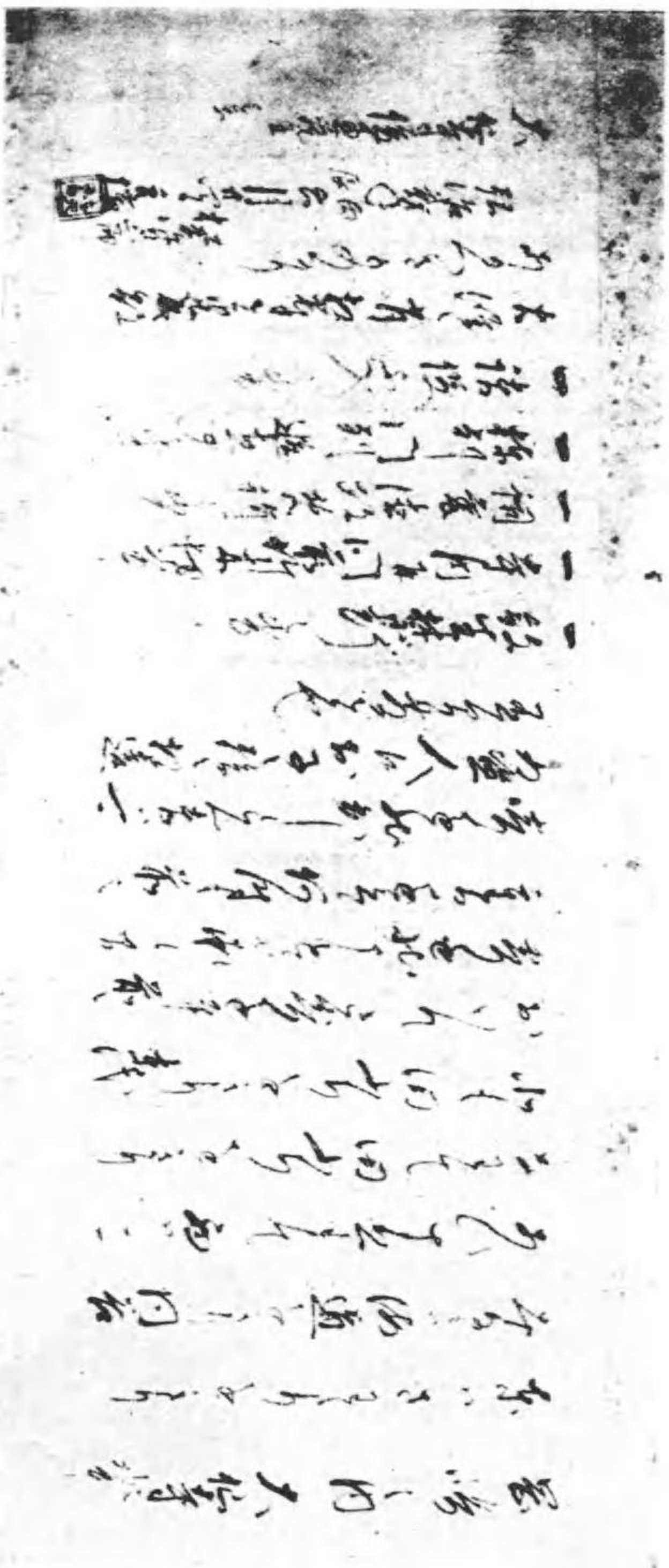
弘治三年五月、元信名を藏人元康と改め、關口刑部少輔義廣初の名の女を娶る、は親永譜代の諸士駿河に來つて祝す、參州の士榊原兵部は良馬を献す、元康此馬を將軍義輝に進む、義輝喜びの手書並に短刀を贈つた。

さて此の改名の年月に就いては、朝野舊聞哀稿に、

弘治三年丁巳御年十六正月小十五日庚午、公御名を改められ、藏人佐元康と稱し

給ひ、又關口刑部少輔義廣今川家分限帳に、關口形部少輔二萬四千石、持舟城主とあり、又共實名諸記多くは親永とあり、今七家系圖によるに、親永は共

初名なり、改名せし時代詳なが女 娶り給ふ。此事松平記三岡記には二年正月とす、家忠日記増補には三年五月とす、岡崎古記又二



(大泉寺家康の制札)

(藏所寺泉大 市崎岡)

年として月を記さず、今岡崎大泉寺所藏弘治二年六月廿四日の御書に、次郎三郎元信と記し給ふによれば、二年正月に係るは誤なり。今落穂集、天元年記録に従てこゝにかく又松平記に康の字は清康君の御一字を用ひ給ひしよし見ゆ云々。とある。

増補家忠日記には、

弘治三年五月十五日大神君御首服有テ藏人元康是より先、三郎元信義元ガ媒トシテ今川家ノ縁者關口刑部少輔刑部少輔が室は今川義元伯母ガ女ヲ以テ大神君ニ嫁セシメ、婚儀成ル云々因に、今來の寫本に、弘治三年丁巳正月の條にかけたるものがあるとしるす。

大仙寺、大泉寺、俊惠藏主宛の、岡崎之内大仙寺之事の禁制に、松平次郎三郎元信とある事は、舊聞哀稿に云へるやうに次の如きものである。

岡崎之内大仙寺之事

東はさわたりをきりみなみは海道をきり同谷あひするまで西はこなわて田ふちをきり北も田ふちをきり末代において令寄進畢前之寄進狀うせ候由承候間重而進置候何時も前之寄進狀出し候はん者は可爲盗人候於子々孫々相違有間敷者也

一 殺生禁斷之事

一 寺門並門前竹木切事

一 祠堂徳政免許之事

一 棟別門別追立夫之事

一 諸役不入之事

右條々背相輩者堅成敗あるべきものなり

弘治貳年^{丙辰}六月廿四日

松平次郎三郎元信印

大仙寺俊惠藏主參

然るに男川村高隆寺には、弘治三年五月三日附の禁制ありて、これに松平次郎三郎元信と署名してある。この文書も正しきものであるから、改名は弘治三年の五月三日以後の事ではなくてはならぬ、然らば家忠日記に云ふ五月十五日改名と云へるが、當つて居るのでは無からうか。然るにこゝに不思議なるは、廣忠の條下に引きたる淨妙寺の文書である。こゝは弘治三年十一月十一日の日附であつて、それに「上和田てんばく之事廣忠元信末代諸不入に御寄進のうへは云々」とある事である。こゝに元信とするせるは、元信稱名時代に寺領を寄進したるよりして、溯つてかく稱へたるものであらうか、或は此頃はまだ元信と稱して居つて、改名はこれより後の弘治三年の末か、

高隆寺

遠くはなれしや

弘治三年

松平次郎

五月

元信

三修

に御寄進のうへは云々とある事である。こゝに元信とせるは、元信稱名時代に寺領を寄進したるよりして、溯つてかく稱へたるものであらうか。或は此頃はまだ元信と稱して居つて、改名はこれより後の弘治三年の末か。

高隆寺

一 大平造宗室重國より寺領

ゆゑに親下有る事

一 洞仙殿并ゆゑに新田ゆゑ

不了と書き置る事

一 堂心之境之親之ゆゑに

之を遺す事

一 古傳長行本と出たゆゑに

一 法役入りのゆゑに

名維護有主科ゆゑに

如敷ゆゑに

遠知多ゆゑに

弘治三年

松平清直

五月

元信

高隆寺

一 松平家康の御書
 一 徳川家康の御書
 一 徳川家康の御書
 一 徳川家康の御書
 一 徳川家康の御書

(徳川家康の御書)

弘治四年即ち永祿元年の正月頃であつたのであらうか、此事甚だ詳で無いが、想ふに元信と呼びたる時代の寄進なりしより、その際の稱呼を取りて、そのまゝかくしるし挙げたるものではなからうか。
 元來、この改名に就いては諸説紛々一定して居らぬ、朝野舊聞哀稿、増補家忠日記の文は先きに挙げたる如くであるが、落穂集にもまた三年正月十五日の事とし、徳川傳記は三年に係け、松平記、官本三河記等は二年正月に、武徳大成記は二年春に、岡崎古記は二年に係け、松井家證文は二年六月六日元康の名を挙げ、御庫本三河記には婚儀を二年二月十三日とし、改名を三年とし、創業記考異は婚禮を天文廿三年とし、參河記は年月を記さず、或は婚儀と改名とを同時とし、或は異時として定まる所を知らぬ、而してこゝに考ふべきは、元信が婚儀の祝として貰ひ受けし良馬を、更に義輝將軍に献じたる時の事である、次に引く義輝の喜びの手書の日附なる三月廿八日が、弘治三年とすると、改名と共に婚儀を挙げたりと思はるゝ五月以後と合致せぬ、もし此三月が翌弘治四年即ち永祿元年とすれば、永祿元年の正月頃に改名並に婚儀が行はれたるものと想像せられぬでもない。また若し婚儀と改名とは時

を異にし、弘治三年の正月か二月に婚儀を挙げ、その後五月頃に至つて改名したるものとすれば、手書の三月は弘治三年のものと爲すべきであらう、いづれにして此事甚だ明瞭を欠いて居る。

關口義廣の妻(即ち家康の室なる築山御前の母)を、義元の伯母と云ひ、また妹なりとも云ふ、されど年齢を推算すれば、妹と云ふ方が當れるやうである。

元康が義輝將軍に良馬を献じたる由は、誓願寺の文書に、

今度早道馬事内々所望由申候處對松平藏人佐申遣馬一疋毛則差上候段悦喜此事候殊更無比類働驚目候尾州織田三介かたへ雖所望候于今無到來候處如此儀別而神妙候此由可被申越事肝要候尙松阿可申也

三月廿八日

義輝花押

誓願寺泰翁

第二節 活動期

永祿元年、元康年十七、次第に活動の期に入つた。まづ二月五日に寺部城主鈴木日向守重教を討つ。重教はかねて織田氏に通じたれば、義元、元康に命じて討たしめたのである。元康岡崎に歸つて兵を率ゐ、寺部を攻めてその

寺部舉母梅ヶ坪廣瀬の城攻

外郭を焼く、本多作左衛門重次奮戦疵を蒙り、第九藏重玄は戦死した。松平次郎右衛門重吉も軍功を盡し、其子般若之助重茂また討死した。元康更に梅ヶ坪、舉母、廣瀬、伊保等の諸城を攻めて岡崎に歸り、また幾程もなく駿府に赴く。

參河物語に云へる、永祿元年戊午の歲御年十七歲、そのおり岡崎え引入給ひて、寺邊の城へ押寄給ひて、外輪を押破り、放火して岡崎へ引入らせ給ひて、次に梅がつぼの城へ押籠給ひければ、城より出で、防戦と云共、何かは以てこたへべき、付入にして外構へ追入、二三の丸まで焼拂ひて、數多討取て、それより岡崎へ引かせ給ひて、次に廣瀬の城、衣の城へ押寄給ひて、數多討捕り、構を破り放火して引のきさせ給ひ、それより岡崎へ引入給ひて、程なくまた駿河へ返らせ給ふ、御譜代衆の悦申事無限、扱も何と御そだち給ひて、弓矢の道も如何におはしまさんと、朝暮心元なく案じ參らせ候へば、扱もく、清康の御勢に能くもく、たがはせ給はぬこと、目出たさと申し、各感涙を流して悦びけり」とある如くに、譜代の士が、元康の武略を感じ悦びたる事が想ひや

岡崎の將士元康を岡崎に返さん事を乞ふ

此年、岡崎の將士、元康を岡崎に歸さしめたまへど、頻りに義元に請ひしが、義元終に許さなかつた。武徳編年集成並に伊東法師物語に、是年老臣本多豊後守廣孝、石川安藝守清兼、天野甚右衛門景隆等、駿府ニ相詰メ、三箇條ヲ訴フ、一ニハ、徳川殿岡崎ニ御在城ヲ許シ玉ハ、老臣等人質ヲ駿府ニ納ムベキコト、二ニハ、今川ヨリ岡崎城ヘノ在番ヲ止ラルベキコト、三ニハ、額田郡岡崎加茂郡山中ノ知行分悉ク返シ賜ハルベキコト、此趣頻リニ願ヒタレドモ、義元是ヲ聽カズ、近來織田退治トシテ發向スベシ、其序ニ境目等巡視シテ、父祖ノ舊領相違ナク返シ與フベキ旨ヲ答フ、三臣口ヲ噤シ憤リヲ含ンデ參州ニ歸ル云々」と、これ一つは近來の元康の武者振を見て、その指揮の下に活動せんと欲する念の抑え難きと、一つには成人せる元康をいつを限りともなく留め置く義元の所置怪しく、いよく松平の領地を押領せん下心なるべしと、主家の先途を氣遣ひたる將士の心中さもあるべき事と思はる。

また此年、今川、松平の軍、水野下野守信元と石ヶ瀬に戦ふ、水野藤次郎忠分、同藤十郎忠重よく防ぐ、松平の士阿部四郎兵衛忠政、先鋒の兵を射殺し、十七歳なる渡邊半藏守綱また高名を揚げた。

石ヶ瀬一回の戦

年は永祿の三年となつた、今川義元大舉して西上せんとする風聞あり、織田信長は五月五日に吉良に侵入して、所在火を放つて威を示す、此時實相寺兵燹に罹る。

信長諸砦を修む

信長また、丹下、善照寺、南中島、丸根、鷺津に砦を構へて今川氏に備へた。信長記に、鳴海の城、南は黒末川とて入海、鹽の差引城下迄在之、東へ谷合打續、西又深田也、北より東へは山つゞき也、城より廿町隔て、たんげと云古屋しき有り、是を御取出にかまへられ、水野帶刀、山口ゑび之丞(守孝)、柘植玄蕃頭、眞木與十郎、眞木宗十郎、伴十左衛門尉。東に善照寺とて古跡在之、御要害候て、佐久間右衛門信盛、舍弟左京助親盛(或は信辰とも)をおかれ、南中島とて小村あり、御取出に被成、梶川平左衛門をおかせられ、黒末入海の向に、鳴海大高間を取切、御取出二ヶ所被仰付、丸根山には佐久間大學盛重をおかせられ、鷺津山には織田玄蕃信昌、飯尾近江父子定宗、其子隠岐守信宗をおかれ候きとあるので、大要を窺はる。

鳴海根古屋城。鳴海驛の根古屋と云ふ地に在り(愛田郡誌に、鳴海町字城及根古屋に、現在すまある)村の舊記に、東西七十三間、南北三十間と記したれど、東西七十五間半ばかり、南北三十四間あり、四方に堀あり、

本丸二之丸境にも堀あり、城域皆島なり、地方覺書に、東西九十二間、南北二十間あり、城主は安原備中守(宗範)、其後岡部五郎兵衛、又佐久間右衛門尉信盛、其子甚九郎正勝等なり。同所丹下城。同驛丹下(根古)と云ふ地に在り、村の舊記に、東西四十一間、南北二十四間、制札場より九町子の方にあるよし、へり、城址すべて島なり、實は東西四十六間、南北四十三間あり、永祿の頃、織田氏の臣水野帶刀、山口海老丞、栢植玄蕃九こゝに居る。

同所中島城。同驛中島(今は下中)と云ふ地に在り、扇川の邊民居の中に、城域ばかりがたし、制札場より辰巳の方四町ばかりなるべし、舊記に長八十間、幅五十間さかけり、永祿の頃、梶川平左衛門(或は平左衛門とも)住めり、舊墟すべて民居にて間數定めがたし、民家の裏竹林の中に、いさゝかなる塚あるを梶川が墓なりと云へり。

同所善照寺砦。善照寺と云ふ地に在り(愛知郡善照寺町に在り)、制札場より六町卯の方にて、舊址に古松樹七本あり、舊記に東西三十三間、南北二十間とあれども、東西二十四間ばかり、南北十六間ばかりにて、界内皆島なり、佐久間左京助こゝに居り。(尾張志)

鳴海の城は、先きに山口左馬助が今川氏の軍を入れたるが、義元は、信長の反間の策を信じ、今川氏に叛くものなりとして左馬助父子を殺し、岡部五郎兵衛元信をして代り守らしめた。

義元西上

五月に入つて、義元はいよゝゝ駿府を立て西上した、元康も之に従つた。誰か想はん、威風堂々と駿河を發せし義元が、十日を出でずして桶狭間に無慘

大高城の兵糧
入

の敗死を遂げんとは、天、松平氏に啓運の機を與へたものである。參河物語に、義元は駿河遠江三河三ヶ國の人数をもよをして、駿府を打立て、其日藤枝に着く、先手の衆は、嶋田(金谷)、仁坂(掛川)、懸河に着く、明れば藤枝を立て懸河に着く、先手は原河(袋井)、見付、池田に着く。明れば懸河を立て引間に着く、諸勢は本坂と今切に兩手にわけて押し出で、御油、赤坂にて出合けり。義元は引間を立て吉田に着く、先手は下地の五井、小坂井、御油、赤坂に陣取る。吉田を立て岡崎に着く、諸勢は屋萩、鶴頭、今村、牛田、八橋(知立)、地りうに陣を取る。明れば義元地りうに着き給ふとあつて、義元の知立着は十七日であつた。家忠日記増補に、五月十七日、今川義元四萬餘騎の兵を率して參州池鯉鮒に至るとある。此時大高の城には、鶴殿長助長照が籠りたるが、兵糧少くして難儀の由につき、十八日の夜、元康をして糧を大高城に納れしめた。敵陣の間を過ぎて、兵糧納ること大事なりとて、鳥井四郎左衛門(信廣)、石川十郎左衛門を物見に遣る、歸りて申すに、事甚だ難儀なりと、然るに杉浦八郎五郎(勝吉)見て來て、いやゝゝ苦しからず、速に納れたまへ、麓なる敵が山上へ引上げ行くは、我軍を恐れて戦を欲せざるなりと云ふ。元康尤と思ひて、進んでことなく兵糧

を城中に納れた。參河物語に「鳥井四郎左衛門、杉浦藤次郎、内藤甚五左衛門、同四郎左衛門、石川十郎左衛門など見て參り、今この兵糧入は如何御座可有哉、敵陣いくさを持て候と被申上候處に、杉浦八郎五郎參て申上候は、早々御入候へと申上ければ、各々被申けるは、八郎五郎は何を申上候哉、敵きをいて陣いくさを持たると云ふ、八郎五郎申す、いや、敵は陣いくさは持たず、御旗先を見て山なる敵方が下えおろさば、陣いくさを持たる敵なれども、御旗先を見て下なる敵が上え引上申せば、兎角に敵は武者をば持たぬ敵にて、御座候間、早々入させ給へと申しければ、八郎五郎が申すごとくなり、早々入れよと仰て、押立て入させ給へば、相違なく入給ひて引のけ給ふ、大高の兵糧入と申して、御一大事なり」とありて、永祿元年の事とすれど、前後の事情よりして、桶狭間役の際となすを正しとする。

十九日の黎明、朝比奈備中守泰能、鷺津を攻め、元康丸根城を攻む、元康軍を別ちて三隊となし、烈しく攻撃す、守將佐久間大學盛重戦死し、鷺津城將飯尾近江守等もまた討死し、二城共に陥る。義元乃ち元康をして、鶴殿に代つて大高城を守らしめ、自ら桶狭間に陣した。

(朝野舊聞哀稿に、大高村古城、東西五拾九間、南北十八間、四方廻、所は大高村辰巳之方也)

鷺津丸根城落つ

義元戦死

(す。載)
織田信長は、十九日の拂曉、清須を發し、善照寺の砦に入つて兵を整へ、間道より進む、織田氏の先鋒、佐々隼人正、千秋秀忠等、義元の軍を衝き、敗れて死す。義元二將の首を見て、意驕り備を怠る、折柄、天俄に曇り、白雨頻りに至つて、風砂面を打ち、電雷膽を奪ふ、信長雨の晴るゝを待つて、驀然に敵の牙營を衝き、遂に義元の首を斬る、駿河の軍大に亂る。

桶狭間古戦場址。豊明村大字榮に在り、東海道の南陵の間に、今川治部大輔義元の墓あり、此附近に七將の塚の點在するありて、各其上に碑あり、或は云ふ、實際の場址は田樂狭間とて東海道の北に當れり。

義元の墓より東南十間餘の所に桶狭間古碑あり、撰文は尾張儒秦鼎。

古傳説に、陰夜東海道を通行するもの、必ず騎馬の將士が劍戟を振ひて馳突する状を認む、これ義元の亡靈なり。

徳川家康、此街道通行の節は、必ず下乗して義元の墓を拜せりと云ふ、これその恩義を重んじたるなるべし。

鏡掛松と稱するもの、東海道の北田圃の中に在り、鬱蒼として翠綠濃なり、これその當時、義元が酒宴の半、鎧を投げ掛けたる松なりと、今存するもの、はもとよりその際のものにあらざるべし。(歴史)

元康大高城を
出で岡崎に入
る

大高城の兵、義元の戦死を聞き、元康に大高城の撤退を勸む。元康容易に動かす。然るに、水野信元の使、浅井六之助道忠來りて、義元の死は眞なり、我嚮導仕らん、速に引上げたまへと云ふ、信元は敵なり、其使の云ふ所も信じ難しと思ひ、人を遣つて探らしむるに、疑ふべくもなかつた。仍つて夜に乗じて城を出づ。浅井道忠、並に上田平六近正と云ふもの、嚮導となり、肅々として進む。上田は今村まで従つた。かくて二十日に大樹寺に入り、岡崎の城代三浦飯尾兩將の城を去るを待つて、岡崎城に入つた。實に永祿三年五月廿三日である。元康年正に十九歳。六歳奪はれて尾張に入り、八歳一度歸りしが、程なく駿府に赴き、十二個年の間、人質の生活を送つたのである。艱難爾を玉にす、將來の大活動の爲に、良き訓練や體驗を得たものといふべきである。

今川義元、今度尾州表發向するに及び、君をば鶴殿にかへて大高城を守らせしに、義元はか
らすも桶狭間にて織田信長に討れし時、君にはその沙汰聞し召つれど、虚實いまださだか
ならず、かゝる所に御母方の御おぢなりし水野下野守信元より、浅井六之助道忠して、その
よし告奉りしは、義元既に討れぬ、今川が持の城々皆明退たり、君にもはやく其城を捨て、御
本國へかへらせ給へし申す。御家人等も同じ様に勸め奉る。君聞しめし、野州外家の親

なりさいへども、當時織田方に屬する上は、その言信じ難し、もしそのいふ所の實ならざら
んには、故なくして當城を明退き、人に後指さされんば、武門の恥辱是にすぎず、道忠をば捕
へ置て味方の一信を待べしと仰ありて、今までは二丸におはせしを、俄に本丸に移らせ給
ひ、ひさへに守禦の備をなし給ふ、しばしして岡崎の城守りたる鳥居忠吉が方より、事の様
詳に聞えあげ、且今川より岡崎の城守らせし者共も引退よしなれば、さらば此城引はらへ
と仰ありて、道忠を嚮導さなされ、宵の間は道たごゝし、月待出て引取さ命ぜらる、諸人は
一刻もはやく引んと思ふに、いさ悠然として、忽忙の様見え給はず、時刻にもなれば、道忠に
松火を持しめ、御先に進しむ、古兵のいひしごとく、夜中に敵國をおしゆくにはその習あり、
騎馬を十町ばかり先に立て、歩行立には松火を持しめずと仰ありて、艱阻の所毎に道忠松
火を振べしと定められ、上下卅人ばかりの士卒を隨へ、切所に一人づゝ殘して、後來る者
に知らしめ、路々一揆共を追はらひつゝ、池鯉鮒に生まれ、遂に恙なく岡崎の城に還らせ
給ひしなり。(落穂集、岩淵夜話別集)

桶狭間にて今川義元討れし後、君には御本國に還らせ給ひても、直に岡崎城へ入せ給はず、
御人數を大樹寺に留めらるゝ事三日なり、これよりさき、義元は其臣三浦飯尾岡部などに
岡崎を守らせ、いまだ御當家へかへしたてまつらん心にはあらざりしかば、今義元死せり
さて、これを僥倖として御入城あらば、信義に缺たりと思召て、かく御滞留ありしなり、さて
岡崎城守りし今川方の者どもは、義元の敗亡を聞て、城を明て立退くよし聞しめし、人の捨
るものならば拾へしと仰られ、やがて御入城ましゝけるとなり。(武徳大成記)

家康の大高撤退について諸説一様ならず、岩淵夜話別集には家康、義元討死の眞偽を疑ひ、

浅井、小栗二氏を岡崎に遣はし、守將山田新右衛門に議し、その言を用ひて退くとし、治世元記に、新右衛門は岡崎に在りしが、駿軍戦敗を聞いて尾張に入り、義元の墓前に自盡す云ふ、されど桶狭間の役、新右衛門は後軍に將とし、諸軍潰敗に及び奮闘して戦死したのであるから、別集と元記の説は誤つて居る。落穂集、増補家忠日記、武徳編年集成等、家康は水野信元の言を信せず、浅井道忠を捕へおき、確報を待つて是非を決せんと思ふ折柄、岡崎の鳥居忠吉並に三浦飯尾等より變を告げ來る、家康乃ち岡崎に歸るさしるす。御先祖記には、家康道忠を遣り、織田氏の陣營を窺はしむ、信長部下梶川平七、さきに家康に志を通じ、來つて戦況を報ぜんとし、遂に道忠に逢ふ、よりに告げて去る、道忠歸り報す、老臣退城を勸む、聽かず、二十日今川氏の命によりて始めて退くとし、水野氏の事に及ばず。參河東禪寺記同前に、家康參河に退く時瘴癘を患ひ、遂に劇甚を加ふ、伊奈忠次之を祈攘す、載せ、桶狭間合戦記には、刈屋の水野下野守、緒川の永野四郎右衛門、各々退去を勸むさしるす。多くは事實を誤れるやうである。

また浅井道忠についても、寛永譜には、道忠岡崎迄供奉す云ひ、増補家忠日記、寛政重修譜武徳編年集成等、道忠送つて今村に至つて還る云ひ、水野勝成覺書、御庫本三河記、治世元記には、今村より還るものを上田平六としてある。今之に従つた。

鳴海城撤退

駿軍大敗のため、今川氏の諸城皆潰えたるが、獨り鳴海城にありし岡部五郎兵衛元信は、堅守して下らず、信長の兵之を攻めたるも容易に屈せざりしが、今川の老臣等論して退去せしめた。元信乃ち義元の首を信長より請ひ受

け、六月八日城を撤退し、遂に刈谷城を襲うて水野藤九郎信近を斬り、悠々として駿府に歸つた。

第三節 岡崎城に入る

岡崎城に入る

元康は愈々岡崎城に歸つた。これよりは自主獨立我が力によりて我が運命を開拓しなければならぬ時となつた。その心は如何に躍つたであらう。前途は茫としてたゞ遼遠である。されど今これに就いて苦慮する必要はない。まづ當面の問題を解決すべき胸算を立てねばならぬ、それは主とし附近の諸族と、今川氏並に織田氏との關係である。元康は之に就いて直に着手し初めた。

本宿の法藏寺に家康最初の禁制と稱するものがあり、左の如き文言である。

一、殺生禁斷之事

一、可下馬之事

右條々於違犯之族者速可處嚴科者也仍如件

永祿三庚申年七月九日

松平藏人佐元康

なほ碧海郡大濱下之宮神主長田與助同喜八郎に宛てたる、永祿貳年己未十一月廿八日の

元康署名の沙汰書があり、東加茂郡松平村築山の妙昌寺に、年號は記さゞれど、九月日の日附ある元康署名の禁制を藏する。元康と署名のある文書は多く存して居らぬ。

舉母梅ヶ坪廣瀬の戦

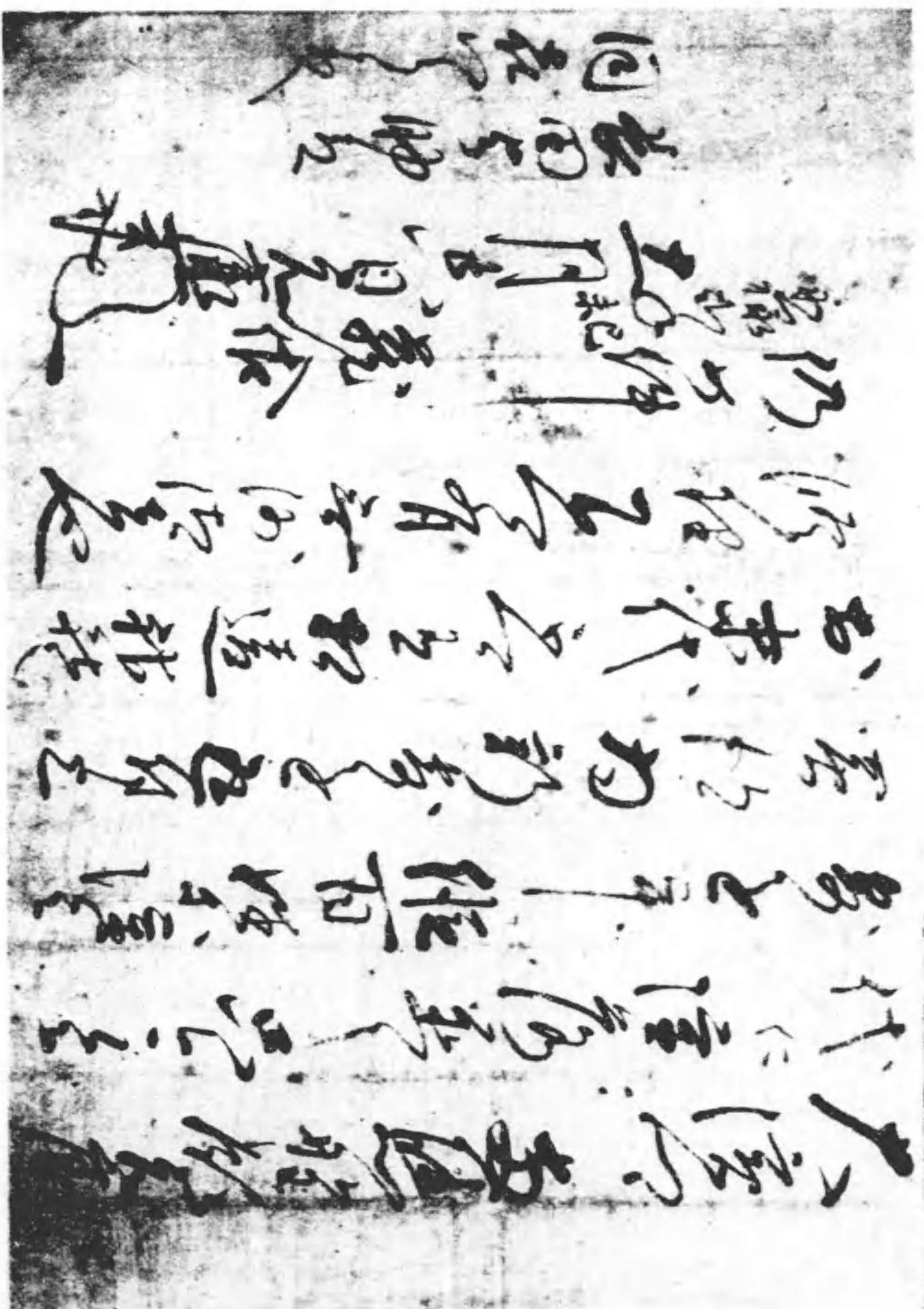
沓懸城下に火を放つ

石瀨二回戦

此年、元康は舉母梅ヶ坪等に軍を出し、更に廣瀬の城を攻めんとして、城主三宅右衛門大夫師重と拂楚坂に戦ふ。我が先軍利あらざりしが、元康自ら槍を執つて奮戦し、大に廣瀬の軍を破つた。師重降参し、梅ヶ坪城主政貞また降つた、仍つて軍を轉じて織田信蕃が籠れる沓懸城を攻め、門口を破り火を城下に放つて歸つた。

再び水野信元と石ヶ瀨に戦ひ、また刈谷城外十八町畷に於ても戦つた。

元康君には早速御陣觸を成、岡崎を御出勢被遊、信長持の舉母梅坪の兩城へ御取懸、外曲輪を御攻ちらし放火被成、御引取云々、また御一族を以て岡崎を御出勢被成、廣瀬の城主三宅右衛門尉御取懸被成、御一戦に被及候處、御先手の衆聊勝利を失ひ被申候を御覽被遊、御旗本を被進御一戦を被遂候者、敵兵忽に敗走仕候に付、夫より直に沓懸の城へ御取懸被成、城下の民屋を悉く放火被成、御勢を可被入と有之所に、信長より當城に籠被置候織田玄蕃允、城より突て出、御跡を附したひ候得とも、大久保新八郎能々殿り致し、御勢を被入候と也、其後又岡崎を御出勢被成、水野信元持の苜屋の城外十八町と申所に於て、苜屋勢と御一戦を被遂候處に、敵味方共、日頃見知たる者共の儀なれば、互に恥合、力を勵し、双方相引に致し、元康君には岡崎へ御馬を被爲入候と也云々。同年又岡崎を御出勢被遊、水野信元と石ヶ瀨



(藏所氏之忠田長 町濱大)

に於て、御一戦の刻、御家中に於ても、鳥居四郎左衛門、大原左近右衛門、矢田作十郎、高木九助、
寛平三郎、杯別而軍功有之と云ふ也、夫より間もなく御出勢被成、寺部舉母兩城を御攻撃被遊云
々。(落穂集)

石瀨三回戦

永祿四年二月六日に及んで、亦復水野信元の軍と横根に戦ひ、なほ進んで石瀨に戦ふ。我が先鋒石川伯耆守數正、敵將高木善次郎(主水)清秀と鏖を合す、本多肥後守忠真、植村庄右衛門正勝(武徳編年集成に
は忠安とある)松井左近忠次、勇を勵ます、中にも忠真は、一日に七度まで鏖を合せ、手負ひながら働いた、七度目の時、敵皆逃散つたれば、參河の者六度半の鏖と稱へてその働きを譽めた。
張州府志に「石瀨川在大府村與村木村之間、永祿元年戊午、神祖與水野下野守信元合戦于此、我兵鳥居四郎左衛門、大原左近右衛門、矢田作十郎、蜂屋半之丞、大久保七郎右衛門、高木九助接鎗、四年又合戦于此、我將石川伯耆守、與高木主水最先接鎗、本多肥後守、植村庄右衛門亦有武功」とあり、石ヶ瀨には實に永祿元年、三年、四年と三回の戦があつた。

此月板倉彈正重定、その族三次郎重宗、主水重茲と中島城に據り、近郷を掠む、元康、松平大炊介好景を遣はし、中島城を攻めしむ、重定等破れて岡の城に據

中島及び岡の
戦

る、元康自ら將として之を攻め、丸山に陣し、河合勘解由左衛門の謀により城を陥る、重定等東參河(八幡とも云ふ)に走る、元康、好景の功を賞めて中島長良の二邑を與へた。

岡村之城主板倉彈正筑手へ立退候後、河合勘解由左衛門に岡村之城屋敷御預被成、以來は御代官可被仰付旨にて御墨付拜領仕候。

作岡代官之事如前々申付訖一度領掌之上不可有相違者也仍如件

永祿四年辛酉九月十八日

元康御書判

河合勘解由左衛門とのへ (岡村記)

桶狭間の役後、元康はしばしば今川氏眞を促して、織田氏を討つて報仇せんことを勸むれども、氏眞怯懦にして元康の言を用ひず、是に於て元康は今川氏の恃むなきを知り、交情舊の如くならず、折柄水野下野守信元は、織田松平兩氏の間に立ちて斡旋する所あり、まづ信長を説いて和睦の義を圖り、また元康に織田氏と和する事の利を云ふ、元康即ち老臣を集めて謀る。皆其議に同す。獨り酒井將監忠賀のみは悦ばずして上野城に歸つた。されば之を討たんと云ふものあれど、元康は聽かなかつた。

織田信長と和す

かくて和談の儀容易く進んで、此二月に、尾張よりは林佐渡守通勝、瀧川左近

將監一益、岡崎よりは石川伯耆守數正、高力與左衛門清長、鳴海に相會し、境目を定め、雙方守兵を引上ぐ。氏眞之を聞いて元康を詰る。酒井雅樂助正親答へて云ふ、元康多年今川家の助を受く、如何でその恩顧を忘れん、然れども織田氏と境を接す、故に暫く伴つて和するのみ、今川氏に叛くにあらずと、氏眞の心解く。

東參河の將士元康に屬す

此時東參河の士、月谷の西郷彈正左衛門正勝、野田の菅沼新八郎定盈、長篠の菅沼左衛門貞景、其子新九郎正貞、段嶺武節、新城の菅沼小法師(寛政譜には刑部少輔某とし、編年集成には刑部貞吉とある)、井道の菅沼伊賀守定勝、作手の奥平九八郎貞能、川路の設樂越中守貞道、その他奥山修理、白井麥右衛門等、今川氏に叛いて元康に屬した。初め義元の時、形原松平左近將監家廣、竹谷松平玄蕃清善、質を今川氏に致す、義元之を吉田城に置きたるが、元康の織田氏と和するに當り、清善家廣また今川氏に叛く、こゝに於て、吉田城主大原肥前守資良(鎮實)は、清善の質なる其女、家廣の質なる右近(家廣の末子)、その他、西郷、奥平、菅沼、設樂、奥山等の質十一人を吉田城下龍拈寺のほりに於て串刺しにした。寛政譜には、家廣の質は、舟に乗せて形原の前なる井尾濱に於て串刺しにしたとある。この残忍なる所

置は、いよ／＼多くの將士の心を憤らしめた。

高師村大字福岡を通ずる國道が坂を上つた所に、十三本塚と云ふのがある。此時吉田城外龍拈寺口で串刺にされた人質十三人の屍體を葬つた所である。傳説に残れるが、十三人は、

松平玄蕃允清善妻、松平又七家廣妻、菅沼新八定盈妻、菅沼左衛門貞景妻、西郷彈正正勝妻、水野藤兵衛妻、大竹兵右衛門妻、淺野三大夫妻子、奥山修理妻、梁田妻、白井妻、

また異説には、

松平家廣、松平清善、菅沼定盈、菅沼定直、菅沼貞景、奥平貞能、西郷正勝、設樂貞通、奥山修理、水野藤兵衛、大竹兵右衛門、淺羽三大夫、白井夢右衛門、梁田某以上十四人の妻又は子、

前説にては一人不足し、後説にては一人多いやうである。(豐橋市史談)

是より先き、東條城主吉良三郎義安が織田氏に通ずる由をもて、今川義元吉良を攻めて、義安を駿河の藪田村に置き、刑部丞義諦をして西條並に東條を守らしめしが、元康の今川氏に叛くに及び、氏眞は義諦を東條に移し、寶飯郡牛窪城主牧野右馬允(新次郎)成定(寛政譜には、成定の父貞成の事と)をして西條を守らしめた。

善明堤の戦

此年四月十五日、義諦の兵富永伴五郎忠元、大河内善市郎政綱、瀬戸、川上等、酒井將監が籠れる上野城を攻めた。松平大炊介好景、元康の命により、其長子

松平主殿介伊忠をして上野城を救はしめた。義諦、中島城の微勢なるを聞き、急に之を攻む。好景此時深溝に在りしが、急ぎ來つて義諦と戦ひ、大に之を敗る。好景追撃善明堤に至り、勝に乗つて深入し、味方の兵續かざる所に、茂呂城に在りし吉良の兵押寄せて好景を圍む。好景奮戦すれども及ばず、遂に戦死し、弟松平十郎右衛門定政、同太郎右衛門定清、同久大夫好之、同新八郎景行等戦死し、板倉八右衛門好重、同三九郎、松平内記等、同族廿一人郎從三十四人討死した。之を善明堤の戦と云ふ。

西條城陥る

此時吉良の族荒川甲斐守義等(義等の父義廣なりとも云ふ、或は義廣義等は同じ人とも云ふ)、義諦と善からず、酒井雅樂助正親を荒川城に迎へ、共に西條城を攻む。城將牧野成定拒ぐ能はず、城を棄て、牛窪に走る。元康乃ち正親をして西條城を守らしめ、小牧の砦には本多彦三郎(豊後守)廣孝、津平の砦には松井左近忠次を置いて、共に與に東條を圖らしめた。

東條城降る

九月十三日に及んで、本多彦三郎廣孝、東條城を攻む。酒井正親また之を助けた。敵將富永伴五郎忠元、之を藤浪繩手に邀へて奮戦し、遂に討死した。參河物語に、本多豊後守手にて、藤波繩手にて、永祿四年九月十三日に烈しきせ

り合ありて、義明(義諦)家老富永半五郎を討取る。味方には大久保大八、鳥井半六郎など討死をする。義明も半五郎を討せたまひて、日ならずして頓て降参して、城を下させ給ひて、御ふちかたにてをはず、半五郎は其年廿五に成けれども、武邊のものなりと敵味方共に申けり。とありて、東條城は遂に降り、義諦は岡崎に送られたるが、後許されて再び東條に歸つた。

廣孝には、貝福駒場等の富永の領を賜ひ、酒井正親に西條城を與へ、鳥居彦右衛門元忠、松平勘四郎信一をして東條城を守らしめ、明年四月に至り、松井左近忠次をして城代たらしめた。

野田の城陥る

月日はやゝ、湖り、事は東參河に轉じ、この年の五月に、吉田城主大原肥前守資良(鎮實)は、伊賀の忍の者を先導として、菅沼新八郎定盈が籠れる野田城を攻めた。定盈、西郷孫六郎元正(定盈の従弟)と共に防戦甚だ力めたるが、寄手大勢なるを以て、敵の扱に任せ、定盈は城を致して西郷に立退き、高城と云へる地に砦を築きて居り、西郷正勝は堂山に城を構へて住んだ。

資良は、更に菅沼小法師が新城に攻めかゝる。然れども志を得ずして歸り去つた。

西郷正勝父子
五本松に戦死す

幾程もなく、牛窪の牧野出羽守保成、同右馬允成定等、定盈を高城に、西郷正勝を堂山に攻めたるが、敗れて引退く。

正勝更に五本松に城を築いた。然るにこの年九月十一日に、今川の將朝比奈紀伊守泰長、不意に五本松を襲ひたれば、防戦したれど力盡き、正勝其子元正と共に城に火を放つて戦死した。嵩山正宗寺にある西郷の位牌に、永祿四年九月廿六日とあれど、後世のものゝやうであるから恐く誤つたのであらう。

長澤鳥屋根城
を攻む

此年八月に、今川の將糟谷善兵衛、小原藤五郎、長澤の鳥屋根城に籠つて近郷を掠む。元康乃ち山中城に在る松平勘四郎信一をして之を攻めしむ。石川彦五郎(日向守)家成、松平上野介康忠、また共に戦ふ。然れども城容易く抜けず。元康自ら來り攻む。榊原彌兵衛忠政、衆に挺で、先登、元康、隼之助の名を與ふ、渡邊半藏守綱、小原藤五郎を討取る。城遂に陥り、糟谷は駿河に走つた。

織田信長と盟
を結ぶ

永祿五年正月に至り、元康清須に赴き、織田信長と盟を結ぶ。酒井左衛門尉忠次、石川伯耆守數正、同日向守家成、天野三郎兵衛康景、高力與左衛門清長、植

村新六郎家政等従ふ、林佐渡守通勝、菅谷九右衛門長頼、瀧川左近將監一益等、熱田まで出迎へ待遇甚だ渥し。元康岡崎に歸るや、信長直に林佐渡守、菅谷九右衛門をして報酬せしめた。

上郷城攻

此年、竹谷松平玄番、允清善、寶飯郡西郡上ノ郷の城主鶴殿藤太郎長照を攻む。長照は清善の異父兄なれど、鶴殿氏は今川氏に屬するによつてある。清善の軍攻むる事三日、寄手の軍利あらず、二月四日元康自ら名取山に陣し、松平主殿介伊忠、久松佐渡守俊勝、大久保五郎左衛門忠勝、松井左近忠次をして、上ノ郷を圍ましむ。忠次甲賀の忍の者を城中に入れて火を放たしめ、急に攻めて之を抜く。長照及其の弟長忠戰死し、長照の二子、三郎四郎氏長、藤三郎氏次を擒にした。上ノ郷城は久松俊勝に與へた。

次は山綱村に傳へたるものであるが、永祿六年とあるは恐らく五年の傳説であらう。文字は原文のまゝである。

參州額田郡山綱郷を被爲下置候御朱印御由緒書之御事

一、東照宮大権現様參州岡崎ニ御在城被遊候御時、永祿六亥年、同國寶飯郡上之郷鶴殿長門御責被爲成候ニ付、山綱郷之百姓共御發向之御案内被爲仰付、山路のはへ茂りを伐拂、山綱南山鹽聽之坂より大ふほしか嶺を御案内申上、暫此嶺に御陣を被爲遊候ニ付、御陣所御用

關口氏並に竹千代岡崎に來る

等山綱村之百姓共ニ被爲仰付相勸申候、然所ニ、御先手之大勢にて鶴殿落城放火いたし候を御上覽御悦喜甚々、御案内申上候者共に此所ハ何と申山ぞと御尋被爲遊處に、大ふほしか嶺ニ御返答申上候得ば、此嶺は扇之なりに似たる山なり、殊更祝儀も有之間、向後扇子山と名付、御立林に相守可申之旨被爲仰付、外山之儀は百姓居ふる草山ニ被爲下置候、依夫他村ニ相替り、山綱郷ニハ山手米も出し不申、從夫廿七年以後、天正十七年丑之九月十三日、山綱郷之名主百姓被爲召出、右之御由緒御座候故に、御事書七ヶ條之御朱印を被爲下置候、惣百姓共難有頂戴拜持仕候已上

山綱郷

此時、元康の夫人關口氏並に嫡子竹千代(三郎信康、永祿二)年三月の誕生は、駿府に在りしかば、人々その安否を危みしが、鶴殿氏の二子を擒にするに及び、これを駿河に送つて交換し、石川數正、關口氏並に竹千代を迎へて岡崎に來り、岡崎の士民始めて心を安んじた。關口氏は岡崎城内築山曲輪に住めるより、築山殿といひ、また駿河御前と稱へた。

菅沼定盈野田城を復す

當時なほ高城に住みし菅沼定盈は、野田の城を乗取らんと時を窺ひしが、永祿五年に及び、今川氏の族堀越六郎氏延、今川氏に叛き、遠州見付の城に籠る。大原肥前守は參遠の今川勢を催促して之を攻む、堀越拒ぎ得ずして自殺す。定盈此虛に乗じ、六月二日の夜半、急に野田城に攻寄せ、今川の守兵を逐つて

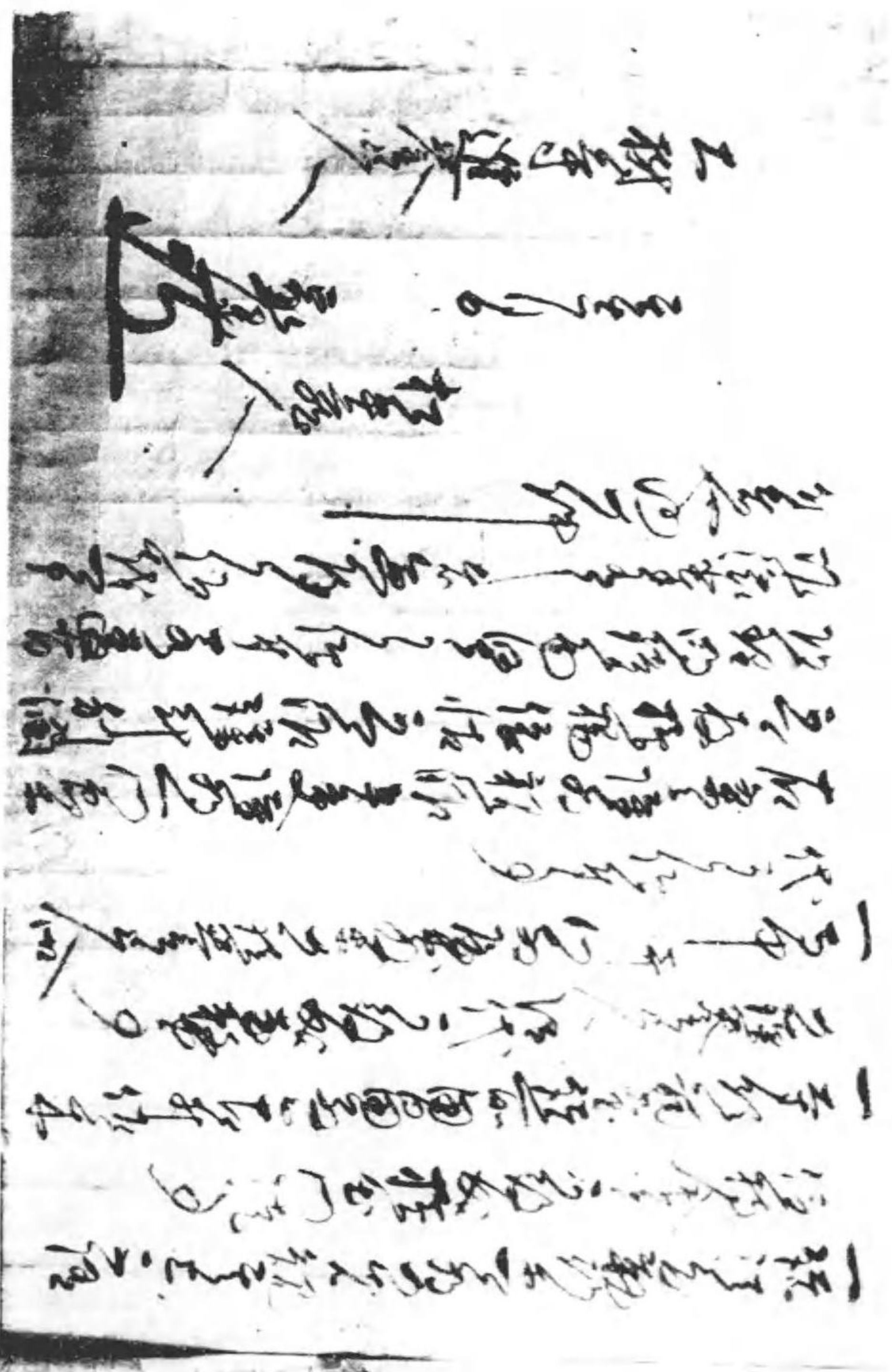
遂に舊城を恢復した。
此年元康屢々兵を東參河に出し、牧野成定を嵩山城に攻め、一宮に砦を築きて本多百介信俊をして守らしめた、よりに今川勢は、八幡、佐脇に砦を構へて之に備へた。

一宮の後詰

今川氏眞は、參河の地次第に松平氏に侵し奪はるゝを患へ、此年六月、自ら將となつて參河に來り、牛窪に陣し、兵を分けて一宮の砦を圍む、元康之を聞き、三千余騎を率ゐ、一宮の後詰を爲す、佐脇、八幡の敵陣の間を過ぎ、進んで氏眞が本陣の前を押通り、悠々として一宮に入つた。世に之を一宮の後詰と稱へた。

小坂井の偵察

時に武田信虎は、子晴信(信玄)に逐はれて駿府に在りしが(今川義元は、氏眞の不在に乗じて變を起さんとする由を聞き、氏眞急に軍を還した。)九月に入つて、元康また吉田牛窪を攻めんとす。先鋒の酒井左衛門尉忠次は、福釜の松平三郎次郎親俊等と、小坂井の五井の邊にて地利を察する所を、佐脇の將板倉彈正重定、小坂井の東の岡に打つて出づ、忠次手勢少く、利を失つて退く、敵兵追撃す。長澤の松平兵庫頭親廣、其孫源七郎康忠共に奮戦功



(藏 所 寺 樹 大)

この文書は永祿六年のものと思はるゝから、家康改名後の、最も早きものであらう。

八幡佐脇の砦
を抜く

竹千代の婚約

家康と改む

を顯はし、夏目次郎左衛門吉信後殿し、渡邊半藏守綱屢々敵と槍を合はす、人呼んで槍半藏と云つた。

元康來り救ひ、大に御油に戦つて敵を走らし、進んで八幡、佐脇の砦を抜く。

板倉重定、其婿板倉主水討死す。時は九月の廿九日であつた。元康乃ち小坂井に砦を築いて吉田牛窪に迫つた。

永祿六年に入つて、三月の二日に、織田信長はその女を以て元康の嫡子竹千代に娶す事の約を結んだ。

七月の六日に、元康の名は今川義元の與へたるものなるをもて、改めて家康と稱へた。

永祿五年の三月七日、同じ年の十月朔日の今川氏眞の禁制が、寶飯郡八幡村の八幡宮に存するを見れば、當時東參河地方には今川氏の勢力の行はれて居つた事が知らるゝが、豊富村の櫻井寺には永祿六年二月廿九日の氏眞の沙汰書がある。されば此頃まで、まだ此山間部には、今川氏の勢力の失墜しなかつた事が明である。尤も櫻井寺には天文十八年七月六日、弘治三年二月六日、永祿貳年五月廿三日の今川義元の白山先達訴訟裁決状があるから、その縁故にも頼つたものであらうが、然し浸潤したる力の容易に除かれぬものなる事が想はるゝのである。因に桶狭間戦後の永祿三年十一月十二日の氏眞の沙汰書が河合村小島氏方に存するが、これは當然の事である。

第四節 一向宗一揆

此の年の九月に及んで、家康を苦しめたる一向一揆が起つた。家康今や東参河より今川氏の勢力を驅逐せんとして殆んど成功してゐる。たゞ残れるは、吉田、牛窪、田原の數城であるが、牛窪の牧野氏は、最早今川氏を見切つて家康に好意を表せる時なれば、吉田城を守る大原肥前守、田原城を守る朝比奈肥後守を逐へば、参河は一定するのである。かゝる際に、一向一揆が突如として起つた。一向一揆の勃發は必しも参河のみにあらず、當時家康の心を悩ましたる事は可なり大なるものがあつた。然し幸にして家康の處置宜しきを得て、東参の將士も動搖せず、麾下に忠誠の士も多くして、程なく鎮定し得たるは洵に幸であつた。

一向一揆蜂起の原因

さてこの一揆蜂起の原因に就いては、種々の説があつて一定せざるが、永祿五年に野寺の寺内に徒者いたづらもののありけるを、酒井雅樂助押込檢断しければ、永祿六年正月門徒衆寄合、土呂針崎、野寺、佐々木にこもりて、一揆を起すと云ふ(参河物語)。或は永祿六年十月下旬に、野寺本證寺境内に住む鳥居淨心と云ふ者と、

永祿六年十月下旬に野寺本證寺境内に住む鳥居淨心と云ふ者と

永祿六年十月下旬に野寺本證寺境内に住む鳥居淨心と云ふ者と

淨心
鳥居

春河國勢領新、慎言之

一、慎行領同唐石等處、一、分、行領也

一、元夕、同、後、樂、許、田、也

一、石、田、中、一、放、牛、禁、行、事

一、供、儀、勤、行、也

一、祓、豆、出、行、也

右、系、之、年、來、領、事、了、能、神、祭、事、無、違、
持、行、神、事、一、後、後、主、競、中、字、一、向、之、違、
若、此、及、代、在、此、也、以、此、事、也、持、行、之、也、
カ、子、知、以、心、神、事、宗、礼、事、不、主、意、悟、之、也、
也、件

永祿二年二月吉日 貞貞 水

祓

物

翻

一 美行市 津江寺方

一 温坊 福籍

一 竹本 伐方

右 兼之 透松 少室

一 三 下 知 心 方 伴

永德寺

十月

福

兼

一 石原の邊に
 一 三ヶ寺物語には、數
 一 酒井將監が、公命と偽り、
 一 酒井將監が、公命と偽り、

一 酒井將監が、公命と偽り、
 一 酒井將監が、公命と偽り、



岡崎の若侍との争闘より始まれりとも云ふ（淨土眞宗參 河一揆の事）。三ヶ寺物語には、數
 説を擧げて、土屋長吉が其下人に罪を犯せる者あるを、土呂の善秀寺に追込
 み打取れるより起れりとも、松平三藏信次（三左衛門 忠倫の弟）野心を抱けるをもて、酒
 井雅樂助に命じて討たしめたるを、三藏上宮寺に逃げ込みたるより事始ま
 れりともあるが、此二説は誤であると思はる。或は家康が上宮寺に糯米
 を干したるを借し候へと申込みたるを、無禮なる振舞せしより、酒井雅樂助
 に命じて、其者を檢斷せしめたるが發端であるとか、酒井將監忠賀が叛逆の
 色あるを以て、菅沼藤十郎定顯をして佐崎に砦を築きて備へしめたるが、定
 顯上宮寺に赴き糧を借る、然るに、先きに將監が、公命と偽り糧を借りて返さ
 ざるを怒り居たる折柄なれば、却て悪言を發す、よつて定顯憤り糧を掠めて
 去つたるが原因なりとも（大參河志 等亦同じ）云へど、主たる近因は、菅沼藤十郎定顯が、
 家康の命により、碧海郡佐崎の邊に砦を構へたるが、兵糧不足の爲め、佐崎郷
 上宮寺野寺の本證寺、針崎の勝鬘寺と共に參州一向宗の三ヶ寺と呼ばれた
 に兵を發して糧を掠む、寺僧怒つて一向宗三ヶ寺の惡僧を催し、定顯を攻め
 て糧を奪返す。定顯、酒井雅樂助正親に訴ふ、正親使を遣りて僧徒を諭す。

僧徒其使を斬る。家康怒つて正親に命じて狼藉の悪僧を檢断せしめた。僧徒愈々怒つて、大に門徒を招聚して一揆を起したと云ふにある。

一揆に與せる者

此時一揆に與せる重なる者を擧ぐると、先きに許されて東條に歸りし吉良義誦、荒川城の荒川甲斐守義等、大草の松平七郎昌久、櫻井の松平監物家次、家次は櫻井菩提寺の碑文に、永祿六年七月廿九日歿とあり、これ正しきものと思はるれば、一揆に與したる由の説は誤である。上野の酒井將監忠賀、これに従ふ面々は、安達左馬助遠定、同彌一郎、鳥居四郎右衛門直忠、高木九助廣政、荒山兵衛、本多彌八郎、柳原七郎右衛門、大原左近右衛門、近藤傳次郎、酒井作右衛門重勝、鳥居金五郎。

野寺本證寺に籠れるは、大津半右衛門、犬塚甚左衛門、大塚八郎兵衛、同善五郎、五味三右衛門、中川太郎左衛門、牧吉藏、犬塚又内、石川黨、加藤黨、本多氏、中島安樂寺、其外すべて百餘騎。

上宮寺には、倉地平右衛門、太田彌大夫、同彦六郎、安藤治郎左衛門、同太郎左衛門、安藤金助、加藤孫之進、同勝之助、同幸之助、鳥居又左衛門、山田八藏、矢田作十郎、戸田三左衛門、其外合せて二百餘騎。

土呂善秀寺には、大橋傳十郎、佐橋甚兵衛、同甚五郎、石川半十郎、同善五左衛門、同十右衛門、同源左衛門、同新九郎、同大八郎、同右衛門八、同又十郎、大見藤五郎、佐橋亂之助、大橋左馬助、江原孫三郎、本多甚七郎、佐野與八郎、江原又助、山本小次郎、松平半助、小野新平、村井源四郎、山本才藏、加藤五左衛門、黒柳次郎兵衛、成瀬新藏、岩堀半十郎、三浦平三郎、本多九郎三郎、平井甚五郎、黒柳彦助、野澤四郎三郎等、其外都合百餘騎。

針崎勝鬘寺には、蜂谷半之丞、貞次、寛助、大夫正重、久世平四郎直宣、渡邊玄蕃允、同八郎右衛門、同八郎三郎、同源藏、同半藏等の渡邊黨、浪切孫七郎、近藤新次郎、黒柳孫左衛門、同金十郎、本多吉藏、加藤次郎右衛門、同源次郎、同又三郎、同傳十郎、同善藏、淺岡新十郎、同新八郎、安藤次郎右衛門、佐野小大夫、加藤源太郎、犬塚七藏、成瀬新兵衛、坂部又六郎、同庄之助、同相之助、同造酒丞、同又兵衛等、其他都合百餘騎。

味方の者

其他諸方の一揆を合すれば、都合一千餘騎との事であつた。家康に忠勤を挺ぶる者には、長澤に松平上野介康忠、五井に松平彌九郎景忠、竹谷に松平玄蕃清善、形原に松平紀伊守家忠、深溝に松平主殿助伊忠、各其城

を守り、本多豊後守廣孝は、土井の城に在つて針崎、東條の敵と戦ひ、酒井雅樂助正親は、西尾の城にあつて野寺の一揆、並に荒川の兵と戦ひ、藤井の松平勘四郎、信一、福釜の松平右京亮親俊は、野寺の一揆、櫻井の兵と戦ひ、高力には高力與左衛門清長、筒針には小栗大六、同彌左衛門、同仁右衛門、同助兵衛、渡村には鳥居彦右衛門元忠を初めとしての鳥居一黨籠り、岡崎城に馳集るものに、酒井左衛門尉忠次、石川伯耆守數正、同日向守家成、本多肥後守忠真、同平八郎忠勝、植村出羽守家政、成瀬藤藏政次、米津藤藏、榊原攝津守、同隼之助、松井左近忠次、平岩七之助、親吉、青山喜大夫、同牛之助、算圖書之助、石川又四郎、内藤四郎左衛門、天野三郎右衛門、同三郎兵衛、八國孫九郎、深津九八郎、布施孫左衛門、中根源太、同甚七、土屋勘助、同甚七等數十人、其他能見には松平圖書助親友、大給には松平源次郎親乘、瀧脇には松平出雲守乘高、三ッ木には松平與十郎忠清、弟九郎右衛門忠利、岩津には松平五左衛門近正等が居る。また上和田には大久保五郎衛門忠勝、平右衛門忠員、七郎右衛門忠世、治右衛門忠佐等の一黨が籠りて、土呂針崎の一揆と戦ふたが、一揆は岡崎に迫らんとしては、常に上和田に押寄す、その時忠勝、螺貝を吹立つれば、家康直に出馬し、一揆恐れて退散

野場の砦落つ

すると云ふ有様であつた。

こゝに戸田三郎左衛門忠次と云ふ者ありて、もと田原の戸田の一族なりしを、浪人して野寺に籠りしが、回忠して酒井の兵を導き入れんとし、露はれて危く殺されんとしたるが、やう／＼に逃げ歸つた。

六栗の野場の古城に、夏目次郎右衛門吉信籠り、野寺の一揆、大津半左衛門、乙部八兵衛を引入れ、近郷を掠む。深溝の松平伊忠之を圍む。乙部變心し、伊忠の兵を引入る、大津は逃れ去り、夏目は藏の中に身を隠し生擒となる。伊忠、家康の許しを得て、乙部夏目の命を助く。乙部は伊忠に屬し、夏目は後家康の麾下となり、三方原に忠死した。

十月廿四日、松井左近忠次、幡豆の郷に砦を構へ、東條を攻む、本多廣孝もまた東條を攻む。

小豆坂の戦

十月廿五日、針崎一揆、岡崎を攻めんと小豆坂に出づ、大久保黨これを防戦す、家康岡崎を出で、之を援く、黒田半平、植村新六郎、一揆の將渡邊源藏、蜂屋半之丞と鏑を合す、阿部四郎兵衛忠政は、川田彦十郎、喜藤八大夫、坂部又六等を射倒す、水野藤十郎、忠重、家康の麾下に屬し、また奮戦す。平岩七之助(親吉)算

針崎の戦

助大夫と戦ひ疵を蒙つた。

大久保の一族、針崎を攻めんと出で戦ふ。本多三彌正重は鐵砲を以て大久保七郎右衛門忠世をねらふ。忠世また馬より下りて三彌をねらふ。三彌の彈丸は中らざりしが、大久保の彈丸は三彌の股に中る。三彌引退く。一揆等かねて謀を廻らし、軍を二隊に別け、一隊は大久保と戦はしめ、一隊は妙國寺、上和田の間道を遮り、其歸路を狭撃たんとす。蜂屋半之丞、大久保氏と縁親あるを以て、妙國寺邊に馬を乗り廻し、密にその謀を知らしむ。大久保の族即ち兵を收めて事なきを得た。此時上宮寺の一揆、馬場小平太、石川新七郎、矢田作十郎等、迂廻して岡、大平に出で、戦を挑む。岡崎勢押寄せて戦ふ。天野三郎兵衛康景、馬場小平太を討取る。賊徒力を失つて逃げ歸つた。

此頃、上野の酒井將監打つて出で、岩津、細川、大樹寺邊に放火せんとする由の報あり。本多平八郎忠勝、石川日向守家成、馳せ向ひ、まづ矢矧川の東岸に兵を伏せた。酒井の斥候、久目六兵衛、川を渡つて岸に上る所を、深津八九郎躍り出で、鎧にて突殺した。將監斯くとも知らず、岩津の妙心寺の方へ打渡る所を遣り過し、伏兵とつと起つて狭撃にした。酒井の軍驚きながら火の

岩津の戦

岡、大平の戦

出づる程に戦ひたるが、黒田彦左衛門、高神、小松等深手を負ひ、その他能き侍討たれたれば、崩れ立つてはふくく川を渡りて逃げ散つた。

永祿七年正月三日、家康、佐崎に砦を設けて巡見しける時、土呂の一揆、岡、大平、生田に出で、火を放つ。大平の本多黨、柴田黨、菅生の倉橋、箱柳、田口の中根、秦梨の酒井、粟生の近藤等、防ぎ戦ひ、散々に射る。一揆破れて退く。家康警を聞いて來救はんとし、小豆坂に於て賊の退くに遭ふ。水野藤十郎忠重は、石川新九郎を討取り、佐馳甚五郎、大見藤六郎また岡崎勢に討取られ、波切孫七郎は家康に二槍突かれて危く逃げ去つた。

一向亂の時正月三日、小豆坂の戦に、大見藤六は前夜まで御前に伺公し、明日の御軍議をき、すまして賊徒に馳加はりしかば、君近臣に向ひて、明日はゆゝしき大事なれ、藤六さだめてこなたの計略を賊徒にもらしつらん、汝等よくく戦を勵むべし、我もし討死せば、藤六が首切て我に手向よ、これぞ二世までの忠功なれと仰けり。かくて明日、藤六と石川新七兩人眞先かけて攻きたり、新七は水野惣兵衛忠重が爲に突伏らる。藤六には水野太郎作正重打むかひ、汝のがすまじとて打むとす、藤六弓引て、せがれめ、よ

らば一矢に射とめむと、まじ構へたるをもかへりみず、正重、鎧提て間近く進むに、流矢來て藤六が腕にたてば、弓矢を捨、太刀拔んとする所へ、正重鎧付しが、札堅くして徹らず、藤六拔はなちて正重が冑を切けるに、これも切得ず、よつて太郎作も鎧をすて、刀にて切合ひ、終に藤六を切倒しければ、倒れながら無念なりとて念佛唱る所を、其首打落す。かくて二人討れければ、賊徒みな敗走す。正重、藤六が首を御前へもち参りしかば、藤六をば汝が討ちたるか、汝が一人の忠功なれとて御稱譽あり。(徳川實紀)

上和田圍まる

正月十一日、土呂、針崎、野寺の一揆等、相會して上和田の城を攻圍む。大久保五郎右衛門忠勝、矢に中つて眼を傷き、七郎右衛門忠世も疵を蒙る。上和田危急の由を聞いて、家康岡崎を出づ、土屋甚助、筒井甚六郎、先陣に進んで六名郷を發し、勇を振つて力戦す。中根喜藏、一揆の渡邊半藏と槍を合はす、半藏の父渡邊源五兵衛高綱、内藤甚四郎正成に射られて倒る。土屋長吉重治は、一揆方なりしが、家康の危きを見て、戈を倒にして家康の先隊に加はり、奮戦矢に中つて死す、此戦に家康鐵砲に中りたるが、幸にして疵を蒙らなかつた。正月十一日、上和田の戦に、賊徒多勢に攻來り、味方難義に及ぶよし聞し召

し、御みづから單騎にて馳出で救はせ給ふ、其時賊勢盛にして殆危急に見えければ、賊徒の中に、土屋長吉重治と云者、われ宗門に與すといへども、正しく君の危難を見て救はざらんは本意にあらず、よし地獄に陥るとも何かいとほんこて、鋒を倒にして賊徒の陣に向つて戦死す。此日御冑の内、に銃丸二つとどまりけるが、御鎧かたければ裡かゝず、戦はて、のち石川家成に命せられ、重治が屍を求め出して、御手をかけられ、いたく嘆惜し給ひ、上和田に葬らしめ、厚く追善をいとなまれしとなん。又此日、柴田七九郎重政、己が名を矢に彫て射たりしが、其矢に中りて死するもの數十人、賊徒其精兵に感じ、重政が放ちし矢六十三すちをとりあつめて御陣に送りしかば、君御覽して、御賞譽のあまり、御諱の字を賜ひ、康政とめさし、六十三の文字を旗の紋とし、名をも矢の數にならひ、七九郎とめされしなり。(徳川實紀)

廿五日、深津八九郎、青山虎之助兩人は、上宮寺に忍入り、火を放たんとして、太田黨の爲に見咎められ、遂に殺された。

二月八日、酒井正親の籠れる西尾の城、兵糧乏しくなりたれば、刈谷の水野信元の援を乞ひ、事なく糧を納れ、櫻井、小川、野寺、八面に火を放ち、荒川城の兵打

八面驚塚方面の戦

つて出たるを打破り、鷲塚野寺の一揆また來り戦ふを攻破る。一揆の將馬場半大夫、鈴木彌兵衛等討死し、櫻井の圓光寺疵を蒙つて自殺した。

二月十三日、石川又四郎、根來十内、布施孫左衛門等、勝鬘寺に斥候に赴き、伏に陥り、根來、布施共に討死し、石川は疵を蒙つて退いた。

此時、上宮寺の一揆三百餘人、矢田作十郎を大將として岡崎に押出す。家康自ら軍を出して之と戦ふ。矢田真先に進む所を鐵炮に討たれて戦死し、一揆破れ走つた。

上宮寺の一揆
攻寄す

一揆退散

かく一揆の勇將次第に討たれて、勢甚だ振はず、善秀寺に籠る吉田源太左衛門まづ志を翻し、また蜂谷半之丞は大久保忠勝に諭されて歸順を願ひ出で、本多彌八郎、渡邊半藏も罪を許されんには降を乞はんと云ふ。家康、大久保等の勸により、一揆を起したる僧俗すべての罪を許す事とし、石川日向守家成をして、渡邊、蜂谷等を嚮導とし、善秀寺、勝鬘寺、上宮寺、本證寺に赴き、一揆を諭し退散せしめた。

東條の吉良義誦、荒川城の荒川甲斐守は、城を棄て、出奔し、上野の酒井將監、大草の松平七郎、許され難きを知つてまた遁れ去る。

一揆の大將と頼まれたるもの、内、鳥居四郎左衛門、渡邊源藏、渡邊八郎三郎、本多彌八郎、弟三彌、波切孫七郎等は、改易せられて國外に退去したるが、後には歸參したる者が多かつた。

かくて一揆はやうく鎮靜せしかば、兇惡の僧徒は追放し、門徒寺は一時破却せられたるが、天正十一年十二月晦日に更に赦免せらるゝ事となつた。

本くわんし門との事このたひ

しやめんせしむるうへは分こく申

前々よりありきたるたうしやう

さういあるへからずしからはこの

むね申こさるへく候仍如件

天しやう十一年

十二月卅日

朱 印

ひうかのかみ

はゝかたへ

ひうかのかみは、は、石川日向守家成の母にして、妙西尼(芳春院)と呼ばる家康の母なる傳通院の妹である。かれて熱心に向宗道場の再興を家康に願ひ出で、居つたのである。

第五節 参河平定

吉田城を攻む

西参河は愈々平定したので、此年(永祿七年)三月家康は兵を東参河に出し、吉田城を圍み、喜見寺並に糟塚に塞を築いて、喜見寺は松平主殿助伊忠、鶴殿八郎五郎政俊に守らせ、糟塚は小笠原新九郎康元をして守らしめた。此時二連木の城主戸田主殿助重貞は、密に志を家康に通じ、巧に謀つて吉田城内に質として入れある母を竊み出し、五月十三日に吉田城下に火を放つて家康に應じた。家康此時御油にありしが、直に兵を下地に發し、吉田城を攻めしめた。本多平八郎忠勝此時十七歳、牧野宗次郎と槍を合す、蜂谷半之丞二番槍となるを恥ぢ、槍を棄て、大刀を執り、敵二人を斬りしが、鐵炮に中つて打倒る。元來剛氣の者なれば、また起上りて陣營に引退き、其夜痛手の爲め遂に死んだ。蜂屋の母聞いて、武士の討死は常の事である、臆したる振舞だになくば恨むる所なしと云ひ、健氣の振舞を稱へられた。城堅くして抜けざれば、六月十四日酒井左衛門尉忠次を先鋒として家康自ら將となり、烈しく攻む。時に伊奈の本多彦八郎光次、城中の案内を知るを以て、使を遣り、大原に諭し

吉田開城

Handwritten Japanese text in cursive style, likely a copy of the historical account on the left page. The text is written vertically and includes names and dates consistent with the printed text.

となるを恥ぢ、槍を棄て、大刀を執り、敵二人を斬りしが、鐵炮に中つて打倒る。元來剛氣の者なれば、また起上りて陣營に引退き、其夜痛手の爲め遂に死んだ。蜂屋の母聞いて、武士の討死は常の事である、臆したる振舞だになくば恨むる所なしと云ひ、健氣の振舞を稱へられた。城堅くして抜けざれば、六月十四日酒井左衛門尉忠次を先鋒として家康自ら將となり、烈しく攻む。時に伊奈の本多彦八郎光次、城中の案内を知るを以て、使を遣り、大原に諭し

幸へて三木を以て西海向うに

右は為定氏より侍寺末子田留

今更進早もつて智恵なれど

ちとよも末代お違ひつゝ敷き

并梅利門は一切お役合先

許さるゝ仍お侍

永文^甲十二月月 家康 行

吉田開城

大原質を求めたれば家康異父弟松平久松源三郎康俊並
 に酒井左衛門忠次の女を遣はず。大原乃ち質を携へて駿府に歸る。時に
 六月二十日であつた。家康吉田城を酒井忠次に與へ、東參河の將士を指揮
 せしめた。

(世 其 國 圖)

田原城を攻取る

此月本多豊後守廣孝に命じ、朝比奈肥後守元智が守る所の田原城を攻取ら
 しめた。廣孝梶村に砦を築いて田原に逼り、進んで外郭を攻破る。朝比奈拒
 ぐ能はず、城を致して駿河に走る。よりて廣孝に梶、二崎、白屋等を與へ、田原
 に居らしむ。廣孝其近郷を攻取る。
 牧野右馬允成定等又降つた。この成定は、永祿九年十二月二十三日牛窪に
 歿したるが、其子の康成幼稚なりしかば、同族出羽守成真(成元もある)家を争ふ。家
 康これを裁斷して、康成をして家を繼がしめ、水野信元をして成真を逐はし
 めた。

參河一統

參河は遂に一統した。清康が一度企てたる一統が、守山くづれと共に瓦解したるが、其孫家康に至つて更に成つた。清康も地下に微笑を洩らせる事であらう。

三奉行

かくて永祿八年三月七日に、本多作左衛門重次、高力與左衛門清長、天野三郎兵衛康景を奉行として、政刑を掌らしめた。家康はよく人を選んだ。重次は剛直、清長は慈厚、康景は沈重、當時の人呼んで佛高力、鬼作左、彼此偏なしの天野三郎兵衛と、これを岡崎の三奉行と稱へた。

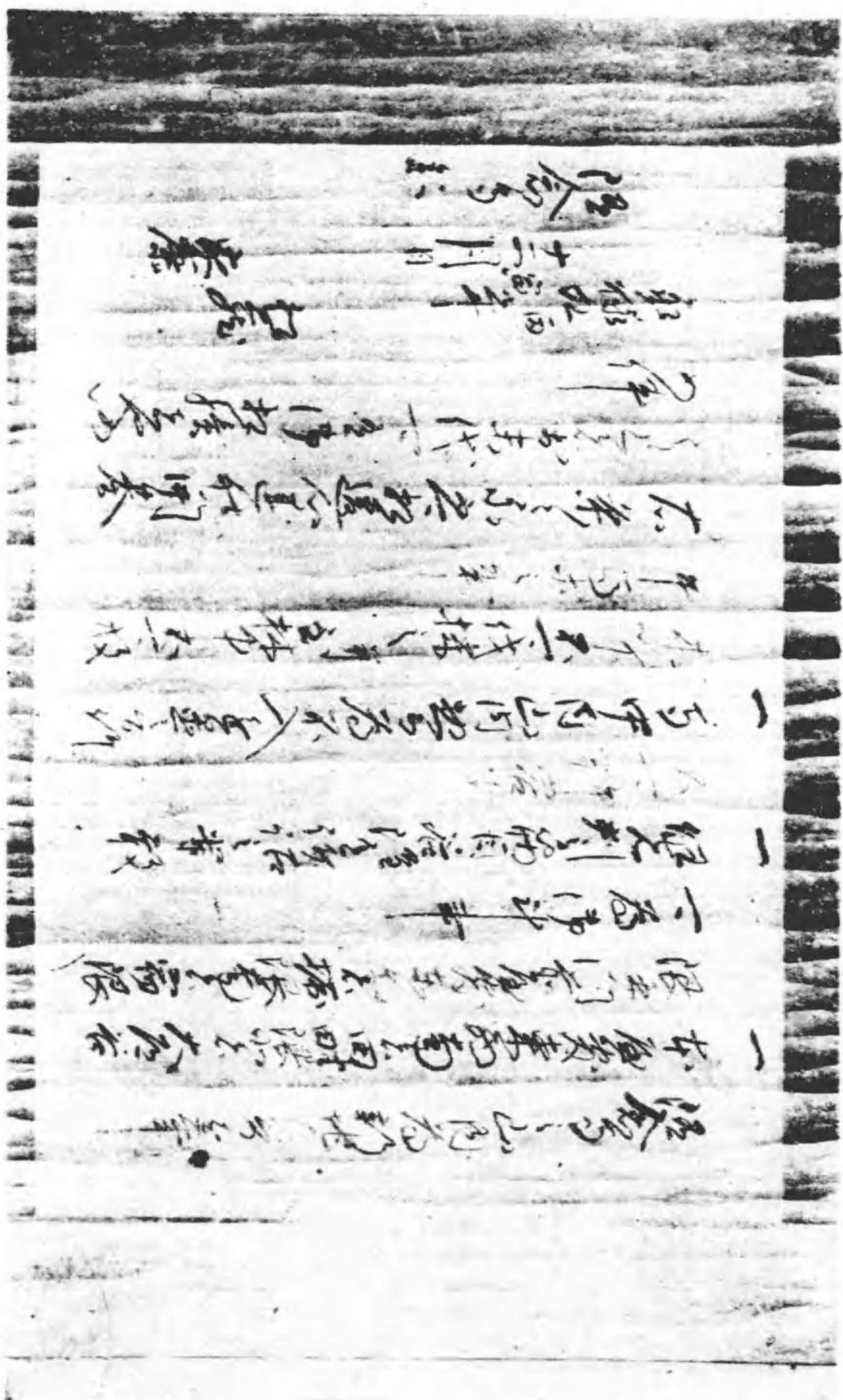
第六節 遠州經略

今川氏眞引間
城主を殺す

今川氏眞は、先きに遠州引間の城主飯尾豊前守致實が徳川氏に内通する由を聞き、屢々討手を差向けたれども、城容易に陥らず、是に於て伴り和して、永祿八年の十二月三十日に致實を駿府に招き、之を殺した。遺臣江馬安藝守泰顯、同加賀守時成、家康に應ず。家康即ち其城を守らしめた。

家康叙爵

永祿九年十二月に、家康參河守となり、從五位下に叙せらる。こは岡崎誓願寺の慶岳泰翁が勸修寺家に頼つて奏請を乞うたのであると云ふ。歴名士



(藏所寺念隨崎間)

代に、(山科本藤に作る云ふ)源家康永祿九十二二十九、從五位下同日參河守とあり、御湯殿上日記の永祿十年正月三日の條に、(叙)德川しよしやくおなじくみかはのかみくせん頭(口宣)辨におほせられてけふいづるおなしく女(房)ばうのはう(奉書)しよもいづる」と載す。誓願寺に藏する傳奏より送りし書狀と傳ふるものに「改年之吉兆珍重々々更不可有休期候抑德川之義令執奏候處勅許候然者口宣并女房奉書申調差

德川氏を稱す

件

下之候尤目出度仍大刀一腰進之候誠表祝儀斗ニ候萬々歲可申通候也狀如

正月三日

德川參河守殿

とあつて、德川の姓に復せんことを奏請して、叙爵と同時に勅許せられたものである。

御判

上卿 日野大納言

永祿九年十二月廿九日 宣旨

源家康

宣叙從五位下

藏人頭左中辨藤原經元

上卿 日野大納言

永祿九年十二月廿九日 宣旨

源家康

宣任參河守

藏人頭左中辨藤原經元

今川氏眞の事

なほ家康は永祿十一年の正月十一日に左京大夫に轉じた。

暫らく眼を轉じて今川氏の有様を視るに、當時氏眞の寵臣に三浦太衛門佐義鎮と云ふものがあつた。大原肥前守資良の子なるが、容貌美なるを以て氏眞に愛せられ、老臣三浦二郎右衛門の遺跡を繼いだ。義元の時には、瀬戸駿河守親範、關口刑部少輔義廣、朝比奈主計頭秀則、同備中守泰能、其他齋藤葛山、

堀江宇津山城
等落つ

福島岡部、由比庵原等を二十一人衆と呼んで、軍國の政治を沙汰したるが、桶狭間の戦後は、是等の士自ら愧ぢて蟄居し、事を執らざれば、今川家の權は三浦右衛門佐父子、並に小倉内藏助資久の手に歸した。あまつさへ氏眞懦弱奢侈に流れ、風流踊など云ふものを愛で、武事を忘れたる如くなりしより、今川氏の運命も心細く思はれた。折柄先きに我子晴信(信玄)に逐はれ、義元は聳なれば、駿府に來つて寄食せる武田信虎は、快々として樂まざる老臣等と謀り、駿遠の地を奪はんと企て、謀顯はれて追放せらるゝなどの事が起つた。これを見、かれを聞くもの、眉を顰めざるなく、心を傷めざるものは無かつた。是に於て武田晴信は、時來れりと手に唾して起たんとしてゐる。

年積つて永祿二十一年となつた。糧を蓄へ兵を休めし家康は、愈々遠州攻略に着手した。四月に入つて、大澤左衛門佐基胤の將、尾藤主膳、村上修理が籠れる遠江堀江の城を攻めた。松平勘四郎信一、榊原小平太康政先登し、康政疵を蒙つた。大久保新十郎忠隣當年十六歳なるが、勇を振つて戦ふ。城陷る。我士大久保甚十郎、平井甚五郎、小林平大夫戦死した。此月又宇津山の城を攻む。大原肥前守資良(鎮實)吉田城を退いて更に此城を守りしが、烈

しく攻めたてられて城を棄て逃去つた。去るに臨み密に城中に焰硝を埋めおきたれば、我兵入るに及んで爆發したれど、幸に死傷せる者はなかつた。此時酒井忠次をして、二股の二股左衛門佐高、高敷の淺原主殿、須陀寺の松下喜兵衛之綱等を誘はしむ、諸將乃ち家康に志を通した。

京都の方面

此際暫らく京都方面の状況を一瞥するに、天文十五年の十二月に、足利義輝は將軍職に就きたるが、三好長慶權を恣にした、長慶の老臣松永久秀は、長慶が永祿七年に歿してより、甚しく横暴を極めた。義輝將軍は之を惡み、謀る所あらんとせしより、久秀先んじて事を舉げ、永祿八年五月十九日に義輝を二條の第に襲うて之を弑した。義輝の弟覺慶は、奈良の一乘院に居りしが、危く逃れて近江に走り、佐々木承禎に寄り、更に越前の朝倉義景を頼み、還俗して名を義秋と呼び、後に義昭と改めた。かくて京都の恢復を謀りしが、義景動かす、容易に望を達すべくも見えざりしかば、更に後援の士を物色し、使を織田信長に遣はして懇に京都の事を依頼した。信長は永祿七年の八月に、齋藤氏を亡して稻葉山に居城を移し、之を岐阜と稱へた。既に先に勅使を迎へ、今また義昭の使を得たるより、愈々西上の志を決し、永祿十一年八月

織田信長江州箕作城を攻む

信長京都に入る

武田信玄駿府城を陥る

に、軍備を整へ、家康にも援兵を乞ひ來た。家康乃ち松平勘四郎信一に精兵八百騎を率ゐしめて、征途に上らしめた。論して曰く、參河武士の名を辱むる勿れど。九月十一日、信長江州に入り、佐々木承禎の箕作城を圍んだ。信一城攻の先隊となり、進んで外郭を破る、織田氏の兵續いて進みしが、城兵能く拒ぎて、寄手疵を蒙る者多く、やゝ躊躇ふ所に、信一大音に、參州の援兵松平勘四郎信一、大手の一番乗りと呼んで突撃する、城將建部八郎遂に怵へかね、城を出で、走る。かくて箕作城陥つた。信長大に喜び、信一を招いて汝が肝には毛生ひたりと賞め、桐の紋ある胴服を賜ふた。箕作城陥ると共に、和田山の城も落ちて、佐々木承禎は觀音寺の城を出で、逃げ去つた。かくて信長は義昭を迎へ、廿八日に京都に入つた。

顧みて再び筆を駿遠地方に轉すれば、今や局面は次第に變化して、對今川氏より對武田氏との交渉に移らんとして居る。

武田晴信入道信玄は、先に諏訪氏、小笠原氏を討ち、更に村上義清を逐ひて信濃を略し、爲めに上杉輝虎入道謙信と、彼の有名なる川中島の合戦を起した。然るに今川氏とは姻戚上(義元は信玄の姉婿であり、信玄の長子義信の妻は義元の女であつた。)の關係から、常に援

助して來れるが、義元死して氏眞の時に及び、其の暗愚爲す無きを見ては、食指頻りに動き、まづ海道を略して西上の宿望を達せんと志し、家康の許に使を來し、大井河を堺として駿遠兩國を分け取らんと約し置き、密かに今川氏の老臣、瀬名、葛山、朝比奈等と結び、永祿十一年十二月十二日大舉して駿河に入り、急に攻めて駿府城を陥る。今川氏眞は急遽砥城の山家に逃れ、後、朝比奈備中守泰能が守れる懸川城に入った。

家康井伊谷利部城を抜く

此方の家康は、まづ酒井忠次をして遠州に入らしめたるに、日比澤城主後藤佐渡守、都築城主濱名重政等之を拒ぐ、因つて家康自ら十二月十二日に、菅沼新八郎定盈、今泉四郎兵衛延傳を嚮導として、井伊谷に在る菅沼の族菅沼次郎右衛門忠久、近藤石見守康用、鈴木三郎大夫重路を招き降して、井伊谷城を抜き、更に刑部城を陥れ、菅沼定盈の家人菅沼又左衛門をして守らしめた。井伊谷城は、もと井伊氏の領する所なりしが、天文十三年十二月に、讒によりて井伊直満、直義兄弟、義元のために殺され、直満の子直親も、永祿五年十二月懸川城下に於て朝比奈備中守に討たれ、その子萬千代時に二歳、漸く免れて僧となり、諸方を流浪し、のち家康に召出され、遂に兵部大輔直政となつたの

家康引間城に入る

である。

十八日に、家康は安間村頭陀寺に陣を張つた。引間城には飯尾致實が欺き殺されたる後、江馬安藝守、同加賀守が守つて家康に應じたる事は先きに述べた。其後氏眞に攻められて、一旦降参したるが、信玄兵を駿河に出し、家康又兵を遠州に出すと聞き、安藝守は武田氏に屬せんと欲せしが、加賀守は家康に降らんと欲し、密に使を家康の陣に來して、その志を述ぶ。安藝守之を聞いて加賀守を殺した。加賀守の部下、小野田彦左衛門また安藝守を殺して此由を家康に告ぐ。家康乃ち引間城に入り、酒井忠次をして守らしめた。此時久能城主久能三郎左衛門宗能、其子千菊丸を携へて、十一日に家康に謁し、千菊丸を留めて質とした。

馬伏塚家康に歸す

此月二十七日、不入斗に陣し、懸川城を攻めんとして城下に火を放つ。城將朝比奈備中守防戦す。此時武田氏の將、秋山伯耆守信友は、遠州の士を誘はんとして見附に在り、馬伏塚の小笠原與八郎氏資は、秋山に屬せんとする所を、家康小笠原新九郎康元をして諭して味方に歸せしめた。かくて奥平九八郎貞能、菅沼伊豆守、同新九郎、田峯の菅沼新三郎定信等をし

懸川城攻

て見附を攻めしめたるが、兵少くして利あらず、家康乃ち秋山の遠州に入るは、信玄との約束を破るものなりと責む。秋山怖れて伊奈に走つた。家康見附に入つて、見附の古城を毀ち、鎌田原に新に壘溝を修せしめた。年は永祿十二年に入つた。家康は正に懸川の城攻に努力して居る。正月の二十三日に天王山に陣し、烈しく懸川の城を攻め、内藤三左衛門信成先登して疵を蒙つた。此時氏眞使を久野の一族、淡路守宗益、佐渡守宗憲、彈正忠宗政に遣し、食はずに利を以てして招き降し、急に家康の本陣を襲はしめんとす。宗益等心動いて其の準備をなす。宗能聞きて驚き、密に家康に告ぐ。家康、菅沼定盈、松平與一郎、忠正、植村出羽守家政、三宅惣右衛門康貞等を遣り、宗能を援けしめ、宗益を殺し、宗憲、宗政等を追放した。氏眞は久能一族の陰謀顯れたるを知らず、精兵を出して久能等を援けしめんとして城を出た。我軍伏を設けて之を圍み、大須賀康高、大久保忠世、松平もと松井忠次、本多廣孝、松平家忠、水野忠重等奮戦す。敵も防戦甚だ力めて曉に達した。敵は遂に敵しかねて逃れ入らんとするを追躡して、三の丸の喰違にまで攻込みしが、城門を破るに至らなかつた。八月十五日、家康將卒をして四旁の

濱名、可久輪、
氣賀、都築の
諸城を降す

塞を守らしめて見附に歸つた。河田村の塞は、參州の兵交々守り、笠町の塞は菅沼、奥平兩氏、曾我山の塞は小笠原與八郎長忠、久能の塞は久能三郎左衛門宗能が守つた。

此時濱名肥前守頼廣、後藤佐渡守、氣賀の新田友作、可久輪三郎兵衛等、家康に降らんと見附に來りしが、佐渡守は家康の陣前に於て馬を降らざりしかば、家康怒つて鐵砲にて擊殺さしむ。頼廣怖れて甲州に走つた。頼廣の族、大屋安藝守政頼、弟金大夫頼次、濱名の城に籠る。家康本多平八郎忠勝、戸田三郎左衛門忠次をして、濱名、都築兩城を窺はしめしに、堅固にして急に攻抜き難かるべき由を云ふ、乃ち忠勝、忠次をして兩城の士を諭さしめて之を降し、濱名の城は本多並に戸田をして交互に守らしめ、都築の城は本多百助をして守らしめた。氣賀の新田友作は城を棄て、走り、可久輪の三郎兵衛は、久野、本間に攻められて城が陥つた。

三月八日、家康又懸川城を攻めた。本多忠勝、松平主殿介伊忠先鋒となる、大手は南町口を破り、搦手は西町口を破り、又一手は東口より攻入り、天王山の小徑に戦ふ、朝比奈備中守、三浦監物城を出で、防戦す、主殿介伊忠が従士石原

また懸川城を
攻む

十助、大手の門外に一人の城兵を射る、敵いまだ馬より落ちざる間に、二の矢を射付くるに、敵遂に馬より落ちて死す。朝比奈三浦石原が弓勢の強く速きを賞め、軍畢つて後、その矢を金團扇に載せて伊忠が陣に送り來れり、やがて菅沼三九郎は小笠原七郎兵衛を討取り、高橋傳七郎は朝比奈小三郎を、松下嘉兵衛は菅沼帶刀を、本多三彌は新谷小助を、高力清長は栗飯原平左衛門を、中山是非之助は伊藤左近を討取つた。その他伊藤治部、同掃部、朝比奈小隼人等、城中の精兵戦死したるもの百八十人、味方の加藤市十郎、中根傳四郎等六十餘人討死した。

懸塚湊の敵を走らす

此時今川徒黨のもの、兵船に乗つて懸塚湊に著く。大須賀五郎左衛門康高、榊原小平太康政、鳥居彦右衛門元忠等攻寄す。敵潰え走つた。

氏眞懸川城を出づ

家康使を小倉内藏助資久の許に遣はし、遠州を我に與へなば、北條氏康と議して武田晴信を討ち、氏眞を駿府に入るべしと云ひ遣る。氏眞之を諾し、資久をして家康と誓約せしむ。家康因つて資久を北條氏の許に遣して約を定めしめた。五月六日に、氏眞は懸川城を出て、懸塚より舟にて小田原に赴く、家康松平紀伊守家忠をして送らしむ。家忠豆州戸倉まで送り附けて

堀川城堀江城降る

歸つた。是に於て家康は石川日向守家成をして懸川城を守らしめ、更に松平玄蕃頭清宗を援兵として城に入れた。

先きに懸川城攻めの時、家康一度岡崎に歸れる事があつた。然るに去年より大澤左衛門佐基胤の屬將、尾藤主膳、村山修理、氣賀の一揆、給人百姓と稱する内山黨等、堀川の舊壘に立籠り、家康を要撃せんとして果さず、かつ大澤基胤も敵意を表して堀江城に籠りたれば、菅沼定盈、菅沼次郎左衛門、近藤石見守、同登之助等をして堀江城を攻めしめ、家康自らは堀川城を攻めた、榊原康政先登疵を蒙りたれど、遂に城を攻破る。ついで使を遣りて基胤に降を勧めた。基胤乃ちその臣中安兵部、權田織部等と共に降つた。時は四月十二日の事であつた。

天方城飯田城降る

六月に入つて、天方城に天方山城守通興を攻めて之を降し、飯田城を攻めて之を抜き、城主山内大和守を殺した。

遠州平定

かくして遠州は平定した。家康努力の効は着々顯はれて、遂に參遠兩國を領する事となつた。永祿三年五月に岡崎城に入つてより年を経る事十年、齡正に廿八の時である。

これより所謂海道一の弓取りと呼ばれて、駿遠參の三ヶ國を舞臺として、武田氏との活劇が演ぜらるゝのである。

此年の五月下旬に、家康は大井の河邊を巡見する所に、ゆくりなくも金谷のほとりにて、山縣三郎兵衛昌景が三千餘騎を率ゐて來るのに遭つた。昌景一禮して行き過ぎしが、家康の兵少きを見て、急に隊を整へて襲ひ來る。家康兵を退け、隘所を扼して待つ。本多平八郎忠勝一番に取つて返し、大須賀康高、榊原康政、また槍を執つて進み、敵七八騎忽ち突倒さる。昌景利あらざるざるを知り、兵を引いて退く。家康之より武田氏と絶つた。

事は少しく溯りて、此年の四月十八日に、北條氏康、氏政、四萬五千餘騎を率ゐて、今川氏眞の爲に駿府城を復せんと、薩陞山、八幡、平井、蒲原に陣した。武田信玄は、山縣三郎兵衛に一千五百餘騎を附して、駿府の城を守らしめ、麾下を久能山におき、武田典厩、信豊を先鋒とし、一萬八千餘騎を率ゐ、興津河原に出て、北條氏と對陣し、絶えず小迫合を續けた。家康この虚に乗じ、駿府を攻めて昌景を逐ふ。晴信怖れ、兵を引いて甲州に退いた。駿府既に陥りたれば、今川氏眞を入れんとすれど、城壘は武田氏に焼かれて焦土と化したるに

駿府城の争奪

依り、氏眞先づ伊豆戸倉城に住み、その臣岡部治郎右衛門正綱、阿部大藏元真等をして、駿府城を營作せしめて、その成るを待つ。然るに信玄は、此年の十月に、甲州を出で、小田原に迫り、城下に火を放つて退く。北條氏の兵追躡して三増嶺に戦ひ大敗した。駿府に在る北條氏の兵、多く守を撤して小田原に集る。是に於て信玄十二月に再び兵を發して、まづ蒲原城を攻め落し、進んで七日に駿府に迫る。城壁未だ成らざるを以て、今川氏の兵防ぐ能はず。岡部正綱降り、阿部元眞は遁れ走り、のち家康に歸して麾下となつた。此年、後奈良天皇の第十三回忌を擧げらるゝにつき、權大納言山科言繼を參河に來し、家康に命じてその資用を獻せしめんとした。七月三日に出されたる女房奉書に、

家康獻金

九月五日せんくわうの御十三年にて候、御せんほうかうをこなはれたくおぼしめし候へども、いかにもとゝのほり候はぬまゝ、ごく川ちそういたし候やうに、ないくせいくわん寺のちやうらうとないだん候て、とゝのほり候やうによくおほせ事候べく候、めでたくやがて御とゝのへ候て御のほり候べく候、心え候て申とて候かしこ

山しなの大納言とのへ

とある、言繼七月八日に京都を發し、岐阜に来れる時、信長、言繼を留めて、使を以て家康に命を傳へた、家康乃ち金貳萬疋を獻納した。其時の女房奉書は、九月の御ほうじにつきて、とく川さ京の大夫貳萬疋しん上候、神へうにおほしめし候、御せんほうかうするくとおこなはれ候、よろこび覺しめし候、のぶながにもおほせいだされ候まゝ、さだめて申わたし候べく候、又このとんす御ほんつかはされ候よし、いゑやすに申つたへられ候べく候よし、心え候て申とて候かしこ云々と云ふのであつた。

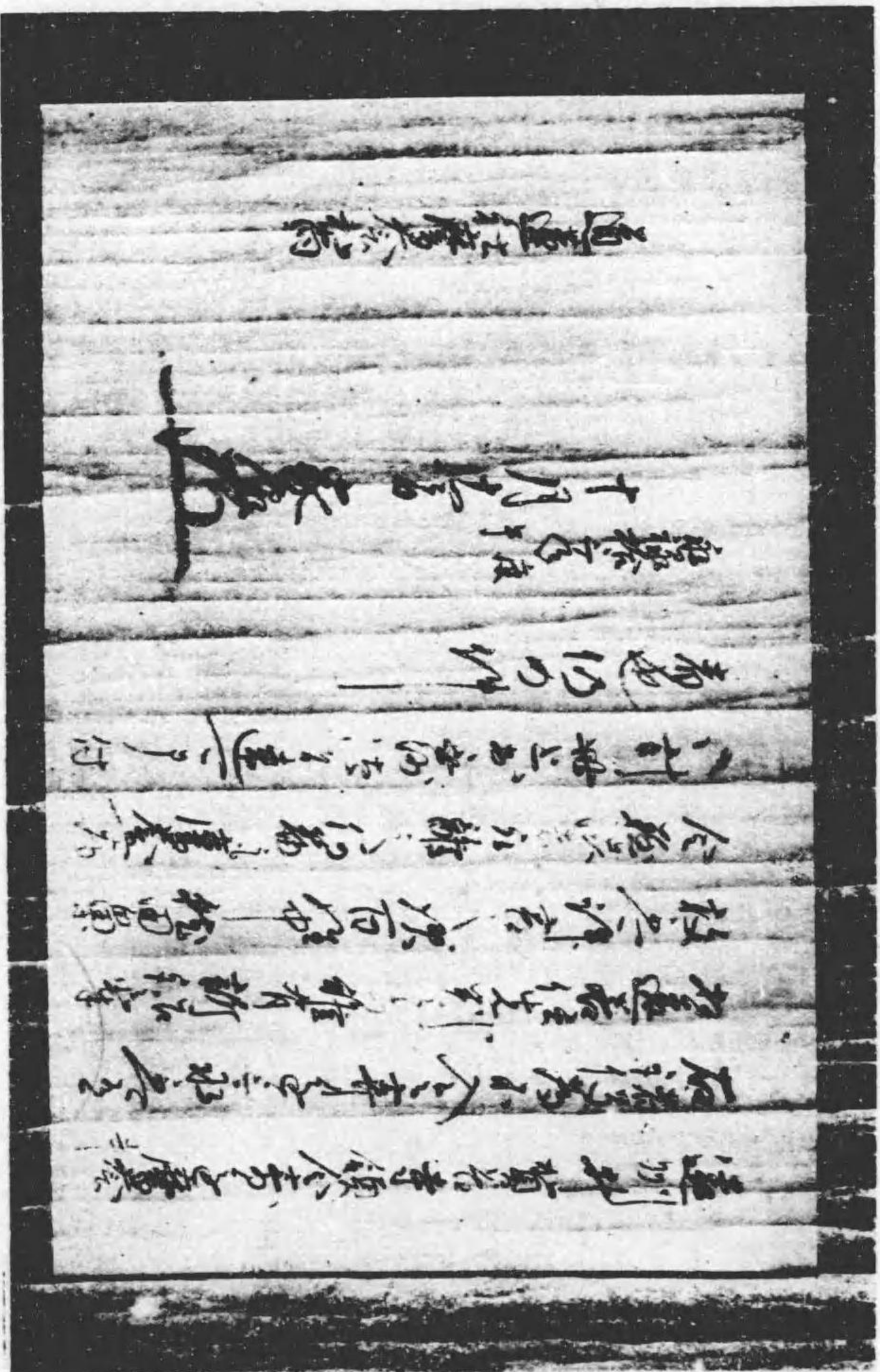
濱松に移る

永祿十三年即ち元龜元年正月、引間城の營構成りて、家康これに移り、名を濱松と改めた。

正月、遠州濱松ノ城營構既ニ成テ、大神君是ニ移リ給フ、參州岡崎ノ城ヲ以テ信康ニ譲リ給フ。(増補家忠日記 武徳大成記)

茲年ノ春、御普請出來ニ付テ、岡崎ヲバ、御長男竹千代様へ御譲リ、濱松ノ御城へ御移リ被爲成候。

一説ニ、見付ニ繩張被仰付候得共、信長公ヨリ御加勢御頼被成ニツキテ、此フシンハ被差置



(藏所寺念隨 崎岡)

候ト有之、此説誤ト奉存候、見付繩張ハ去春ノ儀、垣溝等ノ運カ、リ被仰付、掛川御對陣ノ御陣城也。尤城地可然所ト被思召候ハ、掛川御對陣ノ前、御營作結構ニ可被仰付候得共、地不宜ニツキテ、濱松ヲ御本城ニ可被成顯然也云々、亦信長ヨリ大天龍、小天龍水増スルトキ、川ヲ隔テ加勢難叶ト有之ニツキ引間ヘ御定ト云説非ナルベシ。

一説ニ、引間ノ城ヲ今ノ濱松ニ移ト御座候。引間ノ城アトナ所ノ者ニタヅネ候得バ、御室屋ノ北ニ御座候様傳承候ナド、申候、此説非ニテ御座候。

按ニ、馬込ヨリ御城近邊惣而引間ト申ト相見申候。飯尾豊前守被居候引間城モ、今ノ古城ナルベシ。然ルヲ御城ニナサレ御移徒以後、今ハ濱松ト本濱松ト申所モ御座候御改ナサレ候ト奉存云々、此古城ハ久野佐渡守末子ト申越中守屋敷ヲ、永正ノ頃、三善爲連ト申仁、城ニ取立候之由及承候。

此古城エ元龜元年ニ權現様御移被遊、天正五年ノ秋冬ヨリ同六年ノ春迄、御城普請被仰付、今ノ御本丸エ御移徒ト奉存候。五年六年御普請ノ事、舊記ニ相見、今ノ本丸エ御移徒ノ口限等舊記ニ不相見、追而穿鑿可仕候、濱松御在城記。

元龜元庚午年正月。遠州敷智郡匹間ハ、往古久野越中守ガ宅地也、今川氏親ノ時、三善爲連城郭ヲ築ク、大手ヲ明光寺口、搦手ヲ天林寺口ト稱シ、前後四曲輪有テ最モ規矩ニ適ハズ、神君當國見付ニ張翼シ玉ヒ、參遠ノ人夫ヲシテ、是ヲ毀テ、其西南ニ當テ勝地ヲ撰ミ、御居城ヲ經營セラル、本丸、二丸、西羽曲輪、馬出曲輪、清水谷郭、三丸、厨曲輪、鳥居曲輪等ノ名アリ。妙光寺藥師堂ノ南深沼ヲ本城ノ後要害トセラレ、本丸總周回皆石垣、其上ニ多門ヲ建ラレ、當時隣國ニ希ナル營構タリ。悉ク造畢セバ、岡崎ノ城ヲ宗子信康君ニ讓ラレ、當城ヘ神君御移リ有テ濱松ノ城ト改稱セラレベシ云々。

六月初旬、濱松ノ新城經營未央ト雖、見付ノ新壘地利惡キ故、早ク毀タルベキ爲ニ神君濱松ニ移ラセ玉フ(武徳編年集成)

家康の濱松に移る時、諸書年月を異にするものあれど、御年譜の年首に叙したるのこ、増補家忠日記、治世元記の正月に係けたるに従ふ。濱松に移るを信長の意に出でたりとするは誤であらう。引馬を濱松と改めたる年月は詳で無い。

濱松城の關係より、こゝに溯りて引馬合戦の大略を附記して參考とする。

前略、其頃駿州ノ國主ヲ今川五郎源氏親ト云フ、武衛(新波治部大輔義達)並ニ織田ヲ敵トシテ、三河ノ國ヲ争ヒ合戦ニ及ブコトアリ、于時永正十年ノ頃、三州臥蝶ノ地侍ニ、大河内備中守欠綱ト云者アリ、是ハ先祖源三位頼政ノ二男源大夫判官兼綱二十一代ノ末孫ナリ、家ノ紋十六葉ノ菊ヲ付ケレバ菊一揆ト號ス。元來吉良氏ノ家來ナリシガ、欠綱武勇ノ曲者ニテ、近年一分ヲ自立シ、威ヲ國中ニ振フ。終ニ遠州三州ノ諸士ニ親ミ、徒黨ヲ結ンテ今川ニ敵對ス。氏親ハ公方家再興ノ爲ニ上洛ノ志アリトイヘドモ、欠綱其通路ヲ塞テ合戦ニ及ブガ故ニ本望ヲ不遂、是ヲ以テイカニシテモ欠綱ヲ亡サント、氏親色々ノ計略ヲ廻ラス、然ル間欠綱モ此義大事ト思フ故ニ、尾州へ手ヲ下ゲテ武衛へ一味ノ義ヲ頼シカバ、武衛義達即チ欠綱ニ一味シ今川ニ敵ス、欠綱ハ其比遠江國濱松ノ庄ニ引間ノ城ヲ取立楯籠リ居タリケルガ、氏親是ヲ退治セントシテ、永正十年三月上旬、一萬ノ軍兵ヲ卒シテ遠州へ發向ス。欠綱ハ信州遠州三州ノ浪人武者ヲ相語ヒ、武衛へモ加勢ヲ請フ。武衛義達同心シテ尾州勢ヲ催シ、遠州へ出馬アリ、深嶽山ノ城ニ楯籠リ玉ヒケルヲ、今川ノ先勢朝比奈十郎泰以、只一手ノ兵ヲ以テ武衛勢ヲ夜討ス、泰以打勝テ尾州勢敗北シテ同國奥山へ引退ク、翌年又氏親ノ縁者甲州ノ武田五郎信虎兄弟不和ニ成テ合戦ニ及ブ、氏親へ加勢ヲ請ケレバ、氏親ニ

千ノ兵ヲ遣シ武田ヲ救フコト緊シ、大河内欠綱此亂ノ費ニ乗ジ、引間ノ城ヲ取返シテ又彼城ニ居住シ、天龍河ノ前後ヲ押領ス。剩又尾州へ訴ヘテ義達ノ出馬ヲ請ケル、此時織田伊勢守(織田大和守敏信ガ)諫言ヲ加ヘ、頼ニ義達ノ出馬ヲ止メタリトイヘドモ、義達許容ナク終ニ遠州へ進發アリ云々。義達大河内ト一味シ、其外、巨海、高橋等相共ニ引間ノ城ニ籠ル。然ル處ニ同年ノ夏、氏親猛勢ヲ卒シ天龍河ニ舟橋ヲ掛ケ、敵ヲ一戰ノ中ニ打勝チ、總軍皆河ヲ越テ引間ノ城ヲ十重廿重ニ取巻キ、六月ヨリ八月マテ平攻ニ攻ルニ、終ニ八月十九日彼城攻落サレテ、大河内欠綱、同弟巨海、新左衛門、高橋以下楯籠人數千餘人討死ス。武衛治部大輔義達ハ降人ト成玉ヒ、普濟寺ト云フ會下寺ニテ出家剃髮ノ姿トナル故ニ、今川氏親ヨリ一命ヲ助ケラレ、尾州へ送り還サル。此時義達今日ヨリ遠州三州ニ望事ナシ、向後今川ニ對シテ弓引事有ベカラズト起請文ヲ書カシメラル。是ヨリ義達威衰ヘテ清洲ノ城ニ隱居シ玉フ云々。(總見記)

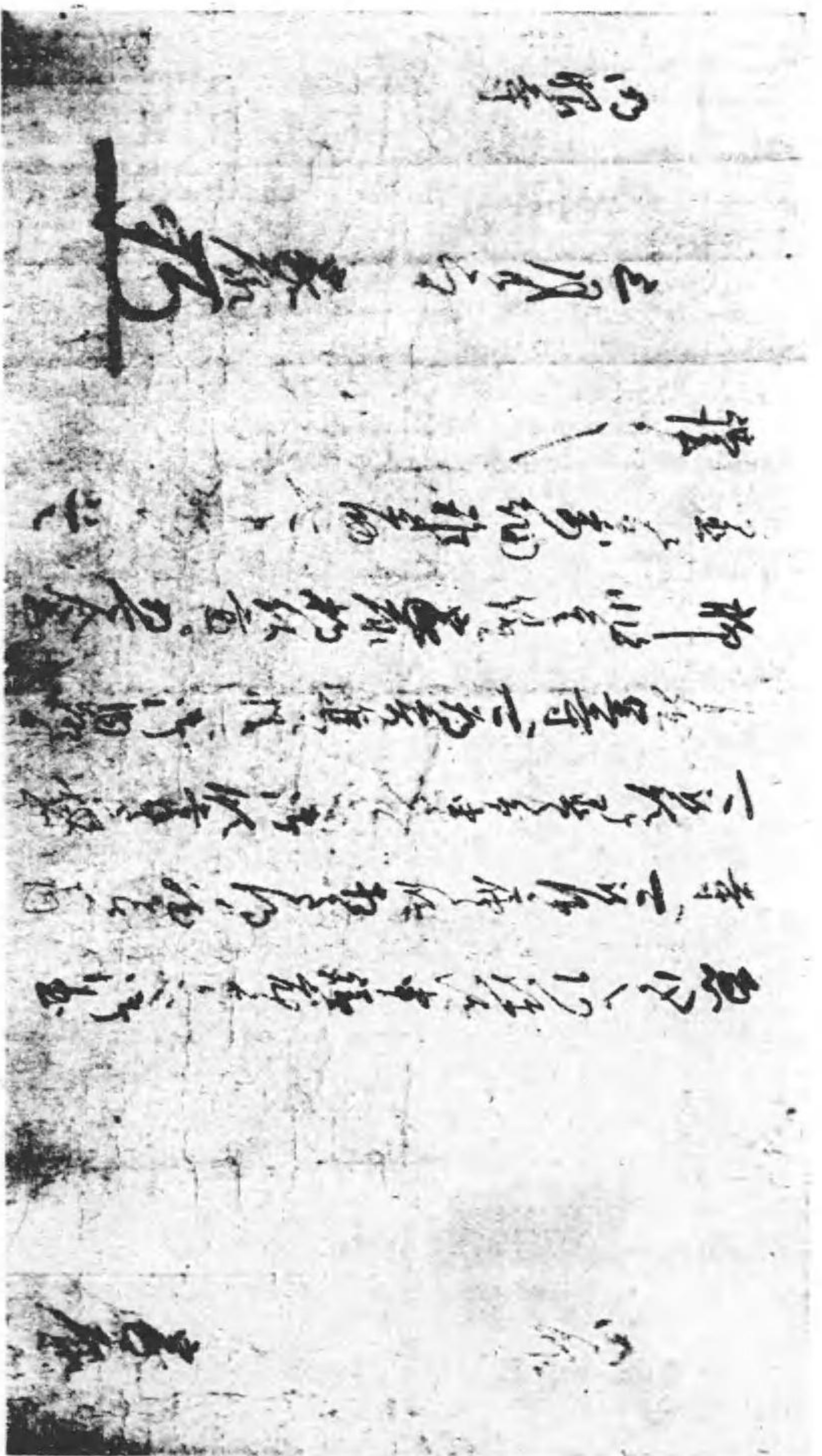
次は家康の岡崎在城の時に、矢作架橋の事を述べたるものなるが、著名なる事實なれば掲げ置く。

或時、岡崎の御城下矢作の橋満水にて流れければ、早速掛渡すべき旨家康公被仰付、就夫おのゝ家老中被申上けるは、兼々何も存寄罷在候へども、かやうの折節を以て可申上と存罷候、此橋の義世間に稀なる大橋にて候へば、御城下個様なる大川の有之候は、第一御要害にも候へば、旁以て今度流れ捨るを幸に被遊、向後の義は船渡被仰付可然奉存と一同に被申上、家康公被仰けるは、抑此矢矧の橋の事は、代々の記録にも記し、その外舞にも平家にも語り傳て、日本國中に誰知らぬ者もなければ、定めて異國へも聞えぬ事はあるまじ、然るに物入多ければとて、今更橋を止めて船渡に申付け、往還の旅人に難義を懸くる事は國持の

本意にあらず、假令いか程の入用たりて少も不苦、早々掛渡候様に被申付べし、扱又要害を求むるには、人にもより時にも依るべし、當時家康が心入のほどは、一向左様の趣にあらず、此段はいづれもの心入にもあるべきものなり、然は要害を頼むと云には不及義なり、只片時も早く橋をかけ渡し、往還の煩なき様に可被申付の旨被仰出たり(岩淵夜話)

東照宮岡崎御在城記と云ふ小冊子ありて、これに家康岡崎御在城の節、御大名御旗下衆屋敷付が載つて居る(のちに引いてみる)、この書が、水野家の岡崎在城の際記されたるものなる事は、参河諸武士の姓名を舉げて、その下に水野家の諸士の屋敷と所在地とを記して居るを以て知らる。例へば酒井雅樂頭として、下に二本松右京屋敷、三の丸備前橋の内とありたり、石川伯耆守として、松野尾平馬屋敷、辰の口菅生黒門之内など、あつたりする。當年の参河諸武士の屋敷が、現今の水野家諸士の誰某の住居に當ると云ふ事が知られ、當時に於ては名譽にも愉快にも感じたものであらうが、果して當れるかは疑問である。参考として今重なる人々とその住居地を掲げておく。

- 一、酒井雅樂頭 三ノ丸備前橋之内
- 一、石川伯耆守 辰ノ口ヨリ菅生黒門之内
- 一、酒井左衛門尉 菅生
- 一、石川安藝守 三ノ丸諸講場、辰ノ三ノ丸澤原
口鍛冶小屋邊ノ由(瑞即ニアリ)
- 一、鳥居彦右衛門 三ノ丸内歩行
曲輪驗違ノ内
- 一、大須賀五郎左衛門 菅生川端ニ在リ
- 一、植村出羽守 元磨澤ノ内
- 一、本多中務大輔 初メ磨澤(初メハ六本松)
後ハ菅生川端



(藏所寺源妙 子桑)

(黒本章所望狀)

- 一、平岩主計頭 ノ初メハ東ノ丸澤二ノ丸、後元唐澤
- 一、本多作左衛門 二ノ丸東ノ丸迄
- 一、酒井備後守 筑山下
- 一、水野彦九郎 菅生黒門内トモ、殿町筋カゴタヨリ西トモ
- 一、松平紀伊守 横町御門筋
- 一、内藤四郎左衛門 大殿町追手先キトモ、大林寺下堀筋トモ
- 一、内藤彌次右衛門 元唐澤、又大井寺東筋
- 一、榊原七郎右衛門 連尺町ナル對面所ト云、吹貫ト申由
- 一、大久保七郎右衛門 元唐澤
- 一、松平和泉守 東能見町庄屋屋敷
- 一、松平權兵衛 東能見町上留(今ノ永原)續堂西キハ
- 一、松平善兵衛 伊賀村、通ヒ風敷アリ
- 一、松平次郎左衛門 西能見町
- 一、松平彌次右衛門 根石原ノチニ善立寺前北
- 一、松平主殿頭 根石原
- 一、松平玄蕃 同所
- 一、松平與一郎 三ノ丸
- 一、松平主膳 上留彌堂ノ西

第三章 岡崎三郎信康

信康

竹千代母と共に岡崎に入る

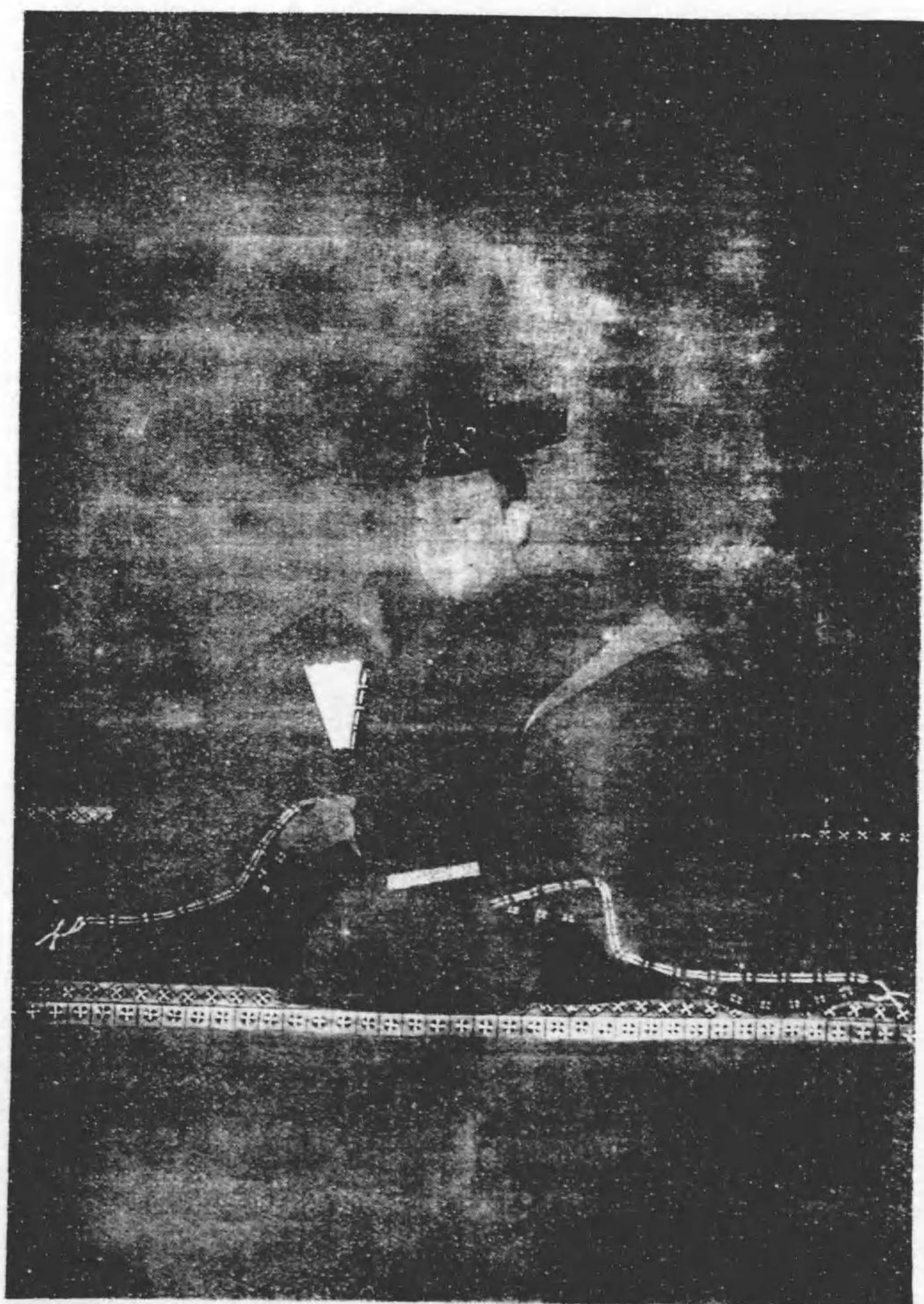
信康は家康の長子、幼名竹千代、永祿二年三月六日駿府に生る。母は關口氏。永祿三年五月桶狭間の軍敗れ、家康(當時)岡崎に入り、永祿四年二月織田氏と和するに及んでも、竹千代は母と共に駿府に残り、母の父なる關口義廣の庇護によつて漸く事なきを得た。永祿五年三月に上郷城陥るに及び、鶴殿氏の二子と換へ、母と伴うて岡崎に歸るを得た。

結婚

永祿六年の三月二日に織田信長は其女を以て元康の嫡子竹千代に娶す約を結び、永祿十年五月二十七日に、信長は豫て婚約せる娘徳姫を岡崎城に送り入る。佐久間右衛門尉信盛従ひ、生駒八右衛門、中島與五郎與添であつた。時に竹千代九歳、徳姫もまた同じ歳であつた。(永祿二年三月の生れ)

元服

元龜元年八月廿八日元服、信長の諱と父の諱とを取りて岡崎次郎三郎信康と呼んだ、時に年十二。濱松城中に於て祝賀の能あり、參遠の士にも陪觀を許した。



(岡崎三郎信康畫像)

(藏所寺蓮勝 作矢)

信康岡崎城を
守る

此年の正月に、家康は濱松城に移りたるを以て、信康岡崎城を守つた。平岩七之助(親吉)、石川豊後守(寛政重修譜に、八左衛門重次、今の呈譜八左衛門、のち又四郎重政に作る、岡崎三郎信康君に附屬せらるゝとあるが此人の事か)、鳥居伊賀守(忠吉、一本に四郎左衛門忠廣に作れども、忠吉の方正しきが如し)従ひ、町奉行として松平茂右衛門、江戸右衛門七、大岡彌七郎(大賀ともあり、彌四郎ともあるが、大賀は音近きによつたものであらう)が勤めた。さて信康の事蹟を述べんとすれば、筆は自ら武田氏との交渉に及ばざるべからざれば、これより話頭は再び武田氏との關係に移つて行く。

第一節 徳川武田兩氏の交渉

元龜元年より信玄はしばしば兵を遠參の地に出して徳川氏を脅した。然るに此際、家康は信長の爲に軍を西に動かさなければならなかつた。かくして元龜元年の六月二十八日の姉川の戦となつた。此戦に家康は朝倉景健の率ゐる八千余(或は一萬餘とも)の大軍を撃破し、なほ進んで織田軍の危を救ひ、大に威武を關西に耀かした。

姉川戦記

元龜元年六月十九日、信長兵を率して江州に進發し、長比、刈安の兩城を拔く。廿一日、信長兵を進めて淺井長政が小谷城を攻む、長政堅守す。廿二日、信長軍を返す、淺井の兵追撃す、信長轉じて横山城を攻む。越前の朝倉義景の族孫三郎景健(或は云ふ景健なりと、また景健、景勝兩將なりとも、されど景健及び景勝といふのが正しいであらう)、八千餘の兵(或は一萬)を率ゐて來援し、大寄山に屯す。廿六日、家康三千餘騎(或は五千)を以て信長の陣に來會す。此日淺井長政、父下野守久政、並に越前の援兵を併せて野村三田村に陣を遷さんと議す。廿七日、信長、諸將と謀つて部署を定む、朝倉の軍に向ふべき第一陣は、柴田修理亮勝家、明智十兵衛光秀、第二陣は、徳川家康、三陣は、稻葉伊豫守貞通(或は通)、淺井の軍に向ふ、第一陣は、坂井右近長高、二陣池田勝三郎信輝、三陣木下藤吉郎秀吉、それより次第に隊を十三段に備ふ、而して丹羽五郎左衛門尉長秀をして横山城の押たらしむ。時に家康曰く、淺井朝倉いづれにもあれ、強からん方へ先鋒となりて向はむ、後隊に在らんこと本意にあらずと、信長乃ち家康の軍を朝倉に向はしめ、稻葉貞通を之に加へ、更に淺井の軍に向ふべき隊伍を改め、先鋒坂井長高、二陣池田信輝、三陣木下秀吉、四陣柴田勝家、明智光秀となす。(或は、空に部署を變へて、家康をして朝倉の陣に向はしめたのであるとも云ふ)家康、陣を國友に移し、先隊は酒井左衛門尉忠次、水野惣兵衛忠重、これに松平與市郎忠吉、松平三郎次郎親俊、松平又八郎伊忠、松平與次郎清宗、松平又七郎家忠、松平源七郎康忠、松平彌九郎景忠、松平八郎三郎康定、牧野新次郎康成、戸田丹波守康長、菅沼新八郎定盈、設樂甚三郎定通、西郷孫九郎清貞、奥平美作守貞能等、各備を立て、先鋒に屬す、二陣は高天神の小笠原與八郎長忠を初め、小笠原一族、大須賀五郎左衛門康高、松井左近忠次等、三陣は石川伯耆守數正、此手に屬する人々は、松平源次郎眞

乗、松平勘四郎信一、松平左馬允忠頼、松平新介忠澄、内藤金市郎家長、平岩七之助親吉、酒井與四郎重忠、同與七郎忠利、鈴木喜三郎重時、鈴木越中守重愛、嶋田平藏等、中軍は家康自ら率ゐ、大久保七郎右衛門忠世、本多豊後守廣孝、本多平八郎忠勝、榊原小平太康政等各一手に將としてその左方に在り、稻葉貞通後陣に列す。廿八日黎明、朝倉が兵百騎ばかり、列を離れて屯し、横を入れんことを、本多忠勝之を察し、その敵を追崩す、大久保新十郎忠隣、安藤彦四郎直次、淺井が兵數十騎、大寄山より乗下すを見て馳向ひ、挑戦て首級を得たり、かくて先陣酒井水野の手より鐵砲を打掛け戦を初む、朝倉の兵能く戦ひ、味方の先陣利を失ひて姉川の中程まで崩れかゝるを、石川數正切りかへして苦戦する折柄、家康は榊原康政、本多廣孝に命じ、旗本を崩して進んで横槍を入れしむ、是に於て朝倉の軍大に亂るゝ所を、先陣また備を整へて突撃す、敵軍遂に支へ得ずして敗走す。朝倉の將眞柄十郎左衛門直隆は、剛強の士、獨り取つて返し、吾は世に聞ゆる鬼眞柄なり、參州の士ども手並を見よと、五尺三寸の大太刀を揮つて奮戦す、味方は或は傷き或は打たるゝ者數知れず、遠州の匂坂黨馳向ひ、鎌槍を以て突蒐りし匂坂式部は、冑の吹邊より綿嚙まで尻居に打すゑられ、つゝいて向ひし同五郎次郎は、刀の鏝元より切折られ、郎徒山田宗六は、眉間より二つに切裂かるゝ時、匂坂六郎五郎鎌槍も、漸く眞柄を懸倒し、式部に向ひて首を取れと云ふ、式部は我重傷を負ひたり、殊に汝は眞柄に槍を付けたるものなれば、首を獲て譽にせよと云ふ、六郎五郎乃ち眞柄の首を打つ。眞柄十郎三郎直基はまた勇士なり、父の討死を聞いて引返し、四尺三寸の利刀を揮つて戦ひながら、父はいづれにて打たれけん、同じ死なんには父が最後の場所にてと、求め行く所を、家康の屬士青木所左衛門一重、眞柄殿何處へ逃げ給ふぞと云ふ、逃ぐるゝは何事ぞと、青木が郎徒を一撃に討つ所を、青木透さず鎌槍にかけて遂に突伏す。

信長の軍は淺井の魁將磯野丹波秀昌、高宮參河守信氏等に驅たてられ、先鋒悉く利を失ひ、坂井右近が嫡子坂井久藏、坂井喜八郎、可兒彦右衛門等討死し、二陣三陣次第に崩れかゝるを、家康既に朝倉の軍に勝ちたれば、兵を野村に進めて淺井の後軍を斷たんとし、家康戈を執りて自ら兵を指揮す、家康の後陣たりし稻葉貞通は、いまだ戦を交へざるに朝倉の軍敗れたれば、乃ち兵を廻らして淺井軍の横合より突いて入り、信長また旗本を進めて奮戦したれば、必死を極めし淺井の軍も朝倉の敗北に勢を沮まれ、遂に總崩れとなる。淺井の士遠藤喜右衛門直繼は、信長を撃んと窺ひ寄る、信長の兵竹中久作重矩之を見知りて遠藤を刺殺す。信長の軍、淺井の敗兵を追撃して小谷城近くに及ぶ。

信長、家康の武功を賞して長光の刀を贈り、且稱して云ふ、今日の大功勝て言ふべからず、前代比倫なし、後世誰か雄を争はん、當家の綱紀武門の棟梁なりと。

日本戦史集(兼原 勇大佐 共編)に、家康の戦鬪振を評して云ふ、

家康は確に實戰的軍隊指揮官である、彼が全軍の戦鬪開始に先立ち、弱勢なる兵力を以て倍數の朝倉軍に對し、遮二無二攻撃を開始し、以て主力なる織田軍をして淺井軍に對する主攻撃を奏効せしめたる戦功は、實に戦場第一と言ればならぬ、而して又朝倉軍が、徳川軍の第一線諸隊を姉川左岸に壓迫し、將に家康の麾下に逼らんとするや、家康時機を失せず、豫備隊をして突進する敵の側面を包圍し、以て戦勝の端緒を開いた機敏にして適切なる指揮振は、敬服の外はない、要するに年齒僅に二十九歳の青年將校が、五千の大兵を恰も手足の如く動かして勝を制する其手際は、眞に武將の鑑である。

されど一方には絶えず押寄せ來る甲州嵐に惱まされて、これに當る方策に

百々、眞福寺の戦

日も足らぬ有様であつた。

元龜二年三月に信玄は遠州の高天神の城を攻め、山縣三郎兵衛昌景、秋山伯耆守信友等をして、足助の土兵を募つて岡崎を襲はしめんとした。阿知和右衛門玄鐵、青山喜大夫、忠門、百々村に柵を構へて之を防ぎ、潰敗せしめた。然るに四月の二日に、信玄また遠江の土兵をして火を岩津に放たしめた。内藤彌次右衛門家長、青山喜大夫、阿知波玄鐵、またこれと眞福寺の鉄礪山に戦つて打破つた。忠門疵を蒙りて遂に死す。

竹廣、乗本の

秋山信友は、また田嶺の菅沼小法師、刑部少輔及びその族彌三右衛門定直、定直の弟八右衛門定仙、井道の伊賀守三照、作手の奥平美作守貞能を降して、竹廣に攻出たるを、菅沼定盈、設樂貞道、西郷清員等逆撃して秋山を退けたるが、つゞいて遠江乾の城主天野宮内右衛門景貫、その子小四郎景原は、長篠の乗本村に打つて出た。長篠城主菅沼新九郎正貞之を邀へ撃つ、城方菅沼道滿討死し、双方死傷多く交綏した。

急度染一筆候仍今度至駿州雖敵動候其谷無事満足候光明之番申付候間定而可被移候歟

彌谷中堅固之備任入候、就中子息小四郎此度長篠於法本最前越河則合鍵別而粉骨感悦候

其上無何事其地被相退候由勝頼大慶不過之候猶玄蕃頭江尻在番候間用所等可被相談候
恐々謹言

元龜二年六月七日

勝頼判

天野宮内右衛門尉殿

(天野文書)

長篠城武田氏に降る

程なく秋山信友長篠城を圍む、田嶺の臣菅沼道壽と云ふ者、菅沼伊豆守滿直と共に正貞を諭して降らしめた。

正貞即ち其族八左衛門を質として信玄に送り、また菅沼定盈を誘ふたれど、定盈は之を卻けた。

足助地方武田氏に降る

四月十五日に、信玄はその子勝頼と共に、二万五千の兵を率ゐて西參河に侵入して足助城を攻めた。城主鈴木越後守重直、城を棄て、額田郡細川に遁れ、阿摺、淺谷、大桑、田代、大沼等の塞壘皆潰ゆ。即ち轉じて東參河の作手に出で、作手の奥平、田嶺、長篠の菅沼を案内者として野田城に迫つた。家康濱松を出で、吉田に來り、遙かに應援した。

たかさうに遣遙軒留守に被仰付、北條氏政人質助五郎殿兄弟の番を、うへの原加藤にかたく仕候へさ有りて、氏政の質を送るは此平十一の條説れり北條方へ境目にさしおかるゝ人二萬三千の人数をもつて、信州伊奈郡において勢揃あり、殊更合戦のなりし被仰含、三月廿六日信玄公たかさうを御立あり、西參河へ御發向候て、四月十五日に足助の城へさりつめなされ候處に、城

主鈴木越後守城わたり罷退候、預よき城なれば、御かゝへあり、信州侍下條伊豆守をさしおか

れ候、其後落城は、あさかい溝賀井、朝谷、淺谷に作る、あすり 阿須利、安城、足利、安代に作る、守將は鈴木忠大沼守將は木村九郎左衛門吉次の代にして、安宿は吉次の祖父なれば、遠軒は師も吉次か田代左衛門にも作る、守將は松平五平、二部松には森外記、松平主殿、或は其五左衛門とす、重修、松八桑 守將を鈴木五左衛門とすもの、六の城落て、平親清の條に此事を載せ、蓋聞、實稿にも親清と定めてある

又東參河へ御馬を向られ候へば、野田の少こなたに、さりでを仕り、菅沼新八郎云々云ふ侍大將罷有候、家康おさへには、秋山伯耆守友馬、馬場美濃春保、科彈正俊正はんさい、松田、伊奈、伯耆組衆に、武田典麻大將にて如此、さて新八郎さりてへは、山縣三郎兵衛景昌、小笠原掃部大夫景隆、尾張主、相木市兵衛、三川三方衆、つくで、たみれ、長篠、此三頭、案内者合六頭に、四郎勝頼公大將にて取懸られ候に、新八郎さりてをあげすて罷退候、山縣衆追懸、菅沼新八郎がものごもを上高名故信玄公、小菅翠石に御褒美被下候、扱又菅沼新八郎は居所へつばみ候云々(甲陽軍鑑)

信玄西上を企つ

元龜三年に入り、信玄は大舉西上せんと決し、まづ大阪の僧徒及び松永久秀と謀り、また淺井長政、朝倉義景と結んで、織田氏を制せしめ、加越の一向宗徒をして上杉謙信と戦はしめた。北條氏とは、元龜二年に、氏康歿して後、其子氏政と和睦を結んだのである。

形勢此の如くなれば、家康は信長と謀つて上杉謙信と攻守同盟を約した。十月の三日に及んで、信玄は北條氏の援兵を合せて三萬五千の兵を率ゐて

甲斐を發し、山縣昌景に五千餘の兵を授けて東參河に入らしめ、我が遠州に侵入するを待つて來會せしめた。

於、越中賀州衆輝虎對陣此表出陣遅々意外候一昨日參州衆先衆被遣候信玄者今朔日打立候可御心安候畢竟其表堅固御備肝要候恐々謹言

十月朔日

信玄

謹上

朝倉左衛門督候

(義景)

如露先書今朔日既打立候彌其表被得勝利候様義景被遂談合無油斷行肝要候猶陣中ヨリ可申候恐々謹言

十月朔日

信玄

淺井備前守殿

(長政)

只今出馬候此上者無猶豫可及行候八幡大菩薩富士淺間大菩薩氏神新羅大明神照覽非僞候義景被相談此時可被開運行尤候恐々謹言

十月三日

信玄

淺井下野守殿

(久政)

同 備前守殿

(以上南行雜錄)

前略 信玄向遠州參州立武色之條德川家康織田信長依好深家康信長無二無三信長ニ事切當方へ入魂信玄可押詰内談事終略中信玄事は信長家康令談合一字不明候氏政は信玄押詰は以其足けたをすべく候略中恐々謹言

天正元

四月廿四日

謙信判

小田太郎殿

(歷代古案)

信玄の出馬は七月中にあるべき筈が、十月に及んだのは、方略の未だ熟せざるものがあったからであらう。然も十月一日の出發の豫定が、更に三日に延びた事は先の文書によつて明である。

信玄は青崩嶺より周知郡に入り、乾城主天野景貫を嚮導として、多々羅、飯田の二城を攻落し、又久野城を攻めたるが、久能宗能固守して降らなかつた。甲斐の軍乃ち進んで袋井、見附の間、木原、西島に陣した。家康よりて内藤三

左衛門信成をして斥候たらしめ、更に本多忠勝、大久保忠世をして援けしめたるが、敵の追躡に遇ひ、彼の一言坂の戦となりて、甲軍をして、家康に過ぎたる者が二つあり、唐の頭に本多平八と謠はしめた。(唐の頭は、白熊の飾りを著けたのであらうか)

二股城陥る

信玄は、その子勝頼並に左典厩信豊、及び穴山梅雪をして二股城を攻めしめ、馬場美濃守信春に四千餘騎を與へて濱松の援兵に備へしめた。二股城は、中根平左衛門正照、松平善四郎康安、青木又四郎貞治(また吉繼)等守りしが、水道を斷たれて遂に陥つた。家康二股を救はんと、天龍川を渡りたれど、城陥ると聞いて軍を收めた。

此時宇津の砦は孤立したるを以て、決死の士に非ざれば守り難きを、松平備後守清善進み請うて守衛に就いた。

三方原の戦

十一月に入つて、織田氏よりの援軍佐久間右衛門信盛、平手監物清秀(或は汎秀に作る)、瀧川左近將監一益等、濱松に入つた。

十二月に入つて、信玄四萬餘の兵を率して三方原に陣し、濱松城外の村里に火を放つた。是に於て、家康は、敵城下を押通るに、大軍なればとて手を束ね

て鋒を交へざるは、大丈夫の恥づる所と、廿二日に決然城を出で、大に三方原に戦つた。

三方原戦記

十二月二十二日の朝、信玄は濱松城を南にして、祝田刑部より井伊谷を経て、東參河に入らんとす。信玄は先きに既に織田氏の援軍一隊、濱松城に入りたるを知れど、なほ織田氏の大軍が、岡崎山中より、吉田白須賀迄陸續東下せる由を聞き、遂に濱松城を攻撃して徒に日子を費し、あた

ら軍兵を疲勞せしめんよりは、速に西上の目的を達せんを得策となしぬ。
一方、濱松城内にては、織田氏の諸將をはじめ、家康の老臣等、今日の合戦は萬々利を得ること難かるべし、思ひ止まり給へど、頻に諫めたれど、先きに北條氏が、武田氏の軍に小田原城下を蹂躪せられ、一兵をも出さずして世の笑を招きたる例もあり、堅く執つて聽かず、家康時に年三十一、壯年の意氣は一矢も酬ゆるなく、徒に傍觀するに忍びざりしなるべし。

家康の全軍凡そ一萬、犀ヶ崖の北方に陣し、酒井左衛門尉忠次並に織田氏の三將瀧川佐久間平手を右翼とし、石川伯耆守數正、大須賀五郎右衛門康高、小笠原與八郎長忠、松平甚太郎家忠、松井左近忠次、本多平八郎忠勝等を左翼とし、家康自ら旗本の兵を率ゐ、その先鋒に榊原小平太康政を置き、横隊に陣を布く。

然るに信玄は、なほ一二の部隊をさめて濱松勢の要撃を拒がしめ、本隊は依然として行進を続けんとせしが、小山田右兵衛信茂が、屬兵上原能登、並に室賀山城入道行俊の偵察によりて、敵軍の旗幟整はず、軍紀振はざる由を知り、然らば一戦して粉碎すべしと、小山田信茂に先隊を命じ、山縣三郎兵衛昌景、内藤修理昌豊を之に加へ、二陣に、馬場美濃守信春、武田四郎勝頼、左馬助信

豊左衛門佐信利、穴山梅雪、板垣五郎信顯、望月甚八郎信益、土屋左衛門佐、跡部大炊介、第三には、小山田備中、栗原左兵衛、今福丹波等、第四には、原半人佐、相木市兵衛、安井左近大夫、駒井右京等、後陣には、武田道遠、軒一條右衛門等、旗本に、市川宮内少輔、三枝勘解由左衛門、武田兵庫助等を置き、縦隊に軍を整へて徐々に南下し

(三方原戦に家康着用の兜)



(藏所寺藏法宿本)

来る。

鳥居四郎左衛門忠廣は、敵陣近く馬乗せて斥候し、馳せ歸りて報じて云ふ、今日の合戦然るべからず、敵陣堅くして勢猛なり、速に先鋒の軍を引取りて退却せらるべし、若し一戦あらんとならば、敵の祝田に到らん後、背後より追撃すべしと、渡邊半藏守綱また見て歸り、軍を仕掛けたまはゞ利あるべからずと云ふ、家康聽かず、此時既に小山

田の兵佐久間信盛の軍に逼る、時は申の刻(午后四時)雪類に降り来る、小山田の軍織田勢を突崩し、平手汎秀戦死を遂ぐ、酒井石川奮戦して小山田の軍を突破る、馬場美濃守入代りて烈しくもり返す、本多忠勝、榊原康政、大久保忠世突いて蒐り、馬場の勢を追立る、家康の旗本、また山縣の勢に攻蒐りて追崩す、折柄四郎勝頼、大文字の旗押立て、横筋違に家康の旗本に突いてかゝる、馬

場また反撃し、山縣小山田の軍も返し合す、信玄機を見て米倉丹後重繼をして横槍を入れしむ。重繼心得たりと酒井の備を攻敗る、左馬助信豊、穴山梅雪、内藤昌豊等、家康の軍の後へ廻りて前後より攻立つる。家康の軍大に亂る。信玄乃ち令して總軍一同に鬨を發して攻かゝる、時正に黄昏、雪盛んに降り来る中に、濱松勢總崩となる。

此戦に家康方の戦死する者、本多肥後守忠真、鳥居四郎左衛門忠廣、米津藤藏正義、中根喜藏、重利、中根平左衛門正照、青木又四郎吉繼、夏目次郎左衛門吉信、大久保新藏忠奇、米津小大夫政信、榊原攝津守忠次、石川半三郎正俊、杉山久内吉明、松平彌右衛門、江原又助、川澄源五郎通成、天野夢右衛門、政景、岩堀勘解由左衛門父子、安藤奎之助、基能、渡邊十右衛門永直、同新九郎、加藤九郎次郎正信(或は景元)、長谷川紀伊守正長、小笠原新九郎康元等、屈竟の勇士三百餘人。

家康漸く濱松城に入り、鳥居元忠をして南大手玄駄口の門を開き、大篝火を白晝の如くに焚かしむ、武田の先陣馬場信春、山縣昌景押寄せ來りたれど、この有様に謀略あらんかと疑懼せる折しも、我が敗兵の歸還せるもの、背後より敵隊に斫入り、鳥居元忠、渡邊守綱、同政綱、櫻井庄之助勝次、勝屋甚五兵衛等百餘人、城中より衝いて出でたれば、寄手大に驚き、名栗の宿、廣澤山普濟寺などに火を放ちて退く。この夜信玄は屏ヶ崖に屯し、篝火を焚き備を嚴にす。大久保忠世、天野三郎兵衛、康景と議し、深更敵を劫かしくれんと、銃士を集むるにやうく十六人を得たり、これに百人の輕卒を加へ、案内は知りたれば、間道より敵の背後に出で、急に鐵砲を打掛けたれば、武田の軍驚き、屏ヶ崖に落ちて死する者數十人。(増補家忠日記、武徳大成記、大參河志、四戰紀聞、改正後風土記、日本戦史)

戦記餘聞

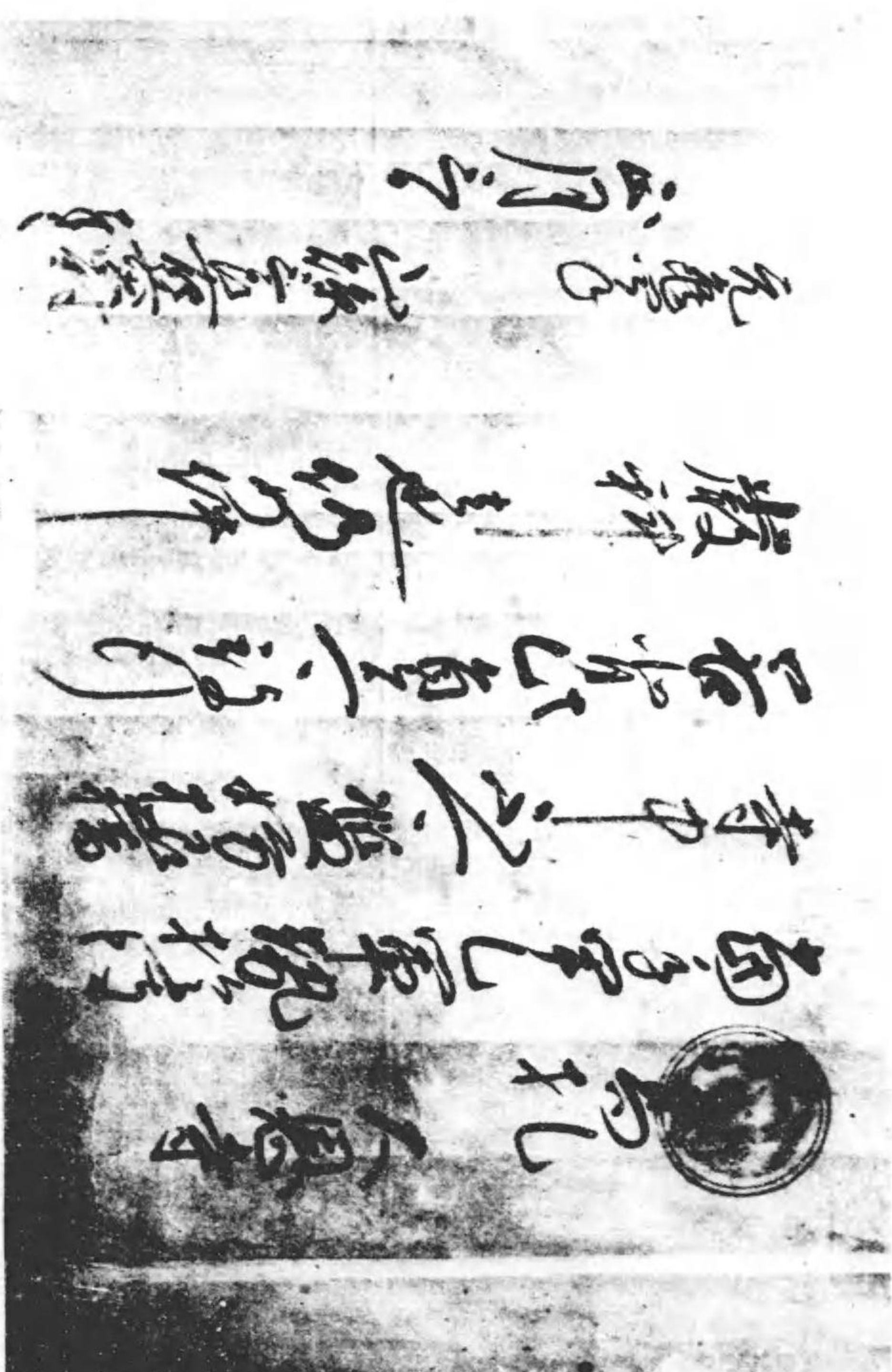
この軍既に敗れ、殆ど危急に及ばせ給ふ時、夏目次郎左衛門吉信は、兼て濱松城を留守せしが、いそぎ手勢引具し、御前に馳参じて御歸城を勧め奉る。君、われかゝる敗軍し何の面目ありて引返すべきや、且敵わが軍後を競へば、兵を返さん事もかたし、たゞ此所にて討死せんま宣ひて聞入給はれば、吉信御馬の口取りし、畔柳助九郎武重にむかひ、我は君に代りて討死すべし、汝は速に御供して歸城せよといひて、自ら二十五騎を打從へ、十文字の槍取つて、かしくも御名をさなへ、追來る敵と渡り合ひ、おもふ様に戦ひて討死す。この間に武重は御馬の口取て引かへさんとするに、御鎧踏立て二、三度蹴させ給へども、武重いさゝかも動かす、強て御馬を引立、濱松の方へ引返す。敵猶も追かけ來れば、松井左近忠次、戦疲れて林の中に息ひて居りしが、にはかに走りいで、御着背長の朱色に成て敵の目に付けば、己が鎧を着せかへ奉り、已れ御鎧をたまはり、又己が馬をも奉り、みづから松井忠次と名乗りて敵を二、三度追崩せり。武重はからうじて供奉し、濱松に歸りて、御門明けよと云ふに、番兵たやすくうけがはれば、殿の御供して助九郎が歸つたるぞとよばはるを聞いて、はじめ御門を明て入れ奉る。即ち助九郎に命じて城外を巡視せしめ、御腰にさゝせられし扇を助九郎に賜ひしが、折しも雨にうるほひて扇の紙さ骨の離れしなもて、後に助九郎が家の紋さなしける。忠次もはじめ林中より出でし時、蕨の葉の胄の上に附きたるを御覽じて、汝が今日の功莫大なり、この後は蕨の葉をもて家のしるしとし、後裔に傳へよと命ぜられ、今に家の紋さなしぬ。はるか年經て後、夏目吉信が二子をめし出して、我その時危急をまぬかれ、いま天下一統の業をなせしも、全く汝が父の忠節によれり、御涙を浮べて仰せられしとぞ(貞享書上、大參河志)。

この戦に、夏目が外にも忠戦を抽んで、御感にあづかりし者少からず、水野太郎作正成は、敵の追來るに度々取つてかへし、敵を追はらひ、難なく御歸城あり、君の仰に、一日七度の鎗と云ふこ

とは聞傳へたれど、今日の太郎作が働にはいかで及ぶべきとて、御賞詞あり、天野三郎兵衛康景は、冑付の首提て御後に附隨ひ、内藤四郎左衛門正成も、同く從ひ來りしが、敵の弓を持しもの御側ちかくより來るを見て、正成汝は何者なりと告むれば、康景後よりその弓を踏落すゆゑ、敵にげ走る、又孕石忠彌と云者、御馬の尻を捉へて引とめんとす、君御刀もて馬尾を切拂はれ、忠彌が倒るゝ所へ、松井左近忠次馳來り、忠彌を討とむ。小笠原次右衛門定信は、山縣昌景が手に打むかひ、能敵討て、黃の四半の先へ、茜の吹貫出せし指物に、首と添て御覽に供しかば、御感な、めならず、かゝる所へ、その父信倫戦死せしよし告げ來りしかば、直に引返し、戰場に馳向ふ。折しも敵三人して父の首をあらそふ所へ行あひ、二人をば即座に打取り、一人に手を負せ、父がしるしを得てかへりぬ。およそ軍中にて父が仇をその座に打得し事、天の冥助にかなひしといふべしとて、重て御感ある。細井喜三郎勝宗も、御跡打て戦死せしが、その家僕木梨新兵衛、疵七ヶ所負ながら、主の仇打て勝宗が首をもとり返し、御前に出ければ、御褒詞を加へられ、錢一貫文下され、汝黒馬に乗て功を建てたれば、このちは黒さ兵を改むべしと仰あり、勝宗は嗣子なれば、遺跡を弟の喜八郎勝久に嗣しめらる。大久保新十郎忠隣、若年なるが、馬に離れてさまよふ様御覽じて、かれ救へま宣ふ時に、小栗忠藏久次、折りしも敵の馬奪ひ得て乘り來りしが、此御詞承るさひさしく馬より飛下りて、新十郎を扶けのせて、己が身は股に鎧疵負ひながら、少しも屈せず引退く。野中三五郎重政も、御馬に添て引退く所に、甲州侍長ながし、七八騎にて御先に塞がるを、君長めくこの、しらせ給ふ、重政即ち長を馬より突落し、首をさる。こは近年まで小姓勤めし者なるが、御家を出て信玄へ仕へしなり。御歸城の後、三五郎に御盃下され、信國の御刀を引かれ、盃に三日月を蒔繪にしたれば、向後此を吉例として、三日月を以て紋とせしめらる。又御危急なりし時、鈴木久三郎御慶賜りて討死せんま申す、汝一人を討せてわが落ち延

びむこま本意にあらずさて、聞せたまはず、久三郎はした、かなる者なれば、大に怒りて眼を見はり、さて、愚なる事を宣ふものかなさて、強て御座を奪取りて、只一人引返し奮戦す。御歸城の後、あはれむべし久三定めて戦死しつらんを宣ふ所へ、久三郎つと歸り來て御前へ出ければ、殊に御けしきうるはしく、汝よく切拔しと仰ければ、久三郎思ひしよりも手に立ざる敵の様に侍るは、さらぬ顔して座し居たり。櫻井庄之助勝次は、濱松の支駄口を守て居しが、朱鞘の大小さしたる敵の、手負て引退くを、誰も追者なかりしが、勝次是を見て走り出で、そが首を取り、外にも一級さりて還りしかば、大に御感有りて、汝が七本のれち馬連の指物は重くて便よからず、茜の四半の指物にせよと仰ありて、この後改めしこそぞ。(武功實録、家譜、柏崎物語、真享書上、東遷基業、東武談叢)。

濱松に歸らせ給ひし時、げふの大敗にて城中の者ども御安否も知らざれば、大手より還御あらば、さだめて驚恠しつらんとおほしめし、わざと城溝邊を乗廻し、惣懸口より入らせ給ふ、植村正勝、天野康景に命じて大手を守らしめ、鳥居元忠に支駄口を守らしめ、且命ぜられしは、城門は明置て後れ来るものを入るべし、その上敵近よることも、門の明くを見れば、疑ひて遲疑すべし、門外四五ヶ所に燎火を焼かしめよ、さて、埒もなき軍して殘念なりと仰有りて、久野さいふ侍女が供せし湯漬を三度かへてめし上られ、御枕引よせ高軒にて打ふさせ給ふ。左右の者は、今日の大敗に一同人心ちもなきに、少しも驚かせ給ふ事なし、前橋聞書、四戦紀聞、大參河志) 甲斐の馬場美濃守信房、後日に信玄にかたりしは、こたびの戦に、參河勢末々まで決戦せざる者はなし、その死骸を見るに、此にむかひしは皆俯伏し、濱松の方にむかひしは仰倒せり、いづれも戦死せしにて、一人も遁走せしはなしと思はるさて、大に感歎しけり(武徳大成記、武功實録)。三方原の役に、御領内農民ども、甲兵の爲に侵掠せられ、居處を失ひて濱松の城下に集り來りし



(山縣三郎兵衛昌景御札)

(藏所 寺恩大 村津御郡飯賣)

が、それもまた焼拂はれしゆゑ、たゞ道の傍にひれふして、泣かなしむさまを御覽じ、われゆゑに農民までかく艱苦に及ばしむる事のうたてさまにて、御涙を流し給へば、御供の者も覺えず袖をうるはせしこそ、又此時屏が崖へ落て死せし敵の兵士、その數を知らず、後にかの亡靈夜毎に聲を發して泣きさけぶこそ夥し、よりに僧徒に仰せて冥魂を弔慰し給はんとて、七月十三日より十五日まで、種々の絹もて張りし器をつくり、念佛誦をもよほし、盆燈籠と名づけて、三日が間祭奠せしめ給ひしかば、その聲程なくやみけるさなり(武者物語、武邊雜談)。

廿三日に、信玄も兵を收めて刑部に退き、茲に越年したるが、山縣昌景は先鋒として早くも東參河に亂入したる事は、大恩寺の高札によりて知らるゝ。

さて信玄は翌元龜四年(七月廿八日改元)即ち天正元年の正月七日に、刑部を發して濱名峠を越え、長篠に出で、野田城に迫つた。菅沼、奥平の族皆信玄に降りたるが、獨り菅沼新八郎定盈のみ敢然として武田氏に當り、家康の援兵松平與一郎忠正、設樂甚三郎貞通と孤城を固守した。信玄金堀をして城中の水を堀盡さしめた。家康は野田城危しと聞き、兵を八名郡笠頭山に出し、小栗大六重常をして信長に援兵を乞はしめ、援軍至らず、且つ信玄の軍多く、後詰の効なきを知り、兵を退け、城は遂に陥つた。定盈、忠正等自殺して城兵を救げんとしたるが、信玄は山家三方の乞により、三方が先きに家康の許

信玄野田城に
迫る

に出し置きたる質子と、定盈、忠正等とを廣瀬川の上に交換した。

二月十六日に、信玄病に罹り、一旦軍を甲州に收めたるが、三月に入り、病少しく癒えたれば、まづ東美濃に兵を出して岩村城を攻む、信長之を防ぎたるが、馬場美濃守信春の爲めに敗る。信玄轉じて東參河に入り、鳳來寺に陣し、牛窪、長澤を侵し、宮崎に砦を構へ、また足助城には、鈴木彌兵衛、平谷玄蕃等をして守らしめた。

かくて勝頼及び武田信豊に一萬の兵を與へて、濱松よりの援軍に備へしめ、西郷山に本陣を構へ、山縣昌景に八千の兵を授けて吉田城を攻めしめた。酒井忠次、松平伊忠、松平親俊等、之を防いだ。

此時伊勢國司北畠中納言具教は、信玄の上洛を勧め、長嶋の門徒も信玄に與して頻に上洛を迫りたれども、信玄再び病を得て甲斐に退き、四月十二日途(信州下伊那郡駒場)に卒せりと云ふ。年五十三。

信玄卒す

信玄東美濃を攻掠す

武田氏

新羅三郎義光

義清

刑部三郎

清光

逸見冠者

信義

武田太郎

信光

大膳大夫

信政

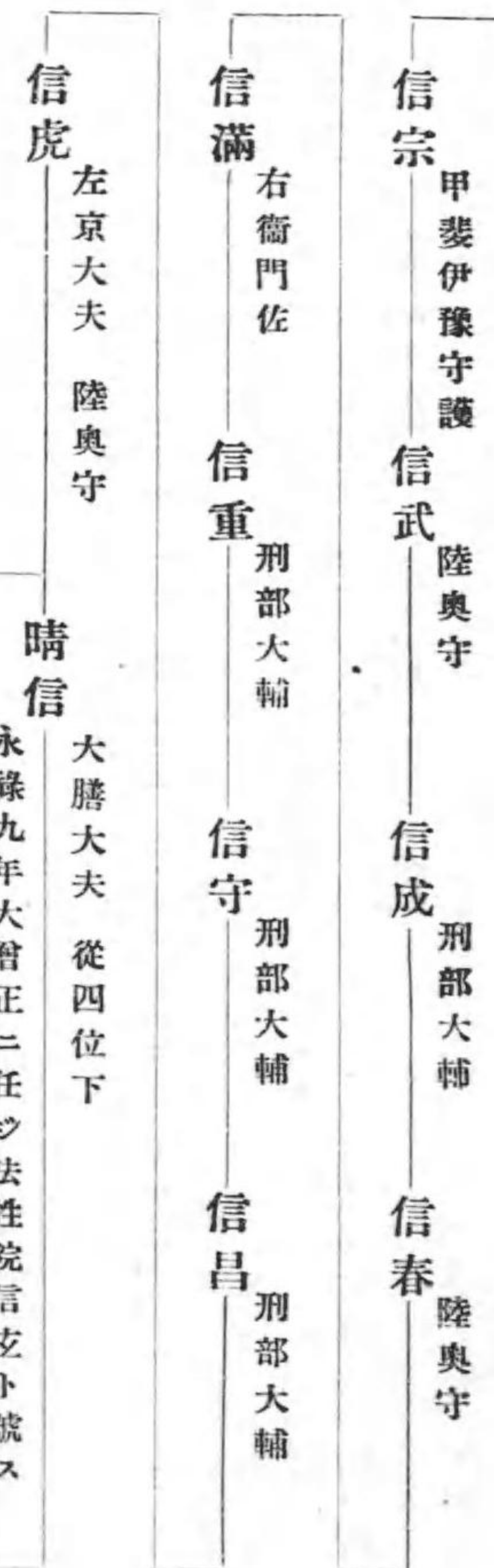
治部少輔

信時

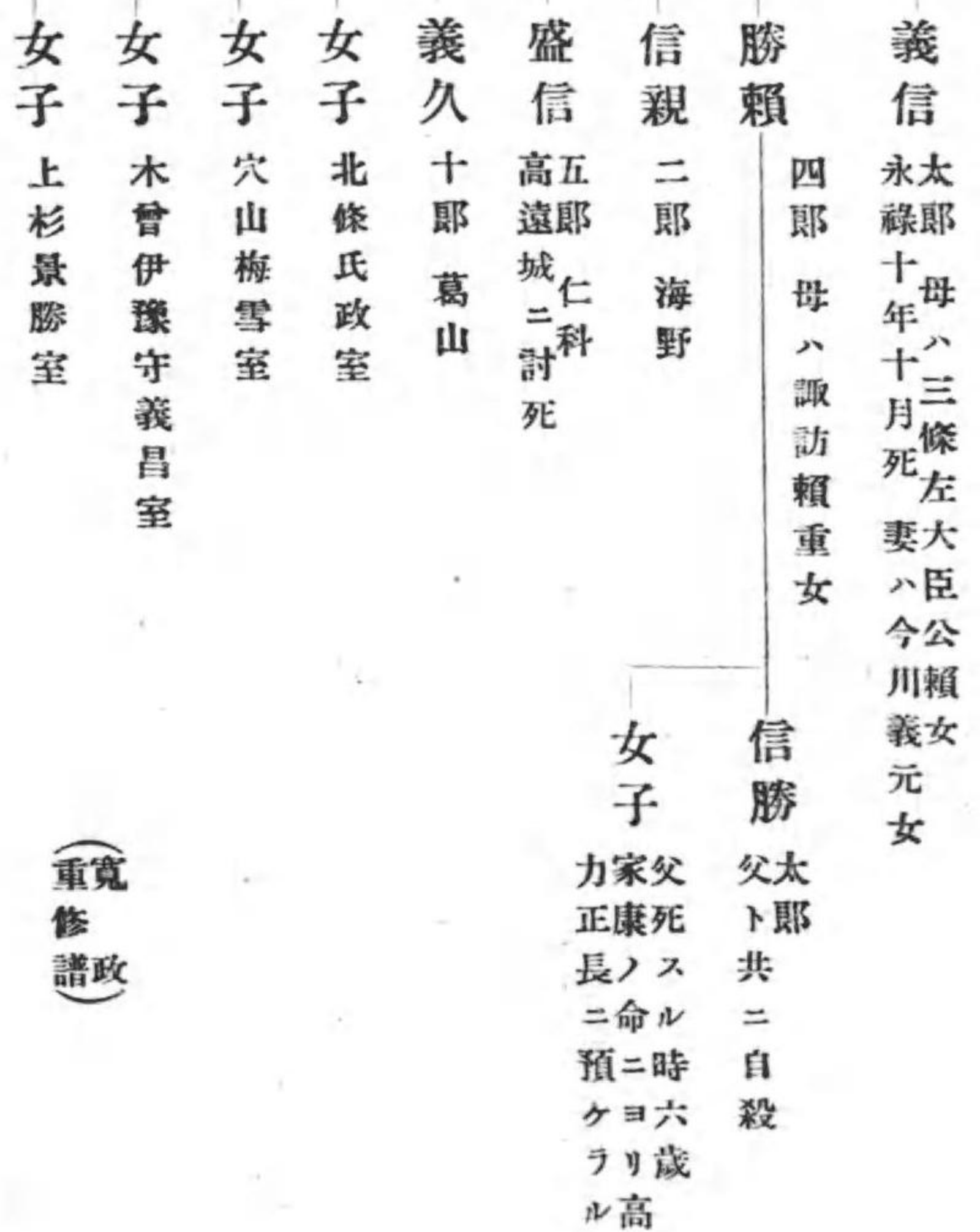
治部少輔

時綱

彈正少弼



「女子 菊亭右大臣晴季室



第二節 参遠の争衡

天正元年三月、信康軍を設楽郡に出した。時に年十五、初陣なればとて、能見

信康武節足助
城を陥る

家康の軍天方
可久輪を攻落
す

家康長篠城を
圍む

長篠城陥る

松平の次郎右衛門重吉をして甲を撰せしめた。信康まづ武節城を攻む、菅沼刑部貞吉の兵守りたるが、兵威に恐れて城を棄て、逃る。仍つて直に足助城に向ふ。鈴木彌兵衛等また防ぎかねて遁走した。足助城は舊城なればとて鈴木重直に與へた。

ついで平岩親吉は、久能彈正宗政を天方城に攻めて陥れ、可久輪城は、石川家成、久能宗能に攻められて落城した。

五月六日に家康は岡崎城を發し、九日に駿河の岡部に火を放つて麥を刈り、十日に懸川城に歸り、十三日に吉田城に入り、十四日に長篠に至りて地利を見、六月に及びて長篠城を圍み、八月に入つて攻むること益々急、勝頼は左典厩信豊をして救はしむ。信豊乃ち信濃の兵を卒る、鳳來寺の黒瀬に陣した。同時に逍遙軒信綱、山縣昌景、馬場信春等は遠州に入り、森郷に陣す。濱松城の留守大須賀康高、柳原康政等、小野田に陣し、堀越に戦ひ、交綏したるが、昌景等は家康の來援を恐れて密に陣を撤した。

九月の十日長篠城遂に陥り。守將室賀一葉軒、菅沼伊豆守滿直、同新九郎正貞等、鳳來寺に走つた。これより先きに、作手城主奥平美作守貞能、同九八郎

奥平氏再び家康に屬す

信昌等、款を家康に通ず。城所道壽この由を左典厩信豊に告げた。信豊乃ち貞能を黒瀬に召して詰問したれど、貞能そは無實の讒なりと辯疏し、平然として常の如くなりしかば、信豊の意解けた。貞能作手に歸り、その夜一族を率ゐて城を出づ。武田の兵の追撃せるを打破り、宮崎に退く。家康、松平伊忠、本多廣孝をして、瀧山に迎へしめ、更に平岩親吉、内藤家長を援兵とした。武田勢瀧山を攻め、再び打破らる。勝頼大に怒り、貞昌の妻の質として甲府に在るを磔し、信豊はまた質たりし貞能の末子仙丸、及び奥平貞直の女を鳳來寺に磔した。奥平氏ますく武田氏を怨んだ。

於義丸生る

此年の末、勝頼兵を遠州に出して見附に至り、二股、乾、光明、天方、多々羅の諸城を巡見し、金谷の臺諏訪原に城を築いて歸路に就いた。天正二年二月八日に、於義丸、越前黃門秀康生る。母は池鯉鮒明神の祠官永見志摩守(吉英、永見家由緒略記には淡路守とある)の女、或は村田意竹の女とも云ふ。故あつて濱松城内を出で、本多廣孝の臣本多半右衛門の許に居り、濱松近くの産見村に於て於義丸を生んだ。

半右衛門この由を作左衛門重次に告げた。重次これを信康に申す。信康

勝頼高天神城を攻落す

いはく、われ兄弟なきを憂ふ、幸に弟生る。汝懇に養育せよと命じた。此年二月に、勝頼美濃を侵した。信長その子信忠と之を拒ぐ、家康兵を足助に出して遙に織田氏の應援をした。五月に入つて勝頼高天神の城を圍んだ。城主小笠原與八郎長忠、援を濱松に乞ふ、家康兵を出し併せて援軍を信長に求む。信長乃ちまづ信忠及び佐久間信盛をして濱松に赴かしめ、自ら之につゞいて吉田に至る、勝頼これを聞いて城を攻むること甚だ急、六月十七日城遂に陥つた。信長今切の渡に着き、城陥ると聞いて軍を吉田に返した。家康來り會し、遠來の勞を謝して黄金を贈つた。

八月に家康馬伏塚の舊壘を築いて大須賀康高をして守らしめ、高天神に備へ、小笠原長忠の族にして、武田氏に降るを肯んせざる者を大須賀の部下に屬せしめた。

酒井忠次鳳來寺の砦を襲ふ

九月に、勝頼また遠州に出で、天龍川の邊に屯して濱松城を窺ひたるが、程なく兵を引いて、二股、井伊谷に至つて信州に入り、別に兵を遣つて鳳來寺の砦を築いた。酒井忠次之を襲ひ、角屋村を焼く、砦の兵大に打破られて遁れ走

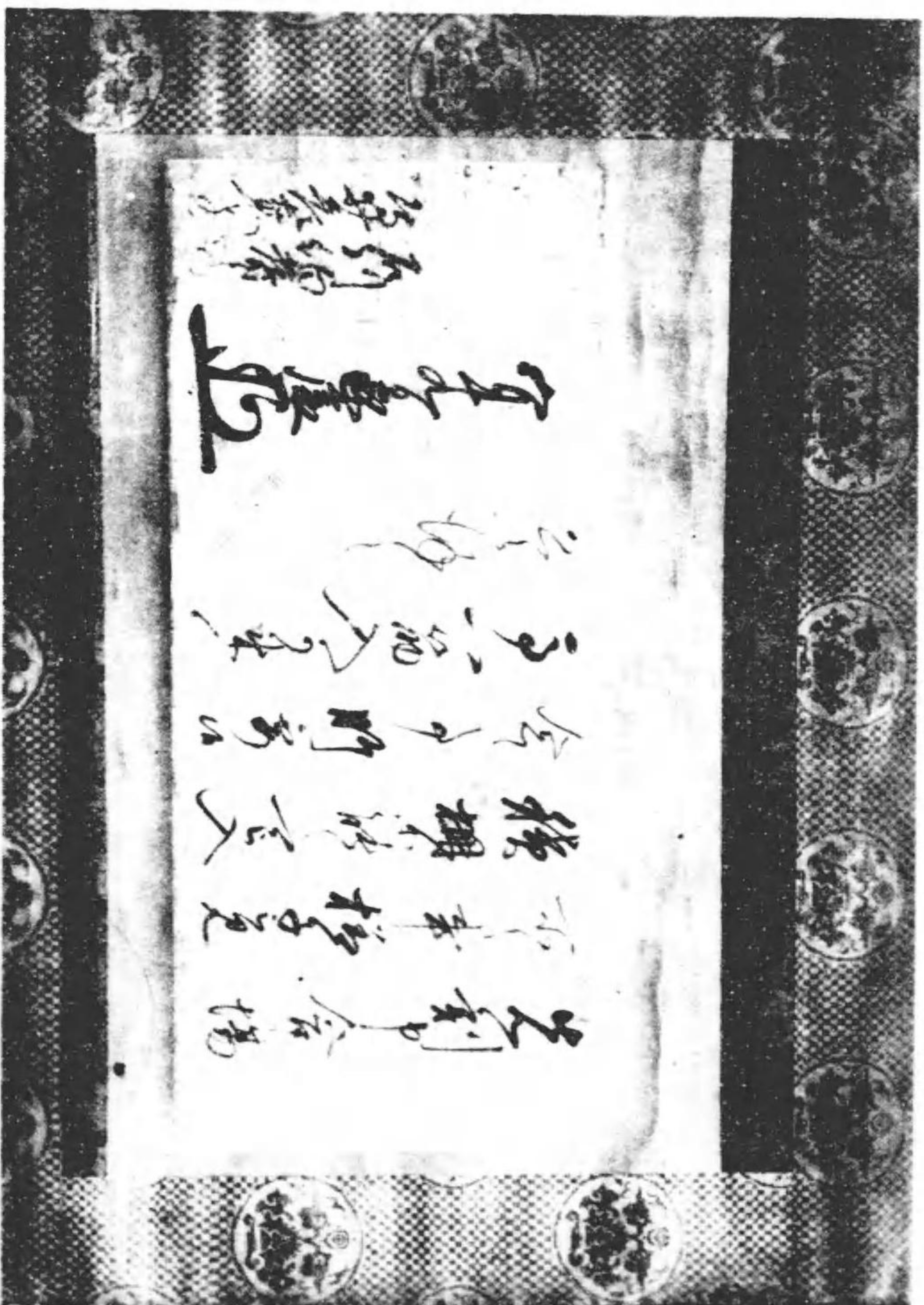
つた。

第三節 長篠の戦

天正三年二月廿八日、長篠城を修築し、奥平九郎貞昌をして之を守らしめ、松平彌九郎景忠その子彌三郎伊昌、援兵として共に立籠つた。

四月五日、勝頼兵を率ゐて遠州平山を経て參州宇利に至る、家康の士大岡彌七郎と云ふ者、もと下賤の生れにして、家康の馬の口取を務めたるが、財務の才幹ありたる爲め、家康次第に用ひて、岡崎の町奉行として能見郷に屋敷を賜ひ、また奥郡二十余郷の代官をも命じたるが、私腹を肥す事多かりしのみならず、密に野心を企て、倉地平左衛門、山田八藏、小谷甚右衛門など、謀りて、勝頼に志を通じ、岡崎の城に甲州の兵を引入んとした。時に山田八藏變心して、この謀を信康に告ぐ、信康謀つて大岡を擒にし、倉地平左衛門の家に兵を出して之を戮した。獨り小谷甚右衛門のみは遁れて甲州に走つた。彌七郎は岡崎の町口(連尺町の辻とも云ふ)に生ながら土中に埋め、竹鋸を以て之を截らしめ、其妻並に子四人を念石原に磔した。

大岡彌七郎の
反逆



(長篠合戦の書(一))

勝頼長篠城を
圍む

吉田城外の戦

信長岐阜を發
し、家康信康
軍を野田に進
む

鳥居強右衛門

四月二十一日、勝頼いよ／＼長篠城を圍む。五月六日、勝頼兵を別ちて火を二連木、牛窪に放つ。此日家康は、吉田城外二連木に陣し、信康は岡崎を出で、山中の法藏寺に屯した。勝頼の兵一萬、家康戰ふの不利なるを知り、兵を城中に收む。忠次後殿となり、武田氏の先鋒と烈しく戰つた。七日に忠次城を出で、山縣昌景と詞を交して、鏑を合せ、奮戦して甲軍を退けた。豫て小栗大六を岐阜に遣はして、信長に長篠の援兵を乞はしめしを以て、信長は十三日に岐阜を進發して、十五日に岡崎に着いた。家康乃ち信康と共に野田に軍を進めた。

十四日の夜、彼の鳥居強右衛門勝商は、密に城中を忍出で、十五日に岡崎に赴いて信長に面し、十六日の夜捕へられ、十七日の拂曉城中に向つて、參河物語に云へる如く、信長は岡崎迄御出馬有るぞ、城之介殿(信忠)は八幡迄御出馬なり、先手は一の宮本野が原にまん／＼陣取りてあり、家康信康は野田へうつらせたまひてあり、城けんごにもち給へ、三日の内に御運をひらかせたまふべし云々と叫んだのである。城中の喜びおし測られた。

かくして廿一日の長篠大合戦は始つたのである。